研究報告書　第72号

キャリア教育に関する研究

キャリア教育の取組における工夫と改善

平成21・22年度

茨城県教育研修センター

目　次

Ⅰ　研究の概要----------1
Ⅱ　キャリア教育の取組における工夫と改善----------2
　1　キャリア教育を推進するための校内組織体制----------3
　2　教職員の共通理解を図るための校内研修----------4
　3　キャリア教育の視点での教育課程の見直しと改善----------5
　4　各校の児童生徒の実態等に照らした「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」の自校化----------6
　5　キャリア発達課題を踏まえた段階的な取組----------7
　6　学校外の教育資源（家庭，地域，企業，関係機関等）との連携----------8
　7　キャリア教育を推進するための体験活動----------9
　8　キャリア・カウンセリングの理解----------10
　9　改善につなげるためのキャリア教育の評価----------11
　10　ポートフォリオの活用----------12
Ⅲ　研究協力校実践事例----------13
　小学校実践事例１　結城市立結城小学校
　「自他のよさを認め，互いに高め合う子どもを育てる―交流活動を通して―」----------14
　小学校実践事例２　龍ケ崎市立八原小学校
　「夢に向かって主体的に取り組む児童を育成するためのキャリア教育の工夫と改善」----------22
　中学校実践事例１　神栖市立神栖第四中学校
　「キャリア・カウンセリングを生かした教科指導と職場体験活動の工夫」----------30
　中学校実践事例２　小美玉市立玉里中学校
　「体験活動を生かしたキャリア教育の工夫と改善」----------38
　高等学校実践事例１　県立取手第二高等学校
　「総合的な学習の時間を中心としたキャリア教育の取組」----------46
　高等学校実践事例２　県立結城第一高等学校
　「コミュニケーション能力を育成する『書かせる指導』とインターンシップの工夫と改善」----------54
Ⅳ　研究の成果と今後の課題----------62
　1　研究の成果----------62
　2　今後の課題----------62
〔主な参考文献等〕----------63
〔研究関係者一覧〕----------64

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題　　キャリア教育の取組における工夫と改善

２　研究の趣旨

キャリア教育の具体的な取組に関する研究を行い，学校教育の充実に資する。

３　研究の内容

平成20年度までのキャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発に関する研究の成果を踏まえ，理論研究，研究協力校との連携及び研究協議会を通して，キャリア教育の具体的な取組の工夫と改善について研究する。

４　研究期間

平成21年４月～平成23年３月（２か年事業）

５　研究方法

(1) 理論研究

研究助言者の講義等をもとに，キャリア教育に関する理論研究を行う。

研究助言者

早稲田大学大学院教職研究科教授　三村　隆男

(2) 実践研究

研究協力校及び研究協力員を委嘱し，研究協力員と県教育研修センター指導主事等による研究協議会を開催するとともに，研究協力校との連携を図りながら，実践研究を進める。

研究協力校

小 学 校：結城市立結城小学校
　　龍ケ崎市立八原小学校
中 学 校：神栖市立神栖第四中学校
　　小美玉市立玉里中学校
高等学校：県立取手第二高等学校
　　県立結城第一高等学校

Ⅱ　キャリア教育の取組における工夫と改善

本教育研修センター教職教育課では，平成19・20年度に「キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発」に関する研究を行いました。（詳細については，研究報告書第65号「キャリア教育を推進するためのカリキュラムの開発」を参照してください。）

その結果明らかとなった成果と課題，「校内研修支援に関する事業」で得られた情報，最近の国や県の動向等を踏まえ，以下のような課題を研究の方向性として設定し，理論研究及び研究協力校による実践研究を行いました。

1　キャリア教育を推進するための校内組織体制

2　教職員の共通理解を図るための校内研修

3　キャリア教育の視点での教育課程の見直しと改善

4　各校の児童生徒の実態等に照らした「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」の自校化

5　キャリア発達課題を踏まえた段階的な取組

6　学校外の教育資源（家庭，地域，企業，関係機関等）との連携

7　キャリア教育を推進するための体験活動

8　キャリア・カウンセリングの理解

9　改善につなげるためのキャリア教育の評価

10　ポートフォリオの活用

理論研究及び研究協力校による実践研究より，キャリア教育の取組における工夫と改善について，以下のことを提言します。

１　キャリア教育を推進するための校内組織体制

学校の教育活動全体を通してキャリア教育を推進するためには，全教職員がキャリア教育の意義を十分に認識し，キャリア教育を学校経営計画の中に位置付け，関係する分掌全てを有機的に結び付ける方策を考える必要があります。そのためには，「キャリア教育推進委員会」などの組織を設けることが有効と考えられます。（図１）

図１　キャリア教育を推進するための校内組織図（例）

また，委員会の下部組織として，具体的な研究と提案をする少人数によるプロジェクト・チームを作ることも考えられます。これによって，目標達成，課題解決に向けて，まず少人数による密度の濃い議論が行われるなど学校の時間的負担を軽減しながら改善の効果をあげることができます。（図２）

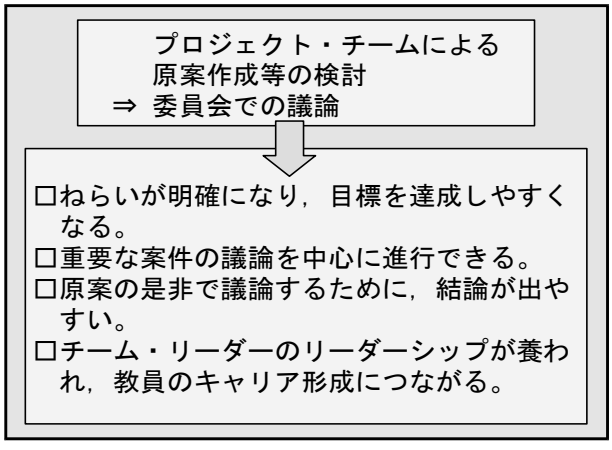


図２　プロジェクト・チーム方式の利点

手順としては，まずプロジェクト・チームのメンバーが原案作成などの検討を行います。次に委員会の全員で検討し，その後，全教職員で議論します。

プロジェクト・チーム方式の場合，チームに参加する教職員と参加しない教職員との間で，取組に対する認識の差が生じることが懸念されます。その差を埋めるためには，チームの結論として何を実行するのか，なぜそれが必要となるかのなどを全教職員に対して丁寧に説明する必要があります。

また，校種別にみると，それぞれの実情を踏まえた工夫が考えられます。例えば小学校においては「キャリア教育部」の立ち上げ，中学校，高等学校においては既存の「進路指導部」を「（進路指導・）キャリア教育部」とし，組織を改編することなどです。

２　教職員の共通理解を図るための校内研修

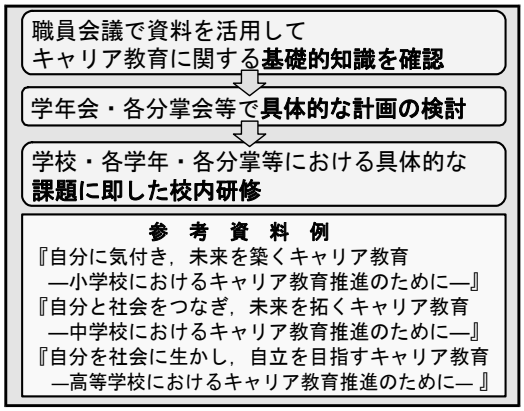


図３　キャリア教育推進のための校内研修例

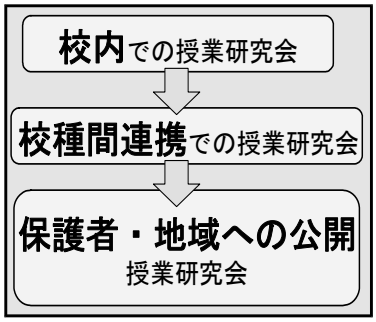


図４　授業研究の校内研修例

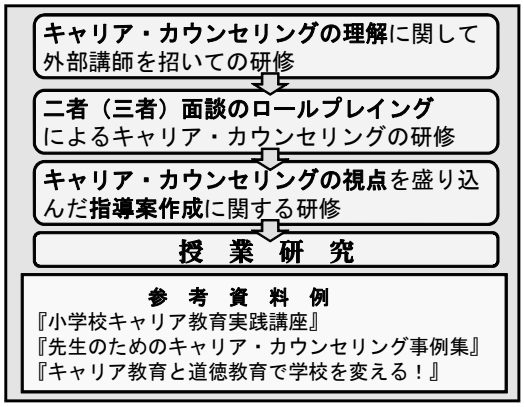


図５　キャリア・カウンセリングに関する校内研修例

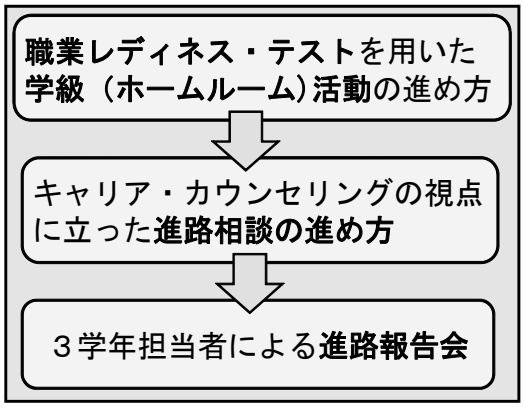


図６　進路指導に関わる校内研修例

キャリア教育の推進には，全教職員が児童生徒のキャリア発達や，キャリア教育の意義を十分認識することが重要であり，児童生徒，学校，地域の実態に応じたキャリア教育の進め方を検討しながら，学んでいくことが求められます。

キャリア教育は，全ての教育活動にかかわらせることができるものですが，それだけに分かりにくいものにもなります。また，教科のねらいを達成することが不十分になってしまうのではないか，との不安や不満が出ることもあります。それだけに，導入の時点はもちろん，折に触れて研修を重ねていくことが必要です。（図３）

キャリア教育に関しての研修を行う際には，参加者の積極的な取組を促すために，ブレイン・ストーミングやＫＪ法的手法を取り入れることが有効です。また，外部から講師を招聘（しょうへい）したり，校外研修を受けた教師を講師とするなど，積極的に正確で最新の知識を取り入れる工夫が必要です。さらには，実践報告がなされている文献などを基にした学習会という形も考えられます。また，キャリア教育が学校段階間のスムーズな接続を目指すものであることから，校種間連携での授業研究会なども意味があります。（図４）

キャリア教育を進めるためには，児童生徒と適切にかかわり，その変化を的確にとらえることができる人間関係形成能力（コミュニケーション・スキル）や基本的なキャリア・カウンセリング能力の習得が求められることから，キャリア・カウンセリング（p.11参照）に関する研修も重要です。さらに，学校全体として，学習指導案にキャリア・カウンセリングの視点を盛り込むことで，教科学習とキャリア教育を強く結び付けることができます。（図５）

中学校，高等学校においては，３年生になってから急激に進路意識を高めようとすると無理が生じます。学校全体，担任などが３年間を通して無理なく生徒のキャリア発達を促し，進路指導を進めることが重要です。したがって，３年間の系統的な取組により生徒の進路意識を醸成していくための研修が求められます。（図６）

３　キャリア教育の視点での教育課程の見直しと改善

キャリア教育を推進するためには，キャリア教育の視点に立って，各教科等の関連する諸活動を体系化し，計画的，組織的に実施することができるよう，各学校が教育課程編成の在り方を見直していく必要があります。また，校内組織，各教科等，異校種間などをキャリア教育の視点でつなぐことで，効果的にキャリア教育を進め，それぞれの教育活動の質を高めることができます。なお，キャリア教育の視点とは，児童生徒のキャリア発達を支援する観点であり，将来の社会的自立・職業的自立を念頭に置きながら，子どもたちの成長や発達を促進する見方をもつことです。（図７）

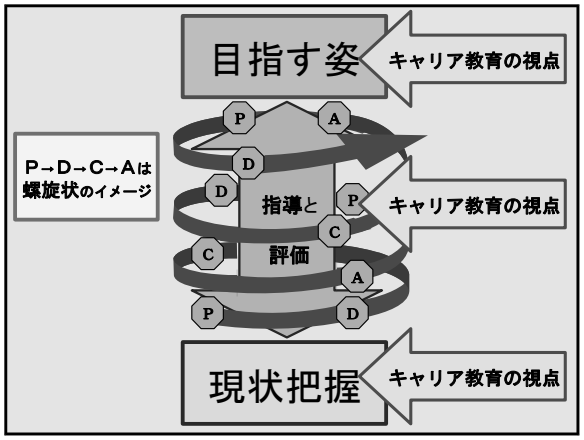


図７　キャリア教育の視点での教育課程の見直しと改善のイメージ

図８　キャリア教育の視点でつなぐイメージ

	各　教　科	総合的な学習の時間	道　徳	学級活動
４月	社会 ・米作りのさかんな庄内平野【職業】	「広げようお米ワールド」 ・米作り農家の見学【職業】	いつも全力で（不撓不屈） 【計画】	楽しい学級をつくろう【職業】
５月	国語 ・伝え合おう，５年生でがんばりたいこと 【コミュ】	田植え体験 【計画】 【コミュ】	・ ・ ・	・ ・ ・

凡例　【コミュ】：コミュニケーション能力
【職業】：職業理解能力　【計画】：計画実行能力

図９　年間指導計画をつなぐ例

手順としては，まず学校の学年，教科などの全体計画を俯瞰（ふかん）し，キャリア教育の視点で見直すことから始めるのがよいでしょう。各教科等の単元・題材などで育成することが期待できる諸能力を明らかにすることにより，全体計画の一覧からキャリア教育としてつながるものが見えてきます。

次に，年間指導計画では，重点的にキャリア教育の視点を取り入れて指導できるところを見付けます。現在の計画の中で関連があると思われるものに枠囲いしたり，マークを付けたり，関連を表す←→線でつなぐとよいでしょう。

具体的には，４領域８能力を育成することができるところをマークし，指導するときに意識することができるようにします。指導者が指導する際に意識することで，児童生徒の学びの質が変わります。（図９）

さらに，教育課程の改善を図る際には，個性を生かす教育を充実する観点からキャリア・カウンセリング等の機会を指導計画に明確に位置付けるなど，個別の指導・援助を充実させることに留意する必要があります。

４　各校の児童生徒の実態等に照らした「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」の自校化

「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター）に示されている「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」（以下，「学習プログラムの枠組み（例）」という。）は，小学校の低・中・高学年，中学校，高等学校のそれぞれの段階において身に付けることを期待される能力・態度が，どの程度身に付いているかなど児童生徒の発達の見取り図として作成されたものです。

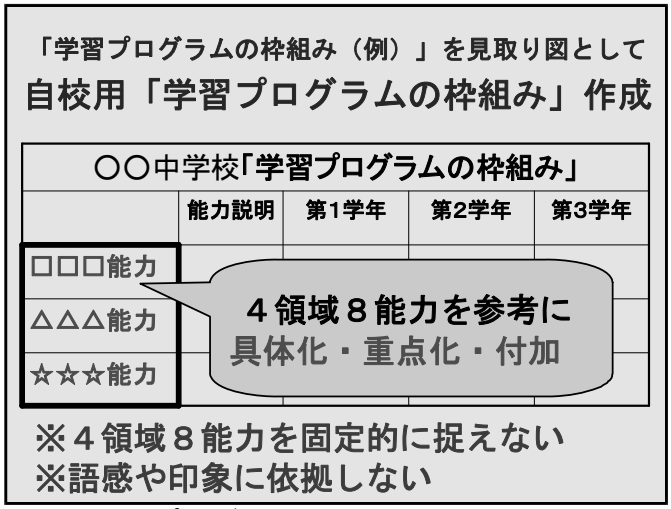


図10　学習プログラムの枠組み（例）の自校化イメージ

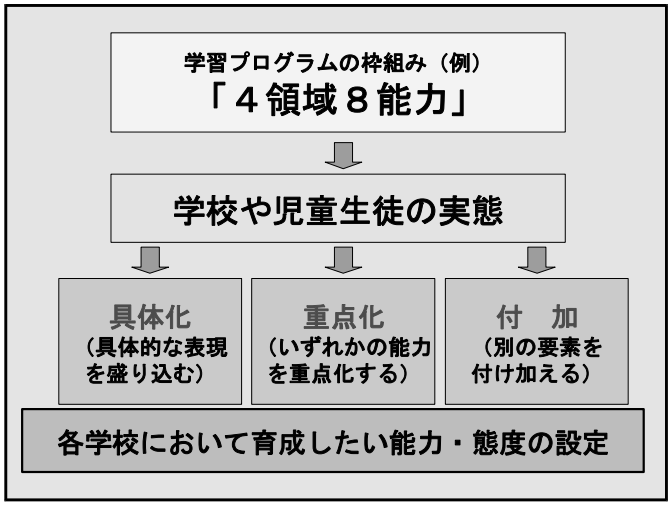


図11　各学校において育成したい能力・態度の設定

各学校がキャリア教育を推進するに当たっては，計画の立案に先立って，児童生徒の生活や意識あるいは家庭，地域の実態などから，自校の児童生徒のキャリア発達を促す上で，何が課題か，どのような能力・態度の育成に重点を置くべきかなどを検討し，自校の児童生徒に育成すべき「能力・態度」に焦点を絞った，自校用のキャリア教育の「学習プログラムの枠組み」を作成することが考えられます。（図10）

４領域８能力は一定の普遍性はもちつつも例示されたものであり，これら全ての能力を育成しなければならないものではありません。これらの能力を参考とした場合でも，各学校や児童生徒の実態に応じて，より具体的な表現を盛り込んだり，いずれかの能力を重点化したり，さらに別の要素を付け加えたりするなどの工夫が望まれます。（図11）

また，キャッチフレーズ等を作ったり，ポスターを作成，掲示したりするなどして，キャリア教育を教職員にも児童生徒にもより身近なものにする工夫が考えられます。

・具体化の例　「人間関係形成能力」を「わかり合う力」，情報活用能力を「調べる力」，将来設計能力を「計画する力」，「意思決定能力」を「がんばる力」として，自校で育成したい能力・態度を具体的に設定する。

・重点化の例　学校で掲げる年度の重点課題に，キャリア教育の目標を毎年一つずつ入れる。

・付加の例　「基礎学力」，「基本的なマナー」を育成したい基本的な能力として位置付ける。

５　キャリア発達課題を踏まえた段階的な取組

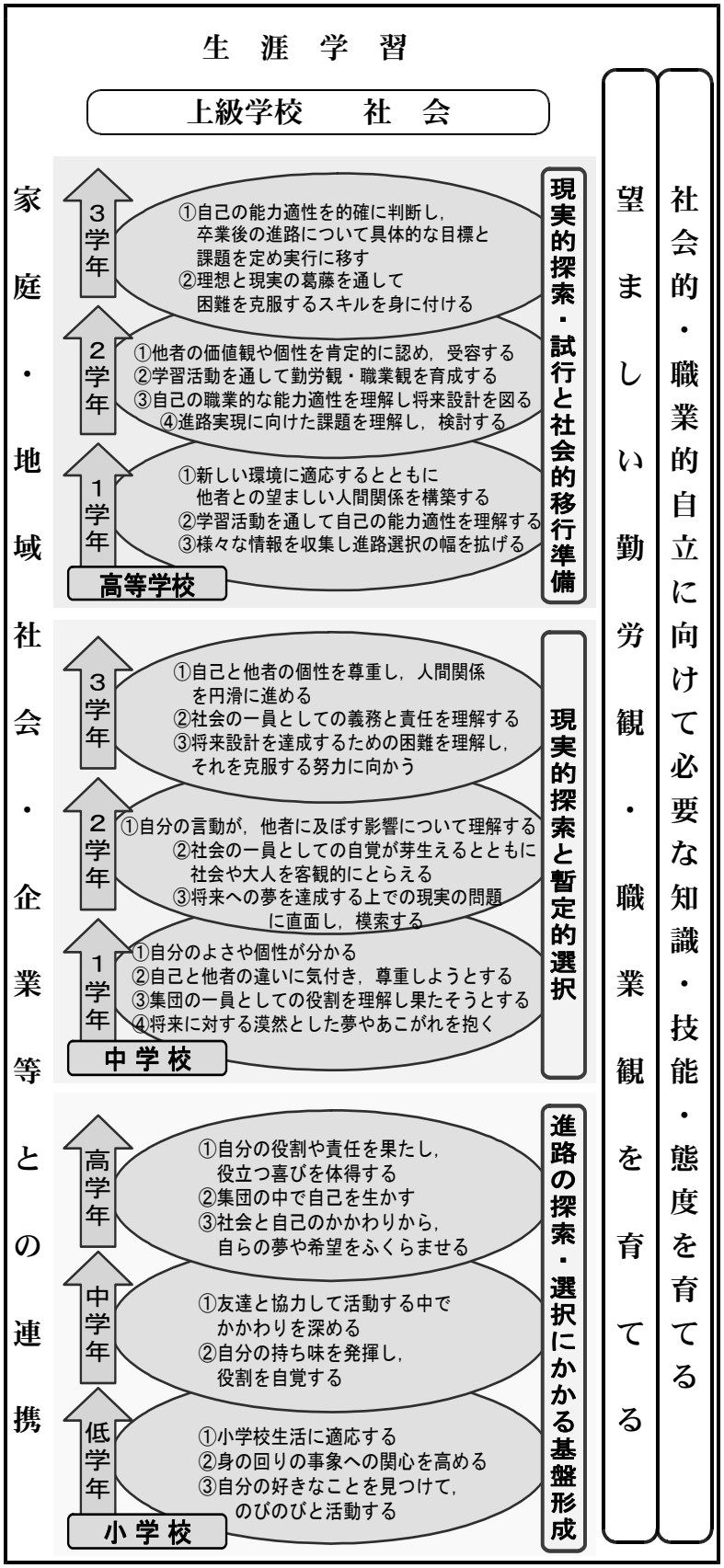


図12　小学校・中学校・高等学校のキャリア発達課題全体図

小学校・中学校・高等学校のそれぞれの段階のキャリア発達課題を踏まえ，校種間の連携や一貫性に留意することが必要です。（図12）

小学校は進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期であり，例えば，身の回りの職場や施設の見学などを通して，自分たちの生活と職業との関係を考え，職業に対する基礎的な知識・理解を得ることができるようにすることなどの取組を進めることが重要です。

中学校は現実的探索と暫定的選択の時期であり，実社会の現実に迫ることが中心課題です。職場体験学習では，本人の希望を第一優先条件として体験先を決定することは必ずしも最善とは限りません。

一方，高等学校は現実的探索・試行と社会的移行準備の時期であり，本人の将来設計を尊重しながらインターンシップを実践することが求められます。

また，発達の段階に着目した工夫として，中学校では消費者として日常的に目にする範囲の仕事を体験し，「見る」と「やる」との大きな違いを体験的に知ること，高等学校ではそれらに加えて，消費者の目に触れることの少ない仕事（開店前の準備，閉店後の事務処理等）の体験なども考えられます。

６　学校外の教育資源（家庭，地域，企業，関係機関等）との連携

キャリア教育を進めるに当たっては，学校と家庭，地域，企業，関係機関等がパートナーシップを発揮して，互いにそれぞれの役割を自覚し，一体となった取組を進めることが今後ますます重要になってきます。（図13）

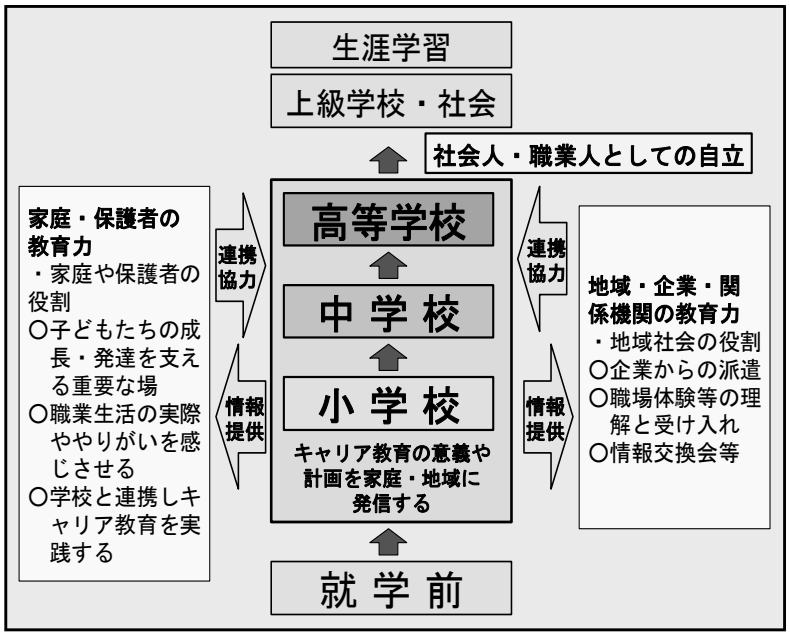


図13　学校外の教育資源（家庭，地域，企業等）との連携

(1) 家庭・保護者との連携

家庭・保護者にはまず，学校の方針や目標，活動内容に対しての理解を得なければなりません。

また，キャリア教育の取組の中では，家庭・保護者に実質的な協力を求める場面があります。例えば，職場体験学習の事前，期間中などは家庭で積極的にそのことを話題にすることによって，職場体験の効果を高めることができます。

(2) 地域・企業等との連携

地域と連携することで，キャリア教育は豊かなものになっていきます。代表的なものが職場見学や職場体験学習です。地域に受け入れてもらうことによって，学校の中だけでは難しい，大人・職業との接点ができます。

障害者施設や高齢者施設，保育園・幼稚園との連携でのふれあい体験も有効です。核家族化・少子化等により，日常的に接する人たちの人数も多様性も大幅に制限を受けています。事前の調べ学習や班単位での協議などを工夫し，実際に体験することで，人間関係形成能力だけでなく，全ての領域の能力を育てる好機となります。

(3) 関係機関との連携

ハローワークやジョブカフェ，キャリア教育を手がけるNPO（非営利組織）といった機関やサービスとの連携は，学校だけでは解決できない問題を解決する手立てとして有効です。関係機関に従事する人による講話を聞いたり，高校生であれば訪問して実際の職業情報に触れたり講習会に参加するなどによって，様々な職業について，あるいは経済や産業，働くことの意味や厳しさを知ることができます。

(4) 学校間（異校種間）連携

キャリア教育は，学校段階間のスムーズな接続に有効であり，進学に際しての不安を解消し，不適応を回避するための実践を行うことができます。

また，それぞれの学校・校種だけでの取組を連携によってより効果的なものにすることができます。例えば，「学習プログラムの枠組み（例）」をもとに，児童生徒，学校，地域の実態に応じて協同で検討し，プログラムとして用意できること，できないことを明確にしておくことなどが考えられます。

7　キャリア教育を推進するための体験活動

(1) 事前指導・事後指導の充実

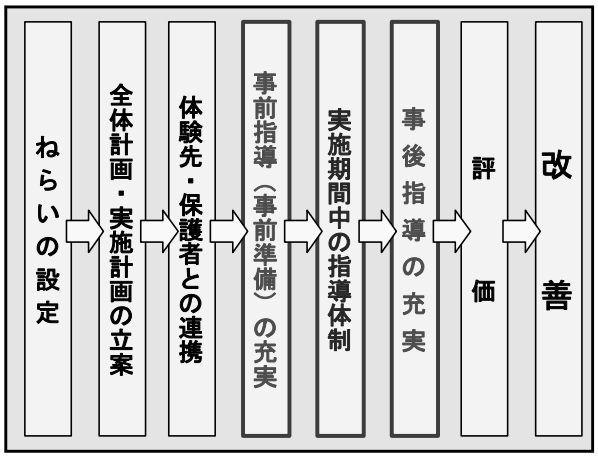


図14　事前指導・事後指導の充実

体験活動の教育課程上への位置付けを明確にするとともに，事前・事後の指導の充実など，準備と計画のもとに実施する必要があり，一過性の行事にならないようにすることが重要です。（図14）

また，各学校が，円滑かつ継続的に家庭や地域と連携して体験活動を実施するためには，日頃の学習活動においても保護者や地域の社会人・職業人を外部講師として招聘（しょうへい）するなど，キャリア教育全般にわたって家庭や地域との連携を図っておくことが大切です。

事前指導・事後指導として特に必要なこと

① 事前指導として，体験学習の意義を児童生徒自身が主体的に考える機会をもつ。

② 事後指導として，児童生徒が体験学習で得た経験や学んだことを目的と照らし合わせて考察し，学習の深化を図る。

③ 体験に参加した児童生徒同士の経験の共有化を図る。

④ 一定期間の経過後，体験学習による学校生活（学習活動）への影響を振り返る。

小学校においては，従前から各学校で進められている特色ある教育活動や地域性を生かした多様な体験活動を，キャリア教育の視点からとらえ直し，小学校段階のキャリア発達を促す実践が求められます。

中学校においては，生徒一人一人の社会的・職業的自己実現に向けたキャリア教育を進めるために，そのねらいを明確にしつつ，事前・事後指導の充実を図りながら，各中学校の創意工夫による特色ある体験活動が不可欠です。

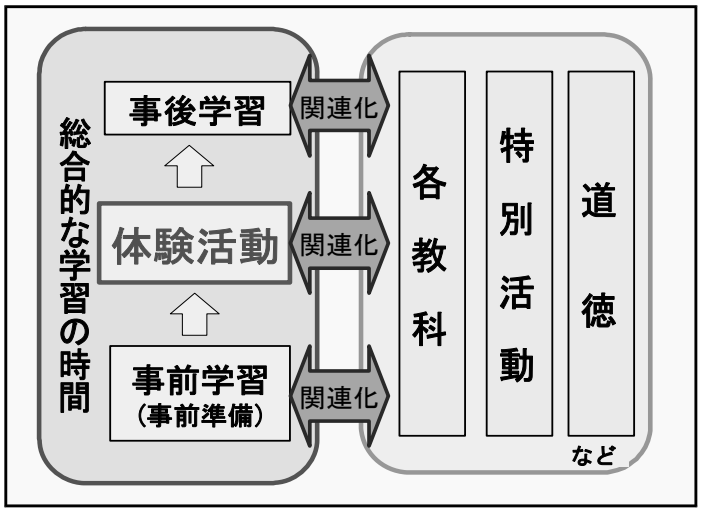


図15　体験活動と他の教育活動をキャリア教育の視点でつなぐ例

高等学校においては，インターンシップなどによる試行を通して，職業の世界の現実をしっかりと認識し，将来の生き方や職業を適切に選択することなどができるようにするための取組を進めることが大切です。

(2) 体験活動と他の教育活動をキャリア教育の視点でつなぐ

学ぶことや働くこと，生きることを実感させ将来について考えさせる貴重な機会となる体験活動と他の教育活動をつなぐことで，より効果的にキャリア教育を進めることができます。（図15）また，各教科や特別活動，道徳，総合的な学習の時間，特別活動といったそれぞれの教育活動での学びをつなげるためには，キャリア教育の全体計画・年間指導計画を作成し，定期的に改善を図ることが必要です。

８　キャリア・カウンセリングの理解

(1) 学校におけるキャリア・カウンセリングの定義

キャリア・カウンセリングはキャリア教育の中核をなしていると同時に，キャリア教育とは車の両輪のように推進される必要があるといえます。

発達過程にある一人一人の子どもたちが，個人差や特徴を生かして，学校生活における様々な体験を前向きに受け止め，日々の生活で遭遇する課題や問題を積極的・建設的に解決していくことを通して，問題対処の力や態度を発達させ，自立的に生きていけるように支援することを目指します。（下線追加）
「自分に気付き，未来を築くキャリア教育―小学校におけるキャリア教育推進のために―」　国立教育政策研究所生徒指導研究センター

子どもたち一人一人の生き方や進路，教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め，自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり，適切な情報を提供したりしながら，子どもたちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための，個別またはグループ別に行う指導援助である。（下線追加）
「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）」　文部科学省

(2) 従来の学校進路相談とキャリア・カウンセリングの違い

従来の学校進路相談は，進路決定に重点が置かれ，教師自身の価値観や判断，経験から，児童生徒を正しい道へ指導しようとする指示的カウンセリングの要素が強いという一面が見られました。キャリア・カウンセリングは，在学期間にわたるキャリア教育の一環として，児童生徒が当面している進路選択や問題解決を支援する直接的な役割を担い，問題解決能力の育成や，自己実現に向けての自己指導能力の発達を伸長させる開発的カウンセリングを目指しています。そのためには，児童生徒と教職員の人間関係を上手に構築し，児童生徒が自分の考えを表現できる雰囲気づくりや日頃から児童生徒理解に努めておくことが必要です。従来の学校進路相談を，受容的な方法と折衷し，職業生活における自己実現のための開発的な要素を強くすることで，キャリア・カウンセリングへと移行することができます。

(3) キャリア・カウンセリングのポイント

実践にあたっては，定期的な相談活動だけでなく，日常的な交流の中で行う対話も重要な機会としてとらえることが大切です。そのため，教師一人一人がキャリア教育をよく理解し，コミュニケーション能力を向上させることが不可欠です。児童生徒が自己肯定感を獲得できるような対応を心掛け，共感的な態度で児童生徒の話を受容的に傾聴していきます。話を聴いていく中で，問題点を探り，解決のための計画を立て，具体的な行動をとるように促していくことが大切です。

(4) 学習指導案にキャリア・カウンセリングの視点を取り入れること

キャリア教育の課題の一つは，教育課程の中心であり学びの中心である教科指導にキャリア教育の視点をもたせることです。特に，学習指導案にキャリア・カウンセリングの視点を取り入れることで，教科指導をより効果的に展開することができます。

授業における課題は，児童生徒が生きていく中で直面する困ったことであり，課題への対処及び事前の対策は，教科学習を支援すると同時に，さまざまな能力や態度を育成するよい機会であり，結果的には職業的（進路）発達を促進することになります。

９　改善につなげるためのキャリア教育の評価

マネジメント・サイクルとして，計画（Plan）を実行（Do）し，評価（Check）して改善（Act）に結びつけるPDCAサイクルが提案されており，キャリア教育についての評価を行うに当たっては，児童生徒の学習状況の把握はもちろんのこと，PDCAサイクルの中で適切に位置付け，教育活動や各学校の指導計画の改善につなげていくことが重要です。

特に，児童生徒自身が自らを適切に評価しながら自己理解を深めていくのを支援することが必要です。そのために，自己評価カードを工夫したり，ポートフォリオなどを活用しながら，児童生徒が継続的・統合的に自己の発達を評価できるような体制が求められます。

各学校において，児童生徒がどのような能力・態度をどの程度身に付けているかなどについて点検，評価する際の一つの参考として「学習プログラムの枠組み（例）」の活用も考えられます。この場合，前述（p.7参照）のとおり，本来これは見取り図として作成されたことに留意する必要があります。現在各学校で行われている一つ一つの活動が，どの能力・態度の育成を目指したものかを明確にしたり，全体としてバランスのとれた取組になっているか，どの能力・態度の育成にかかわる取組が不足しているのか等について，点検・見直しを行う際の参考として活用することが望まれます。

キャリア教育の評価として今後求められるのは，アウトカム評価（児童生徒の変容・成長の評価）を基盤としたアウトプット評価（活動そのものの評価）をすることです。（図16）

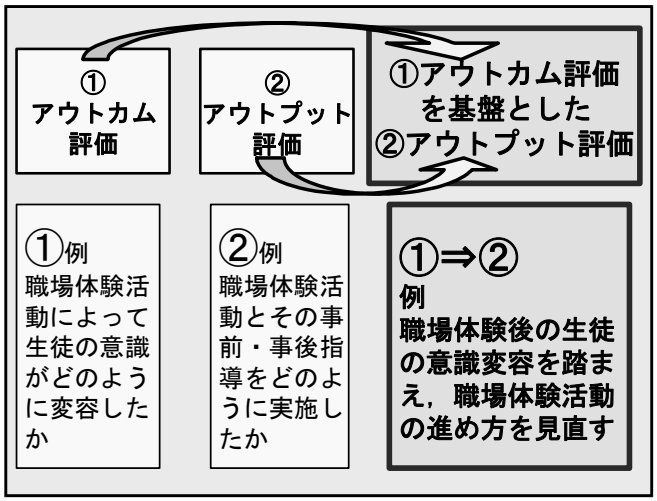


図16　キャリア教育の評価の方向性①

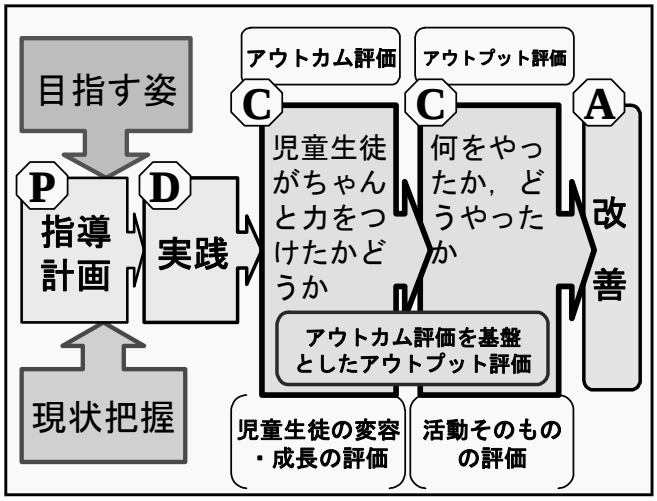


図17　キャリア教育の評価の方向性②

前者については，まず教師が一人一人の育ちをしっかりと見取っていくことが大切です。ポートフォリオやアンケート，評価カード等を工夫しながら，一人一人のよさや変容を把握し，その結果をできるだけ児童生徒に返していきます。

後者については，このような児童生徒の成長を促した要因は何か，あるいは，成長に結び付かなかった理由は何かに焦点を当てながら実践を振り返り，キャリア教育の取組をマネジメント・サイクルの中で改善していくことが大切です。（図17）

また，キャリア教育の評価にあたっては，卒業生からの声が非常に有効です。卒業生たちは自分の受けたキャリア教育をある程度客観的に見ることができるからです。

必要に応じて指導の在り方や組織を見直すなど，評価を改善に生かす姿勢が求められています。

10　ポートフォリオの活用

キャリア教育を進めるに当たっては，ポートフォリオを活用することが有効です。ポートフォリオの活用によって，児童生徒自身に自己の能力や自己の成長に気付かせ，将来への目標をもたせることができます。また，ポートフォリオづくりの過程では，一人一人のキャリア発達を支援する様々な工夫が可能です。

ポートフォリオとは，児童生徒の学習活動の過程を示すような記録や作品，児童生徒の自己評価・相互評価，教師による指導と評価の記録，保護者や地域の人の評価などを系統的，継続的に収集したものです。単なる「学習ファイル」との違いは，学習の記録などを蓄積，整理，取捨選択することによって，学習を振り返り，今後を見通す（すなわち評価する）ところにあります。

図18　ワーキング・ポートフォリオとパーマネント・ポートフォリオ

学習記録などを日常的に蓄積していくポートフォリオが「ワーキング・ポートフォリオ（元ポートフォリオ）」，ワーキング・ポートフォリオに収められたものを整理，取捨選択してつくるものが「パーマネント・ポートフォリオ（凝縮ポートフォリオ）」です。（図18）

教師や児童生徒が，児童生徒の成長を評価する方法がポートフォリオ評価法で，ワーキング・ポートフォリオからパーマネント・ポートフォリオにまとめる活動は，児童生徒に自分の学習過程を振り返らせ，自己の学習を評価させる機会となります。

ポートフォリオづくりの過程では，ポートフォリオを活用して発表会や面談などをもつことが有効だと考えられます。（図19）作成したパーマネント・ポートフォリオについて話し合うことを通して，今までに何が達成できたのかを確認し，次の課題を明確にする場です。

ポートフォリオの活用効果
〇児童生徒の自己評価力を育てる。
〇自分の学習に達成感を感じ自尊心を高める。

発表会　**グループや学級，学年などの大きな集団の中での発表会形式をとる。学習成果を披露し，共有する場を与え，自尊心を高める。**

面　談　**年に数回，教師と児童生徒（と保護者）で面談を行い，相互の理解を深めたり，次の学習のめあてを明確にする。**

図19　ポートフォリオの活用効果と活用例

〔ポートフォリオの活用形式例〕
- 児童生徒―少人数グループ（児童生徒のみ ／教師も参加）（発表会）
- 児童生徒―学級・学年（発表会）
- 児童生徒―地域の人（発表会）
- 児童生徒―教師（二者面談）
- 児童生徒―教師―保護者（三者面談）
- 児童生徒―保護者（家庭で実施）

Ⅲ　研究協力校実践事例

小学校実践事例１　結城市立結城小学校　(p.14 ～ p.21)

小学校実践事例２　龍ケ崎市立八原小学校　(p.22 ～ p.29)

中学校実践事例１　神栖市立神栖第四中学校　(p.30 ～ p.37)

中学校実践事例２　小美玉市立玉里中学校　(p.38 ～ p.45)

高等学校実践事例１　県立取手第二高等学校　(p.46 ～ p.53)

高等学校実践事例２　県立結城第一高等学校　(p.54 ～ p.61)

小学校実践事例１：「自他のよさを認め，互いに高め合う子どもを育てる ――交流活動を通して――」

結城市立結城小学校

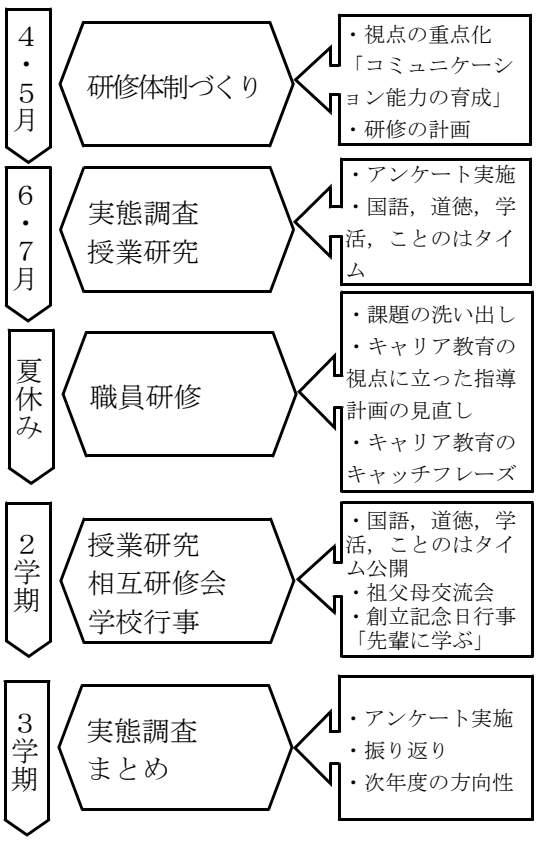
URL:http://www.portal.city.yuki.ibaraki.jp/7/6324.html

１　学校の概要

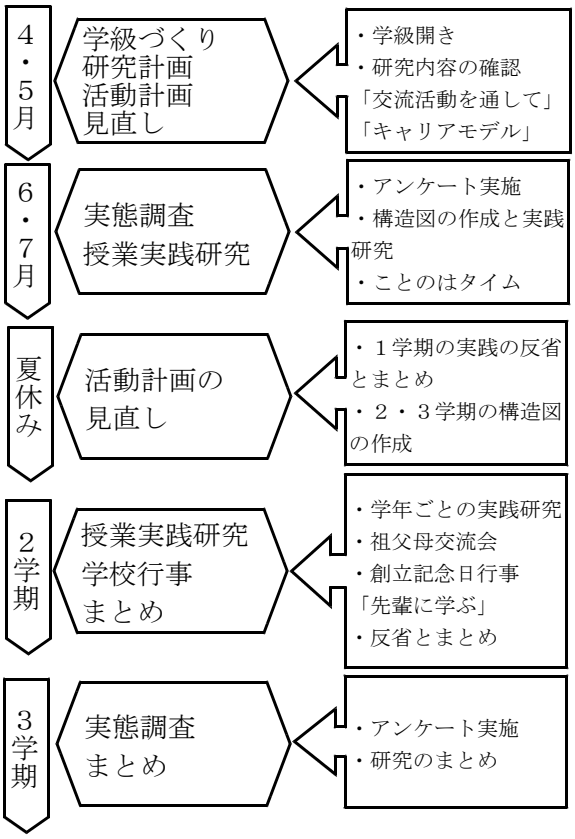
本校は，結城市の中心部に位置する21学級，児童数665名の中規模校であり，明治５年創立の歴史と伝統のある学校である。結城の伝統工芸品や特産物は多く，本市を中心に織られる「本場結城つむぎ」は平成22年に，ユネスコ無形文化遺産に登録された。また，何代も続く商家が多く，明治時代に造られた土蔵（見世蔵）が残されている。児童の父母や祖父母には本校の卒業生が多いこともあり,保護者や地域の学校教育に関する関心は高く，協力的である。

２　キャリア教育の取組における工夫と改善の概要

(1) １年次の取組（平成21年度）



(2) ２年次の取組（平成22年度）



３　特に力を入れてきた取組

(1) 児童や保護者，地域がキャリア教育を自覚し，共有できるキャッチフレーズの作成

(2) コミュニケーション能力育成のためのスキル学習「ことのはタイム」の導入

(3) 交流活動と教科等をキャリア教育の視点でつないだ「構造図」の作成及び実践

(4) 身近なキャリアモデルを活用した活動の実践

４　実践内容

(1) 児童や保護者，地域がキャリア教育を自覚し，共有できるキャッチフレーズの作成

本校の児童は，素直で何事にもまじめに取り組む。学習では与えられた課題に熱心に取り組むが，自分から考えて積極的に発言したり，行動したりすることに苦手意識が強い傾向にある。このような本校の児童の実態を踏まえ，キャリア発達に関わる４領域の基盤となる人間関係形成能力を中心とし，コミュニケーションをとりながら相手を認めたり，自分のよさや可能性を見つけたりして，望ましい人間関係を形成する能力を育成することが重要であると考えた。そこで，教師による話合いを重ね，研究テーマを「自他のよさを認め，互いに高め合う子どもを育てる」とし，児童や保護者，地域に理解しやすいように「あなたのすてき　わたしのじまん　みつけよう夢　ひろげよう未来」というキャッチフレーズを決めた。そして学校内外に掲示物（**資料１**）を作成して，児童や保護者ばかりでなく，地域にも広めていった。このように職員，児童，保護者，地域など，児童に関わる人々が共にキャリア教育のねらいを自覚しながら推進していくことは大変重要である。

資料１　正門わきのフェンス

資料２　キャリア教育のコーナー

このようなテーマのもと，本研究の１年目は，よりよい人間関係を築くために，コミュニケーション能力の基礎を育成する教科に国語科を位置付け，「話すこと・聞くこと」の能力を発達段階に応じて指導した。

道徳の時間は，国語科で培われた「話すこと・聞くこと」の能力を生かし，多様な考えを出し合って，互いのよさを認められるような手立てをとった。

学級活動では，集団の基礎である学級経営を充実させ，よりよい生活や人間関係を築くことができるよう，話合い活動の機会を多く取り入れてきた。また，各教室には「あなたのすてき　わたしのじまん」のコーナー（**資料２**）を設け，友達のよさ，自分が頑張ったことやできるようになったことなどをいつでも書けるようにして，テーマの意識付けを図った。

(2) コミュニケーション能力育成のためのスキル学習「ことのはタイム」の導入

互いの立場や考えを尊重しながら言葉で「伝え合う力」を高め，言語感覚を養うためには，国語科の授業だけでなく，実生活の様々な場面において言語活動を充実させて実践することが大切であると考えた。そこで，日常の言葉を繰り返し伝え合う能力を育成するスキル学習に取り組んだ。週１回10分程度の短い時間の中で，ゲーム的な要素を取り入れ，楽しく話したり聞いたりする活動を「ことのはタイム」と名付け，朝のドリル学習の時間に週１回実施した。ソーシャルスキルトレーニングの内容を参考にした題材を用い，学年の発達段階に応じた本校独自の活動案も作成した。児童全員が「児童一人一人の多様性を認め，仲間と楽しむこと」をねらいとした。内容の一例を挙げると，第

４学年「サイコロトーク」では，「クラスのよいところ」を話すもの（**図１**），「大声で叫ぶ」など指定された動きをするもの，円になって「○○さん，おはよう」とあいさつをリレーしていく第１学年の「あいさつリレー」などがある。

この活動により，児童は小グループによる話合いの方法を理解し，他教科においても意欲的に話し合えるようになった。小グループの中での役割（司会・話す順番など）がスムーズに決められ，短時間で充実した話合いができるようになった。小グループによる話合いの仕方は，発達段階に応じてレベルアップし，高学年では付箋を使ったＫＪ法的手法を取り入れて，コミュニケーション活動を活発に行うことができるようになった。

図１ スキル学習 ワークシート

「ことのはタイム」の成果が表れた場面として，第３学年国語「こそあど言葉」では，指示代名詞を使った会話のやりとりを自然に練習することができた。第６学年の学級活動「中学生の一日を知ろう」では，児童がそれぞれ調べてきたことや更に知りたいこと，今後の小学校生活で頑張りたいことなどをＫＪ法的手法を用いて分類し，話合い活動を行うことができた。（**資料３**）このように，週１回10分間程度の短い時間の学習であるが，年間を通し地道に続けたことが，着実に力となり，教科等の活動に生かすことができた。

資料３ ＫＪ法的手法による話合い

(3) 交流活動と教科等をキャリア教育の視点でつないだ「研究の構造図」の作成及び実践

① 「研究の構造図」の作成

研究協力校としての１年目はそれぞれの教科等のねらいのもと，教科内や学年内で，キャリア教育の視点で見直しを進めたが，活動につながりがあることが見えてきた。そこで２年目は，それぞれの教科等のねらいのもとで行われてきた交流活動をキャリア教育のねらいでつなぎ，構造化し実践することにした。（**図２**）

児童の社会的・職業的な自立を目指して，人間関係形成能力を育てようとすると，様々な年齢の人々と触れ合う機会を多く取り入れることが必要である。本校は結城市の市街地にあり，地域も学校に協力的であることから，以前から地域との交流活動が行われていた。そこで，この交流活動を中心にキャリア教育を推進していこうと考えた。

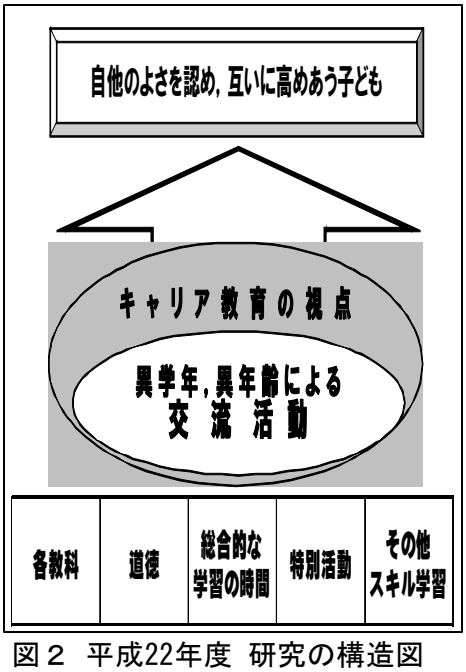
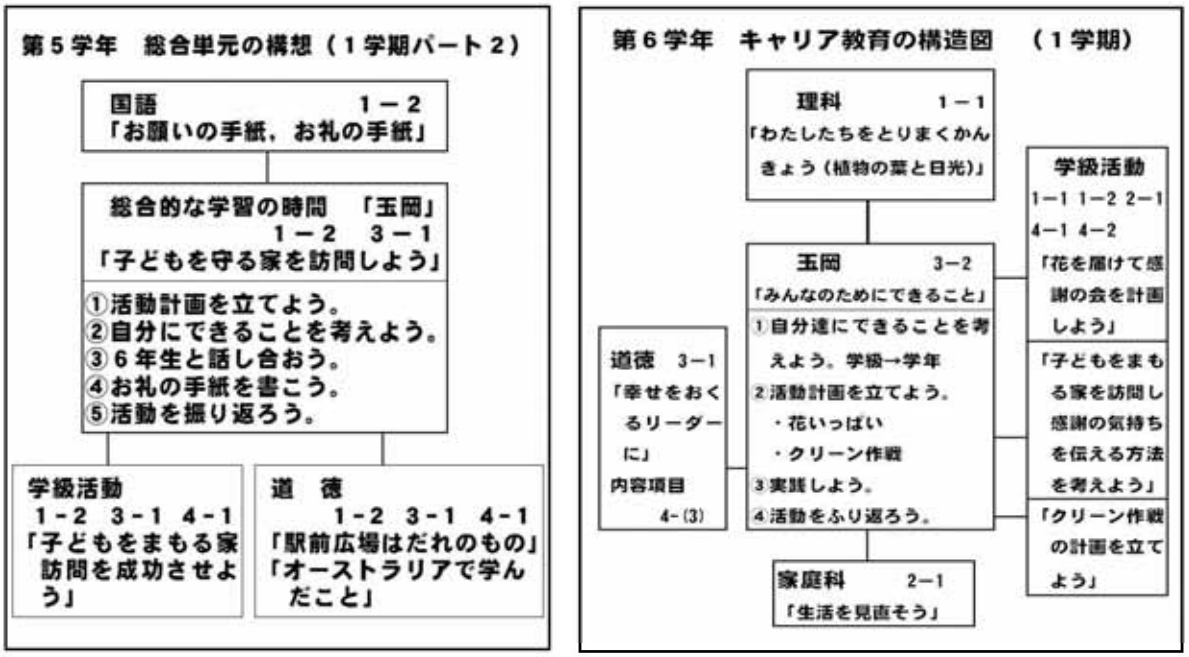


図２ 平成22年度 研究の構造図

② 「子どもをまもる家訪問」に向けての取組（第５・６学年）

本校の学区には，219軒の「子どもをまもる家」がある。５・６年生の児童が訪問し，「子どもをまもる家」の確認と感謝の気持ちを伝える活動を実施した。（**図３**）



※総合単元の構想にある　３－２　１－１などは，本校のキャリア教育で育てたい能力の領域を記号化したものである。

人間関係形成能力	1	情報活用能力	2	将来設計能力	3	意思決定能力	4
自他の理解能力	１－１	情報収集・探索能力	２－１	役割把握・認識能力	３－１	選択能力	４－１
コミュニケーション能力	１－２	職業理解能力	２－２	計画実行能力	３－２	課題解決能力	４－２

※道徳の記号　２－（４）などは，内容項目である。

図３　第５，６学年の構造図

ア　訪問活動の経過（**資料４　次ページ図４参照**）

イ　地域の反応

「子どもをまもる家訪問」での地域の反応は大変好意的であった。「○○さんとこのお孫さん？大きくなったね。」と言われるなど，地域と関わって生活していることを認識するよい機会になった。何軒か訪問した帰り道，届けた花の苗がすでに庭に植えられている様子を見て，児童は訪問した喜びを感じていた。（**資料５**）

振り返りでは，今まで話したこともなかった近所の人に喜んでもらえて，訪問してよかったという児童の感想が多く見られた。地域の人や不在だったお宅からはお礼の電話や手紙を頂いた。

地域の人や，異学年と活動することで，他者（この場合は地域の大人や上級生）のよさが分かったり，自分にできることが明確になったりして，「来年はこんなことがしたい。」という身近な目標ができた。また，異

資料４　訪問前の準備の様子

資料５　訪問の様子

年齢の人とのコミュニケーション能力を育てることもできた。このように，隣接学年が共に活動することで，相互に教え合う関係が生まれ，伝え合い，協力し実践するという活動が可能になり，活動の理解を次の学年に伝えることができた。このような関係性が人間関係形成能力を高めることにつながったと思われる。

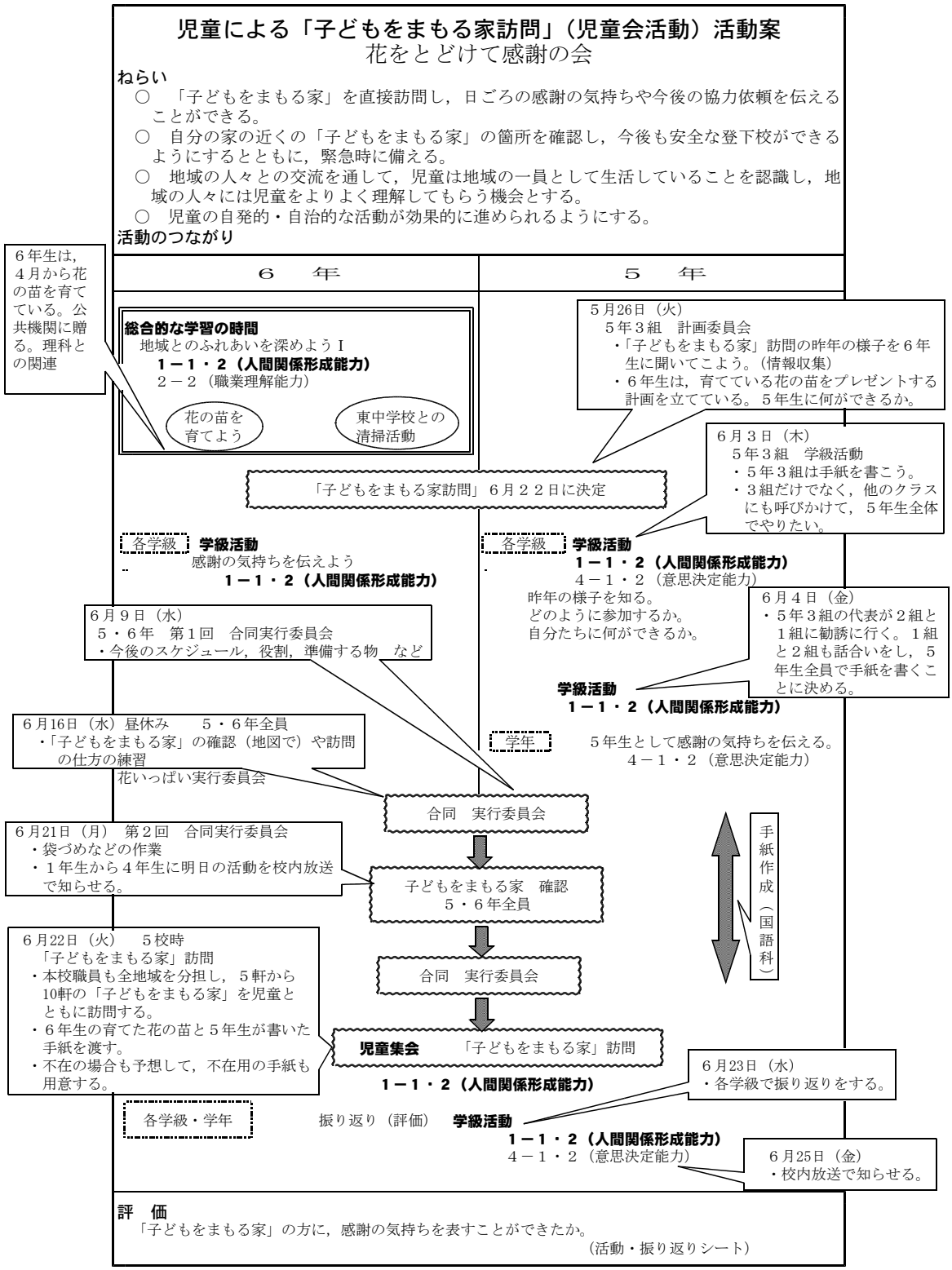


図４ 訪問活動の経過

(4) 身近なキャリアモデルを活用した活動の実践

① 総合的な学習の時間「結城の名産品にチャレンジしよう」の取組（第３学年）

本校周辺には，代々結城の名産品を扱っている商店などが多く，総合的な学習の時間の貴重な題材となっている。社会科で市の様子を学習することと関連付けて，結城の名産品について調べたり，実際に作ったりする活動を行っている。活動内容と場所が多岐，多方面にわたるため，保護者の協力を得て親子活動という形で学習している。この第３学年の総合的な学習の時間は，勤労観・職業観を職業人との関わりを通して学習する単元である。地域の方が身近なキャリアモデルとなる貴重なプログラムである。

ねらい
- ○ 地域の名産品づくりに挑戦し，名産として残していくことの苦労や，そのよさにふれることができる。
- ○ 地域の人々との学習を通して，人と関わるよさに気付くことができる。
- ○ 親子で制作活動を楽しむことができる。

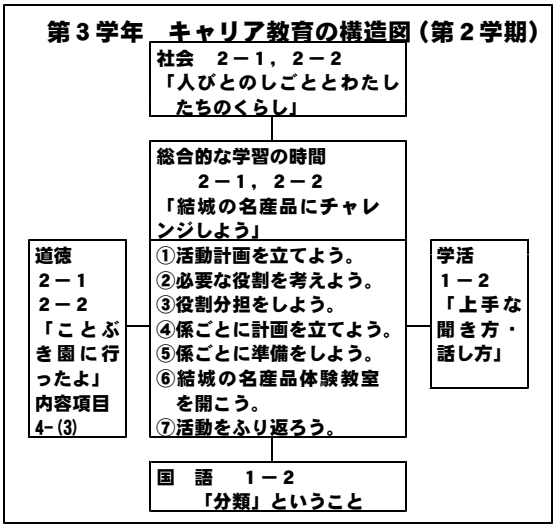


図５　第３学年の構造図

今回取り上げた名産品

○学校に職人を招いて
- **ゆでまんじゅう**づくり　・**みそ**づくり
- **すだれ麩**の料理づくり　・**桐**工芸体験

○職人のもとを訪問して
- **つむぎ**体験　・**まゆ玉**をつかった工芸

上の表は，実際に伝統工芸に携わっている職人を招いたり，職人のもとを訪問したりしての体験学習である。児童はとても熱心に取り組んだ。これらの活動により，結城の伝統工芸の由来を初めて知ったという児童が多く，地域を再発見する機会になった。職人や保護者と一緒に作業を行う中で児童のコミュニケーション能力も育成することができた。普段見慣れているものが，実は結城で古くから作られている結城独自のものであり，近所の方が何代も受け継いでそれを作る専門家だったことが分かって，児童の地域の方への見方が変わり，尊敬やあこがれの気持ちをもつようになった。

資料６　紬の糸取り

資料７　紬の機織り

資料８ ゆでまんじゅうづくり

・すだれぶを作る工場は１軒しかないそうです。なのでこの工場がなくなるとすだれぶがなくなってしまうかもしれないといっていました。わたしはすだれぶがなくなってほしくないなと思いました。おかあさんと家でも作ってみたいです。（児童）

・結城つむぎの原料となる養蚕をしている農家が結城市内で１軒だけというお話でした。結城の特産品の貴重なお話と親子活動に参加できて地域を再発見するよい機会となりました。（保護者）

② 「先輩と夢を語り合おう」（結城小学校の誕生を祝う会）の取組

創立記念日には，父母や祖父母も卒業した自分の学校のよさや歴史を知って，愛校心を高めるねらいのもと，「創立記念日記念事業」を行っている。今年は創立138年を迎えた。卒業生が多いことや地域が協力的であることの利点を生かし，卒業生や地域の人を招いて，地域を知って興味をもち，先輩に学ぶことを通して，児童の夢を広げていきたいと考えた。

先輩から，現在の知識や技能を披露してもらい，小学校時代のこと，現在の職業に就きたいと思ったきっかけや気持ちなどを聞くことができた。また，在校生には自分の夢を先輩に語り，「夢を交換する・語り合う」という時間も設け，先輩と在校生の交歓の場とした。平成20年度には，本校の卒業生の室井恭子さん（国立天文情報センター広報普及員）と星や宇宙の学習を行った。平成21年度にはジャズピアニストの宮本貴奈さんを招き，『結城小学校から世界へ』というテーマの講演会を行った。

平成21年度　創立記念日記念事業　　児童集会　「結城小学校の誕生を祝う会」

ねらい　○　創立記念日を迎え，結城小学校の歴史に触れ，結城小学校の一員である誇りと愛校心を養う。

○　結城小学校の卒業生の話を聞くことにより，いろいろなことに興味・関心をもつことや夢に向かって努力を続けることの大切さに気付き，自分の夢を語ることができる。

資料９　貴奈さんとのセッション

宮本貴奈さんのプロフィール

・ボストン・バークリー音楽大学を全学費免除特待生として卒業。
・1998年ランディー・エドマン・ジャズピアノコンテスト優勝。
・「アトランタベストミュージシャン」に２年連続で選ばれる。
・毎年結城市でも公演し，音楽で町おこしに貢献している。

○宮本貴奈さんの講演より

歌とギターの好きな父と兄の影響を受け，小さい時からエレクトーンを学びました。14歳の時に作曲家になりたいと決心，それ以来クラシックやジャズの勉強をしてきました。私には今でもいくつもの夢があります。それを実現するために「夢ノート」を用意して，思い浮かんだ夢をそこに書いています。大切なのは夢を過去形で書くことです。たとえば「ピアニストになりたい」ではなく，「ピアニストになった」というふうに書くのです。過去形で書くことで夢が具体的になります。すると自然に夢を実現させるための行動をとるようになってきます。「オープンウイッシュ」と言って皆に夢を公表するとさらに効果がありますよ。（児童が数人，自分の夢を発表した。）私の今の夢は，結城小学校の皆さん全部の夢がかなうことです。応援しています。

○児童の感想

・みやもとさんのピアノは，とてもじょうずでした。ぼくもがんばって，ゆめをかなえたいです。（１年男）
・ピアノがとてもうまかったです。夢をもつことはすてきです。かなえられるようがんばります。（６年男）
・貴奈さんが，14歳から夢をもち続けたことがとてもすごいと思いました。セッションできてうれしかったです。（５年女）

ジャズには，他のミュージシャンとアドリブで演奏する（セッション）特色がある。この日も，児童が自由気ままに弾いたピアノに合わせて，貴奈さんが即興で伴奏した。その技に児童も驚いていた。（**資料９**）自分たちの学校の先輩という身近な方が，遠い外国で夢をかなえ，頑張っていることを知って，「自分もがんばろう。やってみよう。」という大きな励みになった児童は多い。また先輩の夢実現の話を聞くばかりでなく，先輩に自分の夢を語る時間を設けたことで，児童一人一人が自分を見つめ，未来を考えることができた。（**資料10**）

資料10 貴奈さんに夢を語る児童

先輩の業績については校内にコーナーを作り，本校のキャッチフレーズ「みつけよう夢ひろげよう未来」とともに掲示し，保護者や地域にも広めていった。

５　研究のまとめと本校からの提言

(1) 「児童や保護者，地域がキャリア教育を自覚し，共有できるキャッチフレーズを作ってみよう。」

児童の生活や意識，あるいは家庭や地域の実態などから，目指す児童像を明確にして自校のキャリア教育の目標を設定することは大切である。そのために，分かりやすい言葉でキャッチフレーズを設定することを提言したい。そうすれば，キャリア教育の目指す方向性が明らかになる。そして，児童や教師，保護者や地域がキャリア教育を自覚し，共有できるようになり，地域を含めたキャリア教育を進めていくことができる。

(2) 「短時間でも継続して行うスキル学習で児童に基礎的な力をつけよう。」

本校では，小学校において基礎となるべき能力は「人間関係形成能力」であると考えた。多様な集団，組織の中で，コミュニケーション能力を高めたり，豊かな人間関係を築いたりするためには，話すスキルは必要である。時間を確保することは難しいが，短時間でも日課表に位置付けて地道に継続することは大切なことである。効果は少人数グループ学習から現れ，教育活動の様々なところに生かされる。

(3) 「教育活動はつながっている。キャリア教育の視点で見直し，つなげよう。」

これまで行われていた教育活動を，キャリア教育の視点でとらえ直すと，それぞれの関連が明確になった。そこで関連のある活動をつなげることでキャリア教育の視点が更に明確になり，教師も児童も意識して教育活動に取り組むことができる。本校が異年齢交流を中核においたのは，能力や経験などの差から生まれる学習効果や，立場の違いによる多彩な役割関係が生み出されるからである。

各学校や地域の特性や児童の実態に応じてつなぎ方は工夫できると思われる。

(4) 「身近なキャリアモデルを活用し，夢を語り合おう。」

地域の方や保護者，先輩方と触れ合うことで，職業観，勤労観が育てられ，将来に向けての夢のモデルを明確にもつことができる。それぞれの学校の特色を生かしたゲストティーチャーを招いた活動や行事をキャリア教育の視点でとらえ直して，キャリア教育の視点を意識して取り組むことが大切である。その際，キャリアモデルの話を聞くばかりでなく，児童自身の夢を再認識させ，互いに語り合うことは効果的である。

小学校実践事例２：「夢に向かって主体的に取り組む児童を育成するためのキャリア教育の工夫と改善」

龍ケ崎市立八原小学校 URL:http://www.city.ryugasaki.ibaraki.jp/yaharasyou

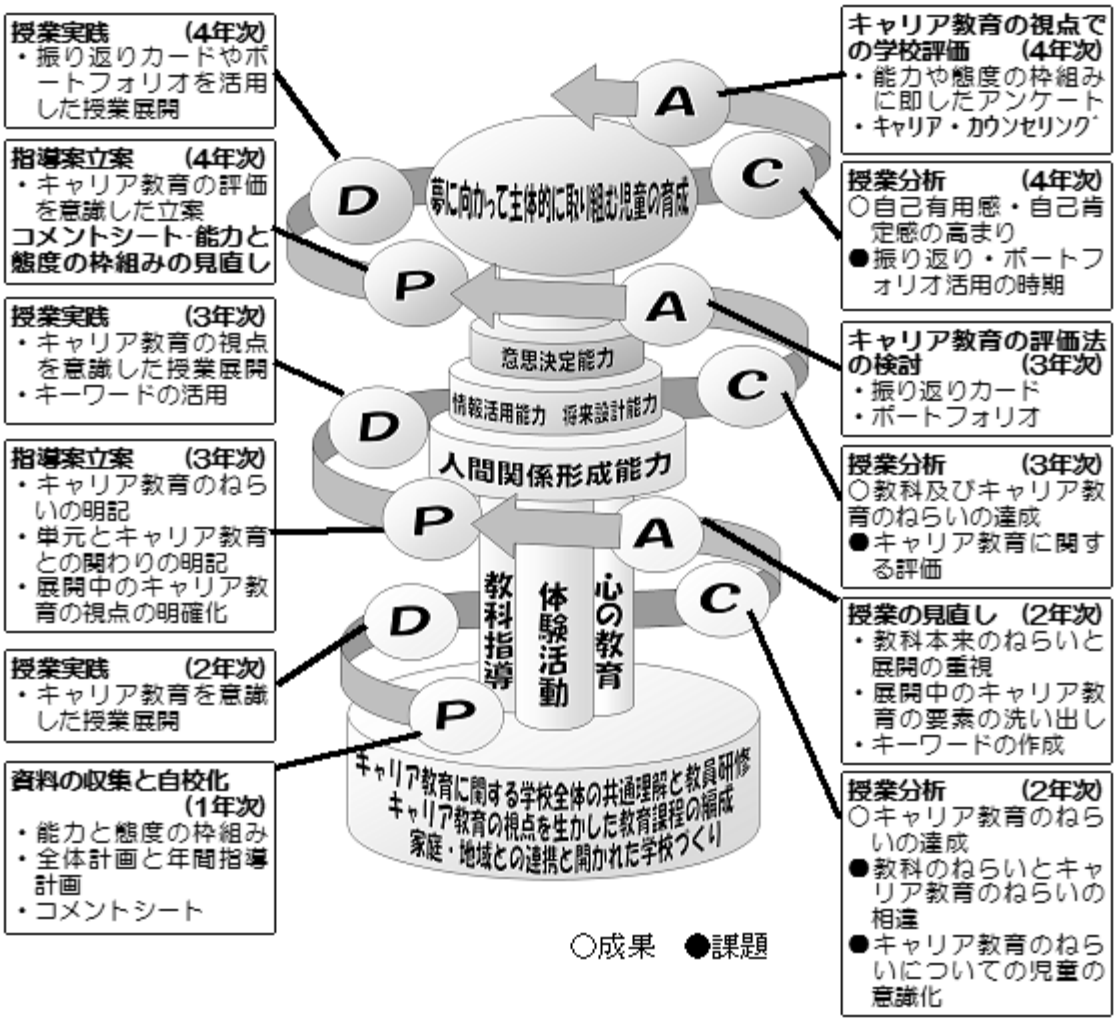
１　学校の概要

本校は，龍ケ崎市の北東部に位置し，自然豊かな学区には地域に病院・商業施設や総合運動公園などの公共施設，新興住宅地を含んだニュータウンが混在しており，現在は29学級を有し，913名の児童が在籍する県南地区一番の大規模校である。平成19年度より児童の社会的自立を目指し，「生きる力」を身に付けるために全教育活動を通してキャリア教育を実践している。「夢に向かって主体的に取り組む児童の育成」をテーマに，豊かな体験活動や地域との連携を図ったキャリア教育の推進に取り組んでいる。

２　キャリア教育の取組における工夫と改善の概要

「夢に向かって主体的に取り組む児童」の姿に迫るために，本校独自の「キャリア教育で養いたい能力や態度」を設定し，授業実践・授業分析を行ってきた。児童の姿を基に授業を検証し，授業を修正している。

資料１　改善の概要



授業を実践していく中で，キャリア教育の視点を重視するあまり，教科本来のねらいからそれてしまい，養いたい能力がコミュニケーション能力に偏ってしまう傾向にあった。その度に，教科本来のねらいは何なのかを確認し合い，本校の「キャリア教育で養いたい能力・態度の枠組み」に戻って，養いたい能力は何かを見直した。また，学習指導案や行事計画案においても，キャリア教育の視点でとらえるところに波線を引き，養いたい能力を明記することで，どのような場面でどのような力を付けることができるのかを明確にした。キャリア教育の視点を第一にするのではなく，教科や活動の本来のねらいを大切にしながら，キャリア教育の視点を意識して指導すればよいと，教師の意識も変わってきた。

3　特に力を入れてきた取組

(1) 本校におけるキャリア教育のとらえの明確化

(2) キャリア教育の視点を取り入れた教育活動への取組

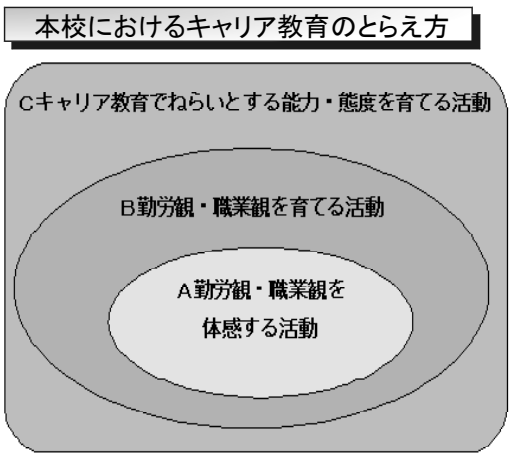
(3) キャリア・カウンセリングとキャリア教育の評価

4　実践内容

(1) 本校におけるキャリア教育のとらえの明確化

本校におけるキャリア教育は，全教育活動を通して行うものであるという基本的な考えのもと，研究を進めてきた。

資料２　キャリア教育のとらえ方



Aの例
生活科(まちたんけん)，総合的な学習の時間(八原の達人)，特別支援(生活単元)，社会科(スーパーマーケットではたらく人)，特別活動(縦割り班活動)，委員会活動，係活動，当番活動等

Bの例
国語(伝記「マザーテレサ」)，社会科(市のようす，きょう土に伝わるねがい)，道徳(勤勉・努力，勤労)等

Cの例
国語(相手や目的を考えて)，算数(直方体と立方体)，理科(川とわたしたちの生活)，道徳(親切，公徳心)，クラブ活動等

※　同一教科等でも，学習内容によっては属する領域(A，B，C)が異なる。

Cの部分は，「キャリア教育でねらいとする能力・態度を育てる活動」である。キャリア教育でねらいとする能力・態度は，学校の教育活動全体のいたるところで育てることができる。自分や友達のよさを認め合い，コミュニケーションを図る（人間関係形成能力）活動等，日常の中でキャリア教育の視点を意識して取り組んでいく。

Bの部分は，「勤労観・職業観を育てる活動」である。体験活動は含まれないものの，学習内容や活動に「生きること」「働くこと」を意識しやすい内容が含まれている。この部分は，国語科や社会科，道徳や特別活動等が多い。

Aの部分は，「勤労観・職業観を体感する活動」である。体験活動を通して「生

きること」「働くこと」を意識しやすい内容が多く含まれている。社会科や生活科，総合的な学習の時間等の見学やインタビュー活動が組み込まれ，地域のキャリアモデルと関わることができる学習が挙げられる。家庭科の調理や製作等を通して自分の成長を実感したり，家族の一員としての視点をもたせたりする学習，係活動や当番活動，委員会活動等も含まれる。

(2) キャリア教育の視点を取り入れた教育活動の取組

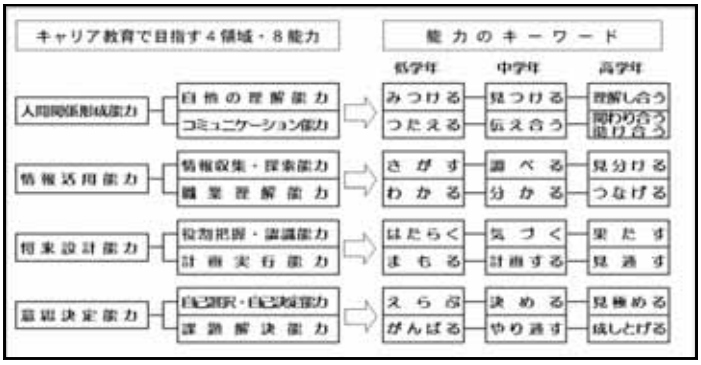
① 授業におけるキャリア教育の視点の工夫

ア 児童向けのキーワードの作成

児童がキャリア教育で身に付けたい能力を意識しながら学習ができるように，児童向けのキーワードを作成した。本校の「キャリア教育で養いたい能力・態度の枠組み」を基に，低・中・高学年のブロックごとに，児童の実態に合わせ，目指す児童の姿を表す短い言葉で，児童にも分かりやすい言葉を選んだ。例えば，情報収集・探索能力を，低学年は「さがす」，中学年は「調べる」，高学年は「見分ける」とした。

授業の中で，これらのキーワードを提示することにより，児童もキャリア教育で身に付けたい能力を意識しながら授業に臨むことができると考えた。

資料３ キャリア教育で目指す能力と児童向けキーワード



イ キャリア教育の視点を踏まえた学習指導案の作成

資料４ 指導案の形式

第○学年○組 ○○科学習指導案

どのようなキャリア教育の視点に立った授業を目指すのか，教師の本時のテーマを書く。

1 単元名 ○○○○○・・・・・

2 目標

(1) ○○○○・・・・・

★ キャリア教育の視点

○○○○・・・・・

単元を通して養いたい力を八原小学校の能力の枠組みから抜粋し，この単元で優先したいものから順に書く。

3 指導にあたって

(1) 教材観

(2) 児童観 (在籍数○名) ○○年○○月○○日実施

4 指導計画 (○時間扱い 本時は○次第○時)

次	時	主な学習活動	評価計画
	1	○○○○・	㋹ ○○○○・・・・・ (例；ノート)

5 本時の指導

本時の学習で，目指す能力や態度をどのような活動を通して育てたり高めたりしたいかを書く。

(1) 目標

(2) キャリア教育との関わり

○○○○・・・・・

(3) 展開 (㋮は身に付けさせたいキャリア教育の能力・態度 波線はキャリア教育の視点 評価)

配時	学習内容・活動	教師の指導と評価
↑ ○ ↓	1 ○○○○・・・・・ 学習課題 (1) ○○○○・・・・・ ・○○○○・・・・・ **キャリア教育の視点に立った事項に波線を引く。** 学習のまとめを書くときは，二重線で囲む。	**・キャリア教育の視点に立った言葉（キーワード）に波線を引く。短い言葉がポイント！** **㋮ 本時で身に付けさせたいキャリア教育の能力・態度についての評価 (～ 能力)** ○ 教科の目標についての評価 (例；ノート・観察 等)

授業を展開するにあたり，各教科の目標に迫るとともに，キャリア教育の能力・態度を育むことも目指している。そこで，学習指導案の中にもキャリア教育の視点等を明記し，教師が意識して授業を展開することができるように工夫した。

② 授業の実践

ア **Ａ勤労観・職業観を体感する活動**

○「縦割り班活動」

キーワードは「みつける」（低）
「伝え合う」（中）
「関わり合う」（高）

本校は，月に１回様々な縦割り班による活動を行い，学年を超えた仲間づくりを目指している。集団の中で役立つ喜びを味わったり自分自身のよさに気付いたりすることで，自己肯定感や自己有用感を育て，自信や意欲へとつなげていく活動として位置付けている。

活動方法は，５・６年生が分担して内容を計画し運営する。活動内容は，異年齢における集団遊びや「１年生を迎える会」「七夕集会」「こいのぼり集会」のような季節を彩る行事，また奉仕活動等多岐にわたる。こうした活動の中で，低学年は友達と仲良く遊び，お世話になった人に感謝の気持ちをもつこと，中学年は，高学年のよさを認め，協力して活動すること，高学年は，下級生と触れ合いながら集団の中で役割を果たすことをねらいとしている。

資料５　縦割り班活動実施計画案

１１月１７日（水）第５回縦割り活動

特別活動部会

1　期日
・平成２２年１１月１７日（水）午後１：２０～午後１：５０

１：０５～１：１０	歯みがき
１：１０～１：１５	移動
１：２０～１：４０	縦割り活動
１：４０～１：４５	移動
１：４５～１：５０	振り返り

2　ねらい
・活動を通して異学年との交流を深め，互いに協力し合う態度を育てる。

1　キャリア教育の視点
【低学年】・友達と仲良く遊び，お世話になった人などに感謝する。（自他の理解能力）
【中学年】・相手の気持ちや考えを理解し，仲良く生活しようとする。（コミュニケーション能力）
・自分の生活を支えてくれている人に感謝の気持ちを表す。（自他の理解能力）
【高学年】・異年齢集団における活動に積極的に参加し，年下の者の面倒を見る。（コミュニケーション能力）
・仕事における分業の意義や役割を果たすことの大切さが分かる。（役割把握・認識能力）
・活動を通して，自他の興味・関心や能力・適性を生かすことができる。（自他の理解能力）

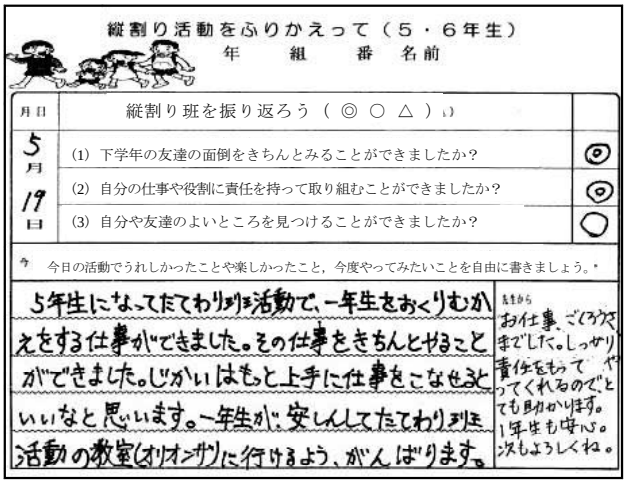
4　活動場所

チーム	場　所	チーム	場　所	チーム	場　所	チーム	場　所
あ(1-1)	校庭⑥	い(1-2)	校庭①	う(1-3)	教　室	え(1-4)	教　室
お(2-1)	校庭⑦	か(2-2)	校庭②	き(2-3)	教　室	く(2-4)	教　室
こ(3-1)	校庭⑧	け(2-5)	校庭③	し(3-3)	教　室	す(3-4)	教　室
そ(4-1)	校庭⑨	さ(3-2)	校庭④	ち(4-3)	教　室	せ(3-5)	教　室
て(5-1)	校庭⑩	た(4-2)	校庭⑤	な(5-3)	教　室	つ(4-4)	教　室
ぬ(6-1)	校庭⑪	と(5-2)	体育館(前)	の(6-3)	教　室	に(5-4)	教　室
		ね(6-2)	体育館(後)			は(6-4)	教　室

＊雨天の場合　校庭チームは，教室になります。

5　移動方法
・５年生は１年生を送り迎えすること。
・どのグループも一度担当の教室に移動して６年生の指示を聞き，校庭や体育館に移動する。

資料６　振り返りカード



下級生にとっては，上級生が身近なキャリアモデルとなり，上級生に感謝の気持ちをもちながら活動に取り組み，「学校が楽しい」ところであることを実感することができた。上級生は，活動後，振り返りカードに友達のよさや自分の頑張り等を記入し，カードを互いに読み合うなどして，達成感を味わい，次の活動に向けて意欲をみせていた。教師は，下級生が上級生のよさに気付くような声かけをしたり，児童の頑張りを称賛するコメントを振り返りカードに記入したりした。

イ **Ｂ勤労観・職業観を育てる活動**

○「宿泊学習を通して自分や友達のよさをみつけよう」学級活動（２）５年

キーワードは「理解し合う」

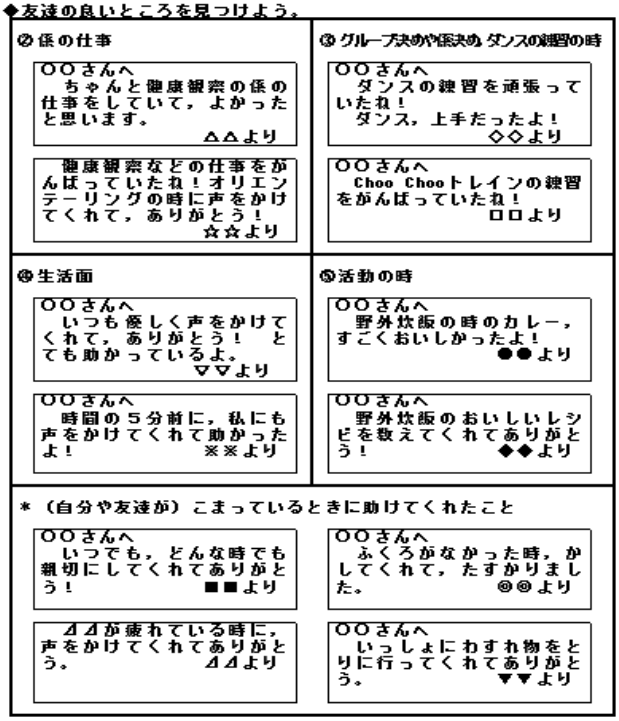
資料７　感想を伝え合う児童たち

誰もが役割をもち，みんなのために働く場面が多々ある宿泊学習は，互いを認め合う良い機会である。そこで，宿泊学習を通して改めて友達のよさに気付くとともに，よさを伝え合う活動を通して，自分のよさや成長に目を向けさせたいと考えた。授業では，「宿泊学習を通して気付いた友達のよさを伝え合うことによって，自分のよさや成長できた点に気付き，これからの学校生活に自信をもって取り組もうとする意欲を高める。」ことを目標とした。キャリア教育の視点を「自分のよさや成長に気付き，自信をもって生活することができる。」（自他の理解能力）とし，キーワードを「理解し合う」とした。

友達の頑張りをカードに書いてプレゼントしたり，友達からもらったカードを読んで感想を伝え合ったりする交流の場面では，児童が一人一人のよさに目を向けることができるようになった。

また，振り返りの場面では，「宿泊学習を通して，自分に自信がもてた。」「自分や学級の目標の実現に向けてこれからの学校生活を前向きに送っていこう。」「自分がみんなのために役立っていることを友達から教えてもらってうれしかった。」などという声が聞かれた。さらに授業の終末の段階で，学年始めに立てた個人の目標や学級の目標を再確認し，自分や学級が成長できていることを実感することもできた。

資料８　友達にもらったカードを整理する



ウ　Ｃキャリア教育でねらいとする能力・態度を育てる活動

○「四角形と三角形の面積」算数　５年　キーワードは「成しとげる」

授業では，「既習の図形の性質を利用し，平行四辺形や三角形などの面積の求め方を進んで考える。」を目標とした。また，キャリア教育とのかかわりでは，「自分なりのアイディアで，課題を解決しようとする。」（課題解決能力），「友達の意見を聞きながら話合いをしようとする。」（自他の理解能力）とし，キーワードを「成しとげる」とした。

学習課題とともに，本時で身に付けさせたいキャリア教育の能力・態度のキーワード「成しとげる」を提示した。このことにより，本時で身に付けさせたいキャリア教育の能力・態度について児童の意識化を図った。

課題解決の見通しをもたせる段階では，既習事項に帰着させ，それぞれに面積の求め方の予想を立て（情報収集・探索能力）させた。

課題解決においては，グループ活動を取り入れ，友達同士で意見を交換することで「いろいろな考え方」に気付かせた。また，図を自由に操作させることで解決の方法を工夫させ，課題解決が図れる（課題解決能力）ようにした。

比較検討の場面では，平行四辺形の面積の求め方について，「切ったり補助線を引いたりしてみよう。」「２つの台形を合わせて長方形にしてみよう。」「直角三角形を移動してみよう。」など，様々な意見を交換する中で理解を深め（自他の理解能力）公式を導き出し，面積を求めることができるようにした。

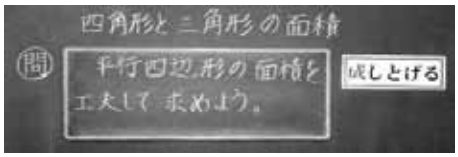
資料９　授業の流れとキャリア教育の視点

１　単元名　四角形と三角形の面積

２　キャリア教育の視点

・自分なりのアイディアで課題を解決しようとする。（課題解決能力）

・友だちの意見を聞きながら話合いをしようとする。（自他の理解能力）



３　本時の指導

(1) キャリア教育との関わり

少人数での活動の中で，具体物を操作したり，自分の考えや解決方法を友達と交換したりすることにより，課題解決能力を高めていきたい。

(2) 活動の流れ

①　学習課題をつかむ。

②　平行四辺形の面積の求め方の見通しをもつ。

③　平行四辺形の面積を調べる。

④　結果を発表し，話し合う。

⑤　学習のまとめをする。

課題とともに「**成しとげる**」のキーワードを提示（意識化）

既習事項を基に，課題解決についての予想を立てさせる。（情報収集・探索能力）

いろいろな調べ方を工夫させる。（課題解決能力）

自分の考えと友だちの考えを比べながら話し合わせる。（自他の理解能力）

振り返りを基に達成感を味わわせる。（意識の強化）

学習の振り返り（振り返りカード）では，「自分の考えを言った時，『すごいね。』と言われてうれしかった。」「友達の考えを聞いて面積の求め方が分かった。」「いろいろな考え方ができることが分かって楽しかった。」等，多くの児童が達成感や自己肯定感をもつ（意識の強化）ことができた。

(3) キャリア・カウンセリングとキャリア教育の評価

①　児童の変容や成長の評価

ア　振り返りカードや作品などを基にしたポートフォリオ（児童）

(ア)「夢ファイル」

児童が好きなもの，興味をもったもの，頑張ったこと，自信につながったこと，勉強になったと感じたもの，感動したこと，振り返りカードなど，学校生活の中で取り組んできたことを中心に「夢ファイル」と名付けたファイルにとじ込んで累積し，ポートフォリオとしてまとめていく。それを基に振り返り，自己を見つ

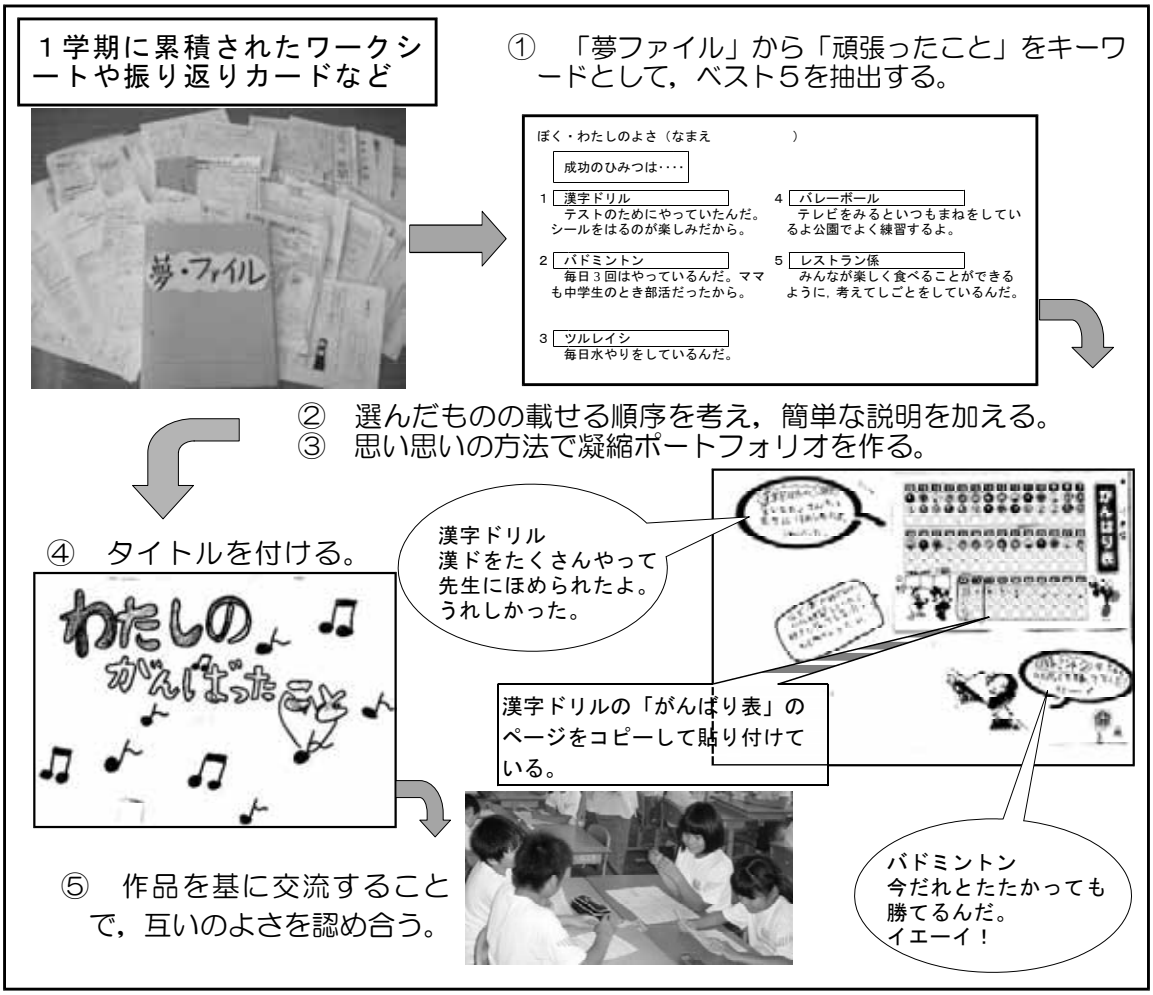
め直したり，成果を実感したりすることで意欲や自信をもたせ，様々な活動に主体的に取り組む児童を育てることを目的としている。

(イ)「凝縮ポートフォリオ」

「夢ファイル」に累積したものの中から，「好き」「頑張った」「得意になった」「自信につながった」等をキーワードとして抽出し，学期ごとまたは１年間でまとめたものを凝縮ポートフォリオとし，それを基に学習を振り返る活動を行った。

凝縮ポートフォリオの作成から振り返りまでを次のような手順で行った。

資料10　凝縮ポートフォリオ作成の手順（児童Ａの例）



児童Ａは，「１学期，頑張ったことがたくさんあったな。」「漢字練習をほめてもらってうれしかったな。」と頑張りに気付き，自分の振り返りを友達に伝えるための工夫をしながら凝縮ポートフォリオを作成していった。

交流の場では，児童Ａは「バドミントンが強いんだね。試合でいつも勝つなんてすごいね。」「毎日，漢字練習に取り組んでいて素晴らしいね。」等，友達から感想を伝えてもらった。そのことによって，新たな自分への気付きと自信が生まれた。

その後，凝縮ポートフォリオを基にキャリア・カウンセリングを行った。児童Ａの「友達に知ってほしかったことをたくさん分かってもらえてよかった。」「友達のおかげで，自分では気付かなかった『頑張っていること』がたくさんあることが分かった。」

「２学期も漢字練習や係活動を頑張りたい。」等の言葉の中に，自己肯定感とともに２学期の学校生活に自分のよさを生かそうという気持ちが表れていた。

担任は，児童Ａの学習意欲の高まりや粘り強く取り組むことができるようになったことについて励ましの言葉掛けをし，振り返りカードにも助言となるメッセージを書き入れて児童Ａに手渡した。

② 教育活動の評価

担任は，学期ごとにキャリア発達コメントシートを活用し，キャリア教育で養いたい８能力の視点から学級の児童の様子を評価している。児童の振り返りカードやキャリア・カウンセリング，アンケート等を基に，キャリア発達コメントシートに児童の変容や成長を記録し，児童の成長を促した要因，成長に結び付かなかった要因は何かを振り返り，指導の改善点を見い出している。

資料11　キャリア発達コメントシート（一部抜粋）

キャリア理解諸能力			学年	キャリア発達課題	コメント
人間関係	自他の理解能力	自己理解を深め，他者の多様な個性を理解し，互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	低学年	自分の好きなことや嫌いなことをはっきり言う，友達と仲良く，助け合う，お世話になった人などに感謝する。	「よいところ見つけたカード」に友だちの頑張りを書き，帰りの会に伝え合ってきた。友達のよいところや頑張りを見つけようとする心の目が育ってきている。国語の「お礼の手紙」の単元を通して，お世話になっている人への感謝の気持ちを表すことができた。しかし，日常生活では，感謝の気持ちは持っているようであるが，上手く表現することができない児童も見られる。今後も声かけを大切にしながら，自分の得意なものを自覚して，自信をもって取り組んでいる児童もみられる。
			中学年	自分のよいところを見つける，友達のよいところを認め，励まし合う，自分の生活を支えている人に感謝する。	
			高学年	自分の長所や欠点に気づき，自分らしさを発揮する，話し合うなどに積極的に参加し，自分と異なる意見も理解しようとする。	

５　研究のまとめと本校からの提言

(1) 研究の成果

① 学習活動だけでなく学校生活全体において，自信をもち，粘り強く，主体的に取り組む児童が多くなった。

② キャリア教育に対する教師の理解が深まったことで，キャリア教育の視点を日常的に意識し，教育活動を行うことができるようになってきた。

③ 授業実践・授業分析を繰り返すことで，教師一人一人が課題意識をもって授業に取り組み，授業の改善につながった。

(2) 今後の課題

① ポートフォリオづくりと活用，キャリア・カウンセリングの追究

② 本校の「能力・態度の枠組み」を基にしたキャリア教育の成果の検証

③ 保幼小中の連携と小小連携のさらなる推進

(3) 本校からの提言

① 「国語や算数等の教科の中でも，キャリア教育を意識していきましょう。」

新しいことを始めるという意識ではなく，今までの学習活動の中にキャリア教育の視点を取り入れて実践しようと意識することが大切となる。

② 「児童にも，キーワードや言葉かけでキャリア教育を意識させましょう。」

児童がキャリア教育で育てたい能力・態度を日常的に意識することで，様々な活動に意欲的に取り組むことができる。

③ 「児童の振り返りを大切にしていきましょう。」

振り返りカードは，ポートフォリオとして累積することで，児童は自分の成長を実感でき，教師は児童の変容を見取ることができる。

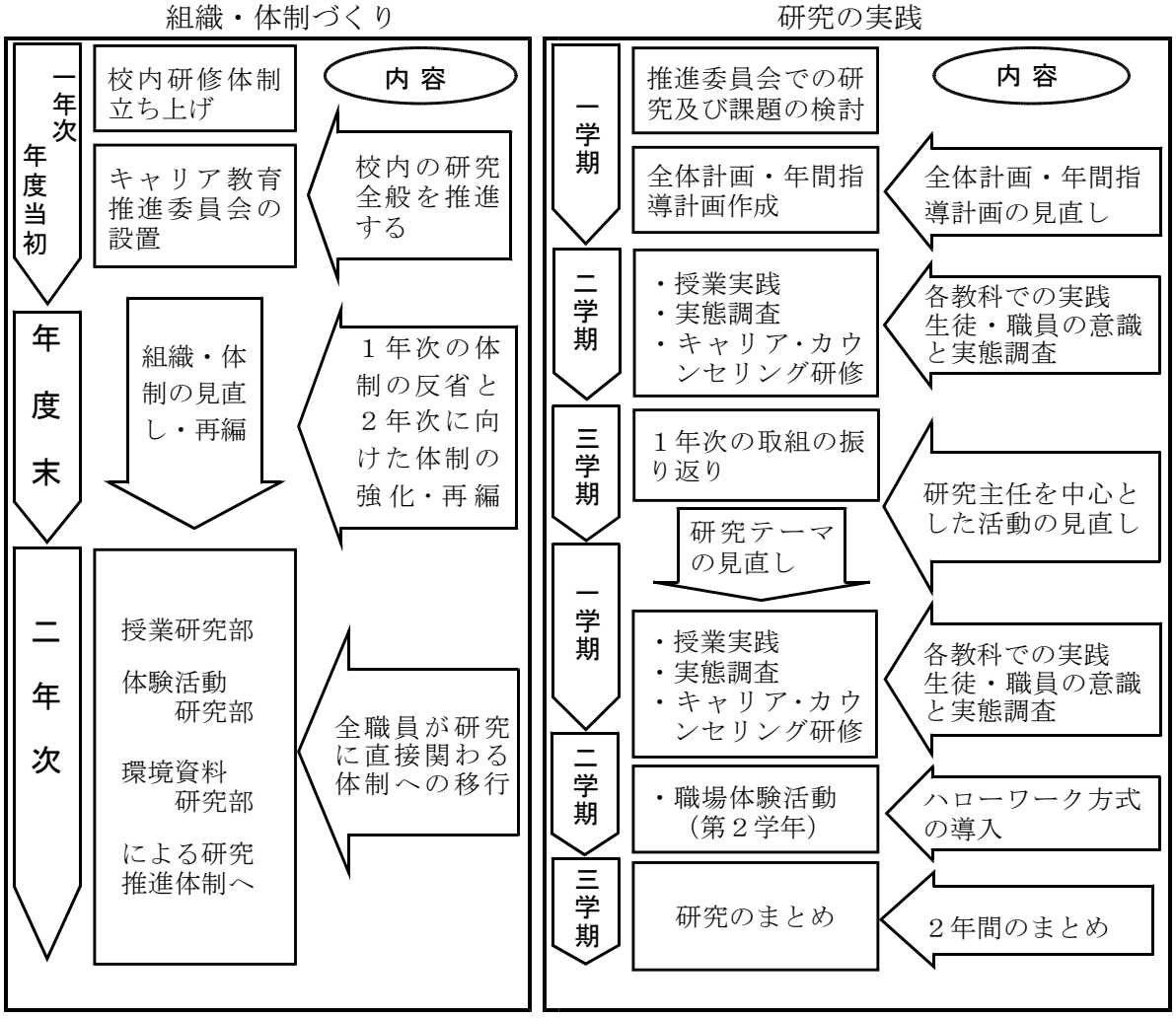
中学校実践事例１：「キャリア・カウンセリングを生かした教科指導と職場体験活動の工夫」

神栖市立神栖第四中学校　URL：http://www.sopia.or.jp/kami4/

１　学校の概要

本校は，鹿島臨海工業地域の中核都市である神栖市の北西部に位置している。通常の学級数12，特別支援学級数４，生徒数428名の中規模校である。生徒は，明るく元気があり，部活動が盛んである。平成22年度は，「集団のもつ活力を生かし，リーダーの育成とキャリア教育の充実を図る」ことを学校経営の努力事項の一つに掲げ，社会生活への適応能力の基礎づくりに取り組んでいる。

２　キャリア教育の取組における工夫と改善の概要



３　特に力を入れてきた取組

(1) キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた教科指導

(2) キャリア・カウンセリングを取り入れたハローワーク方式の職場体験活動

4　実践内容

(1) キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた教科指導

① 生徒の実態と教師が抱える課題

本校生徒の多くは明るく元気があり，部活動にも積極的に取り組んでいるが，一方で，人間関係につまずき，学校生活に適応できない生徒の姿も見受けられる。授業においても，内容が理解できずに，学力不振に悩む生徒の数は増加傾向にある。

また，本校教師の年齢構成は若く，経験の浅さから，対処的な生徒指導に偏ってしまう傾向もある。生徒の実態を的確に把握し，課題を解決するための十分な手立てを講じることができていないと思われる。(図１)

生徒の実態
- 人間関係を築くことが得意ではない。
- 日常生活のリズムが定まりにくい。
- 学習に集中して取り組むことが難しい場合がある。
- 将来の自分をイメージできるようなキャリア・モデルを設定することが難しい。

職員が抱える課題
- 課題解決のために必要な時間の確保が難しい。
- 課題解決を図るための協議や研修の機会が少ない。

図１　神栖四中が抱える課題

以上のような生徒の実態と職員が抱える課題を解決していくための手立てを講じていく必要がある。そこで，本校における課題の解決を目指し，「人間関係形成能力の育成」を中心に据えた「キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた教科指導」を実践することとした。

② 「キャリア・カウンセリング」のとらえと教科指導

キャリア・カウンセリングの目的は，生徒のキャリア発達を促し，将来生徒が自らの進路や生き方を選択・決定するための力を醸成していくことである。カウンセリングを通して生徒の抱えている悩みや課題を教師が共感的に受け止め，共に寄り添う姿勢を保ちながら支援を行っていくプロセスが重要である。また，キャリア・カウンセリングを進めていく上で教師が行う主な支援は，日々の授業において生徒の成長を促す有効な手立てでもある。(図２)

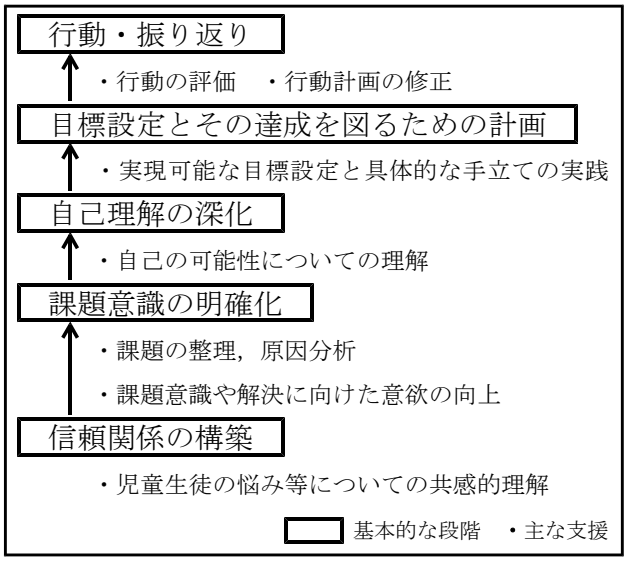


図２　キャリア・カウンセリングの基本的な段階と主な支援

学習指導案にキャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れることは，教師主

導で一方的に流れる傾向にあったそれまでの学習指導から，生徒主体の学習指導への転換を可能とする。授業において生徒が抱える課題及び課題解決のためのプロセスは，生徒が生きていく上で直面する問題及び問題解決の過程であり，キャリア発達にかかわる諸能力の育成につながる。つまり，日常実践している教科指導は，キャリア発達を促す取組になるといえる。以上のことから，本校では，生徒のキャリア発達を促し，生徒の実態と教師の抱える課題を解決するために，キャリア・カウンセリングの視点と配慮を学習指導案の展開等に取り入れ教科指導において実践することが，課題解決の手立てとして機能し，本校生徒の実態を踏まえたキャリア教育の実践になると考えた。また，この実践が，学力向上の実現へ向けた取組にもなり得るととらえている。

教科指導を進めていく上で，生徒が抱える課題や悩み，問題について教師がしっかりと見定め，生徒の実態に合った声掛けや，手立てを講じていくことにより，生徒は自分の課題をはっきりと意識し，その克服に向けた準備をすることができるようになる。また，その過程を通して，課題を自力解決できた自信が積み重なり，次の活動への推進力が生まれる。このことは，教師と生徒とのよりよい人間関係の醸成につながり，そこに，意図的な集団活動の導入を行い，キャリア・カウンセリングの視点に即した活動を展開していくことが，生徒同士の人間関係の形成にも役立ち，生徒の自己有用感を高めるものとなり得ると考えた。

③　「キャリア・カウンセリングの視点と配慮（例)」作成

表１　「キャリア・カウンセリングの視点と配慮（例)」抜粋

キャリア･カウンセリングの視点と配慮（例）　早稲田大学大学院　三村隆男教授監修

関連能力	視点 キーワード	キャリア・カウンセリング的な配慮
人間関係形成能力	受容 尊重	・生徒一人一人の考えや意見を受容的な態度で受け止める。 ・生徒一人一人に寄り添い，傾聴する。 ・生徒一人一人の考えや意見を大切にし，学習や生活の場に積極的に生かす。 ・生徒一人一人の迷いや沈黙を受容的な態度で受け止め，待つ姿勢を心がける。
	共に	・生徒のつまずきの傾向を把握し，支援に生かす。 ・生徒の学び合いによる知識・情報の共有化を図るための学習形態を工夫する。 ・生徒の実態に即した学び方を提案し，分かるきっかけを生徒がつかむまで支援する ・生徒が自由に発言できる雰囲気づくりを心がけ，共感的な態度で支援する。 ・生徒のつぶやきを教師や生徒同士が大切にし，話合い等の深まりに生かすことがで
	励まし	・生徒に寄り添い，励ましながら支援する姿勢を大切にする。 ・班活動等で，生徒が互いを認め合える場面を意図的に設定する。 ・班活動等で，生徒が互いに励まし合える場面を意図的に設定する。 ・段階的な支援を通して，できたことを認め励ますことにより，生徒が次の課題解決
情報活用	理解 活用	・情報収集や情報活用を通して，生徒の自己理解の様子を確認しながら支援する。 ・既習事項を活用することで，主体的な課題解決が可能になることを理解させる。 ・情報機器の活用能力を見極めてグループを編成し，効率よく支援が行えるように配 ・体験活動やコミュニケーション活動を活用し，情報理解の深まりを促す。

教科指導の中にどのような内容でキャリア・カウンセリングの視点を取り入れていくかを検討し，上記の①，②を受け，キャリア・カウンセリングで必要とされる視点を簡潔なキーワードで明記し，教師がとるべき態度や配慮について一覧表にまとめた（表１)。それぞれのキーワードに即して，生徒に対する教師側の配慮事項，姿勢を簡潔にまとめたも

のである。「キャリア・カウンセリングの視点と配慮（例）」は，早稲田大学大学院教授，三村隆男氏に監修を仰ぎながら，変容する本校生徒の実態に沿ったものに，より近づくことができるように現在も修正を加えている。

④　キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた教科指導の実践

ア　学習指導案の改善

従来の指導案の形式に，「キャリア教育の視点」「キャリア・カウンセリングの視点と配慮」の項目を新しく設定した。さらに，指導計画及び本時の指導にも配慮すべき事柄として明記することにより，指導者による支援の充実を図った。（資料１）

現在は，指導案に，「生徒育成」（生徒指導をより積極的にとらえ直し本校が独自で提唱している）の理念と，育成のための具体的な手立て等を反映させるための改善も行っているところである。

教科指導で生徒に身に付けさせたい力を「キャリア教育の視点」に明記し，教師側が配慮すべき事柄を「キャリア・カウンセリングの視点と配慮」の項目に示すこととした。これにより，生徒に身に付けさせたい力と，そのためにとるべき教師の支援が具体的に把握できるようになった。また，授業後に指導案の形式を再検討し，改善を図ってきた。

資料１　学習指導案の例（抜粋）

第２学年Ｃ組　理科学習指導案

１　単　元　２分野　動物の仲間

２　目　標

○　動物について興味をもち日常生活に関連付けたり，動物の種類について意欲的に調べようとしたりする。（①　自然事象への関心・意欲・態度）

○　脊椎動物の仲間について，体のつくりや体温の変化などの特徴を基に分類の観点を設け，動物を分類し，比較・検討することができる。（②　科学的な思考）

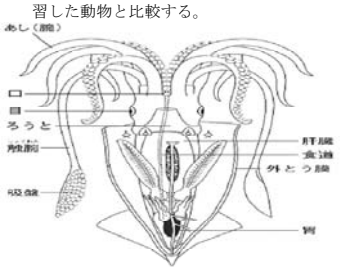
○　正しく安全に観察・実験を行うことができる。また，動物の体のつくりを調べ，分かりやすく記録することができる。（③　観察・実験の技能・表現）

○　動物の体のつくりについての基本的な概念や多様性や規則性を理解し，知識を身に付けている。（④　自然事象についての知識・理解）

〈キャリア教育の視点〉
１－①　他の生徒の発言にも耳を傾けることができる。
１－②　観察・実験における考察を，班やクラス全体でお互いの意見を聞きながら話し合うことができる。
２－①　教科書や図鑑，インターネットなどを活用して必要な情報を収集することができる。
２－②　学習内容を，日常生活と結びつけて考えることができる。
３－①　観察・実験などの班活動において，役割を分担して活動することができる。
３－②　手順に従い，確実に観察・実験を行うことができる。
４－①　観察・実験において，与えられた器具を正しく使い，学習を進めることができる。
４－②　学習を進めるなかで自然の事物・現象の中に新たな問題を発見し，解決していくことができる。

〈キャリア・カウンセリングの視点と配慮〉
「共に」　生徒が自由に発言できる雰囲気づくりをする。
「受容・尊重」　生徒一人一人の考えや意見を大切にする。

(3) 展開

学習内容・活動	◇キャリア・カウンセリングの視点・配慮 教師の支援・評価
1　本時の学習課題を知る。 (1) 前時の復習をする。 (2) 本時の学習課題を聞く。 イカを解剖し，軟体動物の特徴を確認し，これまでに学習した動物との共通点と相違点を見つけよう。	観察の内容が安全であることと，成功させるポイントを予備実験などで確認しておく。 ◇生徒が自由に発言できる雰囲気を作り，共感的な姿勢で活動を支援する。（共に）
2　課題解決のための観察・実験をする。 (1) 観察の方法を聞く。 (2) 外形の観察をする。 (3) 腹側から外套膜を切り開く。 (4) 体の中のつくりを観察する。 (5) 体のつくりの特徴をまとめ，これまでに学習した動物と比較する。	・イカの体のつくりについての確認をする。 ・各班に観察手順と，イカの解剖図を用意し，自信をもって観察を行えるようにする。 ◇生徒の意見や発言を尊重し，生徒が活動に対して主体的に取り組めるようにする。（受容・尊重） ・班内で役割分担をすることで，一人一人の活躍の場作るようにする。 ・外形では，脚の数や形，各部位の名称と特徴を観察できるように助言する。 ・解剖ばさみの使い方に注意して切り開くように指導する。 ・内蔵の位置やつくりを観察できるように助言する。 ・観察を行って発見したことを自由に書かせ，他の動物との比較について考えられるようにする。 ・背骨や脚の節，鰓，口，消化器官の存在の有無から，これまでに学習した動物との共通点と相違点に注目できるよう助言する。
	
3　比較した結果を発表する。 4　比較した結果をもとに，動物の体のつくりについて考察する。 5　本時の学習を振り返る。 (1) 授業感想紙の記入を行う。	(評) イカの体のつくりについて観察を行い，軟体動物の体のつくりや特徴を確認し，これまでに学習した動物との共通点と相違点を見いだすことができたか。　(②，③　行動観察・ワークシート)

イ　授業実践例

－第２学年　理科　第２分野「動物の仲間」－

本校生徒の抱えている課題の解決を目指し，「人間関係形成能力」を育てるために，「キャリア・カウンセリングの配慮」と小グループによる活動を実践し，生徒同士による学び合いの充実を図った。

まず，本授業では，生徒の主体的な学習を支援するための実験の手順表を教師が準備することにより，生徒の自主的な活動を促した。次に，小グループによる活動では，解剖ばさみを扱う役割と観察内容を記録する役割を生徒自らが話合いにより決定する場面を設定した。自ら決めた役割に責任をもち，活動時間の配分も考慮しながら，充実した表情で活動を進める姿が見られた。また，活動を進める過程で，イカをどのように切り開いていくのがよいのかなど，作業の流れを確認するための積極的な意見交換が行われた。生徒の中には，観察を進めていく際に生じた疑問や課題を解決するために話し合う等，協働性を発揮して活動する姿も見られた。解剖の順序で迷い，活動が滞ってしまったグループへは，生徒の考えを聞いた上で，「そうだね，ここから切るといいかもしれないね。」「その考えで大丈夫だと思うよ。がんばってみて。」と声を掛け，キャリア・カウンセリングの視点と配慮を基に，生徒の主体的な学び合いを支える教師の愛情あふれる支援が行われた。

資料２　役割分担活動の様子

資料３　学び合いの場面

資料４　教師による支援の場面

このように，教師が受容的な態度で見守りながら接したことにより，生徒は自らが抱えた疑問や活動の過程で生じた迷い等をグループ内の生徒同士で共有し，安心して解決することができた。また，生徒が抱いた疑問等に教師が丁寧に対応できたことが，学びに対する生徒の意欲を喚起し，主体的な活動につながったと言える。キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた授業が，教師と生徒，生徒同士の人間関係の醸成につながったと考える。

成　果

・生徒が学び合う姿が随所に見られ，主体的な活動が展開された。
・キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた教科指導における教師の受容的な姿勢等が，生徒の主体的な学習の支援に役立った。

課　題

・活動内容によっては，生徒の積極性を見取りにくい場面がまだある。

改善案

・活動の精選と，一人一人の生徒が長所を生かせるような役割等の提案を促し，自己存在感と自己有用感を実感できる場を工夫していく。

ウ　学習形態の工夫と改善

生徒の人間関係形成能力を育てる手立ての一つとして，授業に「学び合い」の機会を取り入れた。一斉指導以外に，学級内の話合いの場面ではコの字形，小グループでの役割を分担する活動では４人グループ，小グループ内での話合いでは３人グループの形態を取り入れたことで，活動の活性化を図ることができた。

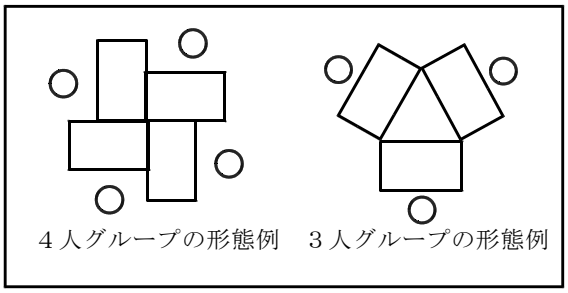


図３　学習形態の例

(2) キャリア・カウンセリングを取り入れたハローワーク方式の職場体験活動

① ハローワーク方式の職場体験活動について

本校では今年度「ハローワーク方式の職場体験活動」を実施している。これは，職業に就くためにはどのような手順を踏んでいくのかを生徒が疑似体験し，自分の将来につなげていくことを目的としているものである。(図４)

これまでの職場体験活動を工夫し，事業所の選択や電話連絡等の手続きを生徒自身に任せる方式を取っている点が大きな特徴である。生徒は自分の特性や希望を考慮し，職場体験先を決定する。選択に迷う生徒へは，その生徒の長所等を踏まえた上で支援や助言を行う。この方式では，事業所の担当者との面接結果が伝えられ，採用・不採用の判断が生徒に直接下される。他者が，自分に抱く印象，学校生活の中で指摘されている挨拶や身だしなみ，積極的に行動しようとする姿勢が，実社会においてはとても大切であることを生徒が客観的に実感できる機会となる。体験活動後には，生徒の反省や事業所からの感想，意見を基に，これからの生活と職場体験活動で経験したものをどのように結び付けていくか教師と生徒が共に考える時間を設定した。

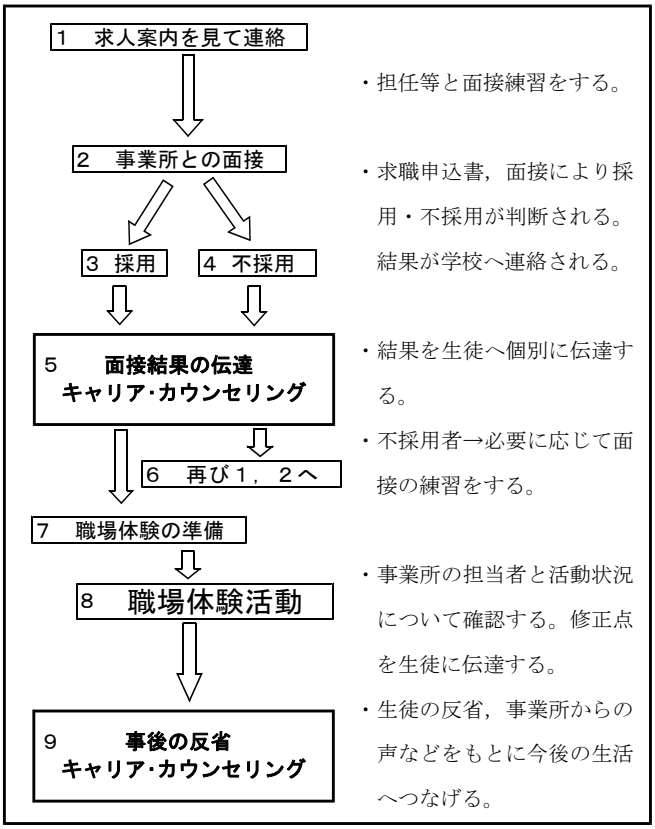


図４　キャリア・カウンセリングを取り入れたハローワーク方式の職場体験活動の流れ

資料５ 求人案内を見る生徒の様子

② キャリア・カウンセリングを取り入れた場面（体験前：事前指導の充実）

事業所からの採用・不採用の結果を生徒一人一人に伝達する際に，今後の心構え等について触れ，課題意識の明確化を図った。

採用された生徒には，これからの活動について何が必要かを問いかけながら，自らに課した責任と採用された喜びを次の活動へつなげていけるように助言する。不採用になった生徒へは，「なぜ不採用になったのか」を考える時間を十分に確保する。また，キャリア・カウンセリングを通して，日々の学校生活において生徒が抱える課題に気付かせ，教師と共に考え，課題を解決するために生活態度や生活習慣を改善していくように励ましながら見守った。（資料６）

資料６　不採用となった生徒Ａのケース

教：どうして不採用になったのだろうね。**（受容・尊重）**
Ａ：…挨拶の声が小さかったことや，質問にすぐ答えられなかったことだと思います。緊張してしまって。
教：初対面の大人の方を前にしたんだからね。わかるなぁ。先生も初めて会う人と話すのは緊張するよ。**（受容・尊重）**
Ａ：先生でも緊張するんですか？
教：するよ。誰でもそうじゃないかな。**（受容・尊重）**
Ａ：そうか…。よかった。
教：では，この先のことについて考えてみようか。次の面接ではどうすることが必要かな？ **（共に）**
Ａ：はい。明るく，元気な声で挨拶をするようにして，面接でもいつも通りできるようにすることや，自分に自信をもつことだと思います。
教：そうだね。明るく，元気な声で挨拶をすることは働く上でとても大切だね。**（励まし）**

この後，Ａは家電量販店での活動を希望し，採用され，熱心に活動する姿が見られた。

③ キャリア・カウンセリングを取り入れた場面（体験後：事後指導の充実）

職場体験活動への取組について，生徒の反省と事業所からの声をもとにキャリア・カウンセリングを通して，生徒自身が取組を今後の生活に生かすためにフィードバックする機会を設定する。今回の経験を今後の自分の生活に生かしていくために何が必要かを具体的に考えさせ，気付かせるための事後指導を充実させることで，職場体験活動が一過性のイベントとして終わらないよう工夫した。

④ 成果と課題

成　果

・面接の練習や，採用・不採用の結果を生徒一人一人に伝達したことは，生徒が客観的に自分自身を見つめ直し，現在自分が身に付けるべきことについて気付くきっかけとなった。特に，不採用になった生徒にとっては，キャリア・カウンセリングを通して，日常生活を振り返り自分自身を改善していこうとする意識を高めるための機会となった。
・生徒同士で自分たちの服装や言動，行動について指摘し合い，アドバイスし合う姿が見られるようになってきた。

課　題

・新しい取組のため，教師間の共通理解を図っていくことが当初難しいと感じた。
・教師と生徒が数度にわたり事業所へ連絡を入れることもあるため，煩わしさを感じてしまう事業所があった。

改善案

・中長期的な計画のもと，準備期間等も考慮した上で事業所への連絡を行うようにする。事前説明を確実に行う必要がある。
・業種に偏りが出ないように，意識調査の結果を事業所選択に反映できるようにする。

５　研究のまとめと本校からの提言

(1) 研究の成果

① キャリア・カウンセリングの視点と配慮を教科指導に取り入れたことは，生徒一人一人の健やかな成長を促し，「生きる力」を育むための教育の尊さに教師が改めて気付く機会となった。

また，キャリア・カウンセリングとグループ活動を導入したことは，生徒の人間関係形成能力の醸成に役立ち，他者との関係の向上を図る上で効果的であった。（図５）

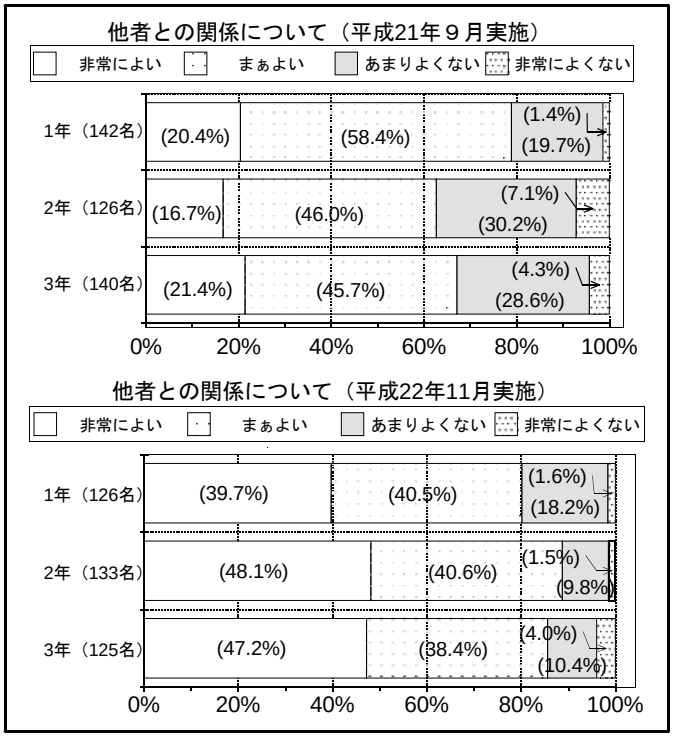


図５　意識調査の比較

② キャリア・カウンセリングを取り入れたハローワーク方式の職場体験活動は，生徒に働くことの「尊さ」や「厳しさ」等を体感させることができた。面接や採用・不採用に関する結果の伝達等，生徒にとっては厳しいと思われる体験をさせたが，生徒が今まで生きてきた中での経験にはないであろうと思われる充実感を味わわせることにつながった。

(2) 今後の課題

① 「キャリア・カウンセリングの視点と配慮例」に適切な修正を加えていきたい。

② ハローワーク方式による職場体験活動の進め方における改善を図っていきたい。

(3) 本校からの提言

① 「日々の教科指導に，キャリア教育を取り入れましょう。―キャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた教科指導の実践を―」

生徒及び学校の実態を踏まえたキャリア・カウンセリングの視点と配慮を設定し，全職員の共通理解のもと，教科指導において実践を進めてきた。特に，人間関係形成能力に関わる「受容・尊重」「共に」「励まし」を行う教師の姿勢はキャリア・カウンセリングの視点と配慮を取り入れた授業を通して，生徒の自己有用感を高め，キャリア発達を促す効果的な取組となった。また，教師がキャリア・カウンセリングの視点と配慮を実践することが，生徒理解を深め，生徒との人間関係をより豊かなものとし，授業改善に役立つことが分かった。そして，この生徒理解の深まり，人間関係の豊かさからつながる授業改善が生徒の学力向上に結び付いていくと考える。

② 「職場体験活動を工夫した取組にしましょう。―キャリア・カウンセリングを取り入れたハローワーク方式の職場体験活動のすすめ―」

キャリア・カウンセリングとハローワーク方式を取り入れて職場体験活動を工夫したことは，生徒一人一人に「働くことの喜びや厳しさ」を体感させ，自己との対話を繰り返しながらキャリア発達を促し，「生きる力」を育む上で効果的であると考える。

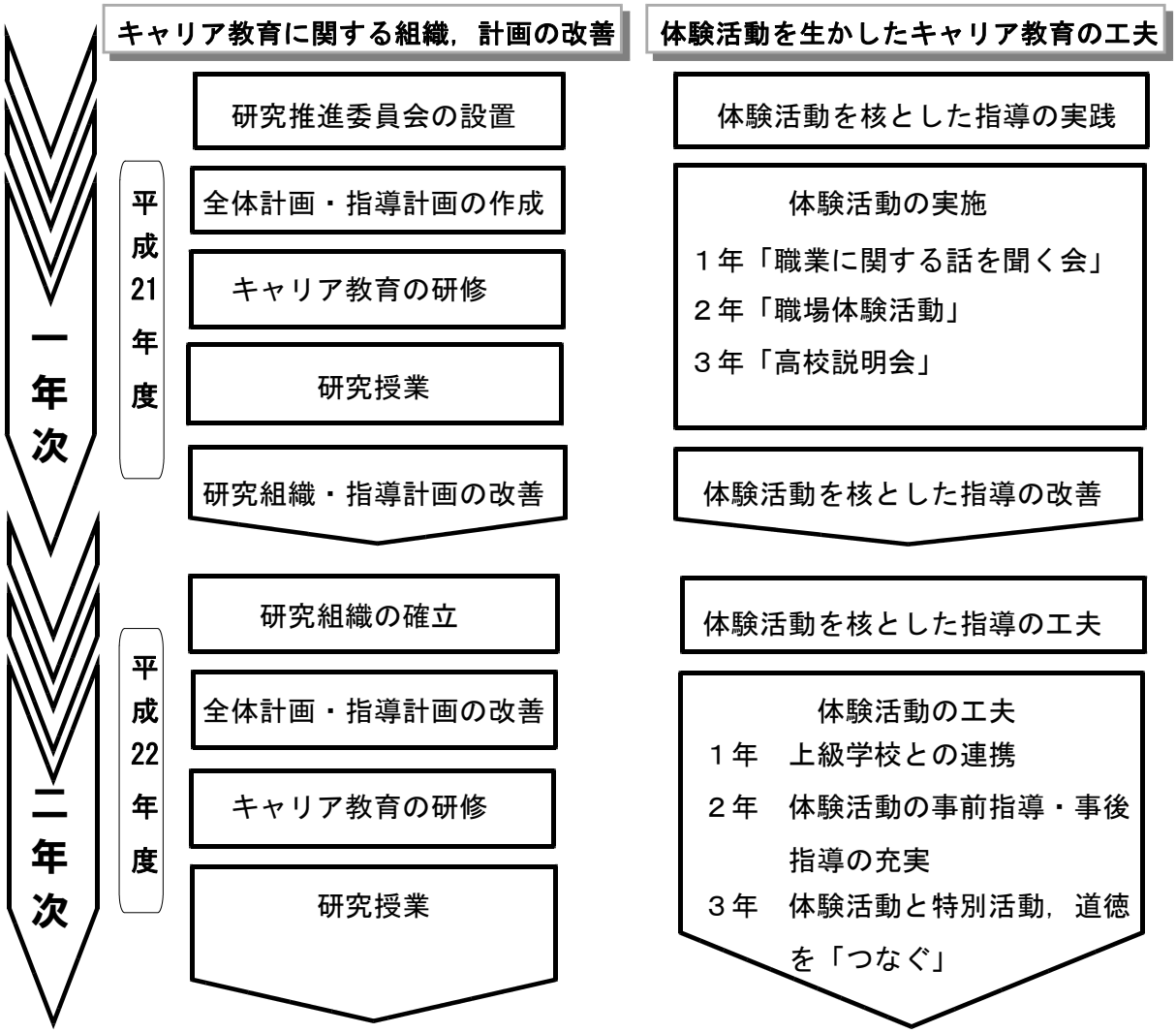
中学校実践事例２：「体験活動を生かしたキャリア教育の工夫と改善」

小美玉市立玉里中学校URL：http://city.omitama.ibaraki.jp/tamari-j/

１　学校の概要

本校は，霞ヶ浦に面した小美玉市の南部に位置している。生徒数は225名で，各学年２学級である。学区の北側は住宅地，南側は米，レンコン，果樹などを栽培する農地が広がっている。地域には，キャリア教育のゲストティーチャーや部活動の外部コーチなどとして教育活動に積極的に関わってくれる人が多く，人材が豊かである。また，本校は，平成19・20年度の２年間，小美玉市の研究指定校として，キャリア教育の研究に取り組んできた。

２　キャリア教育の取組における工夫と改善の概要



３　特に力を入れてきた取組

(1) キャリア教育の視点を取り入れた指導計画等の作成及び改善

(2) 体験活動を生かしたキャリア教育の工夫

4　実践内容

(1) キャリア教育の視点を取り入れた指導計画等の作成及び改善

①　研究構造図の作成

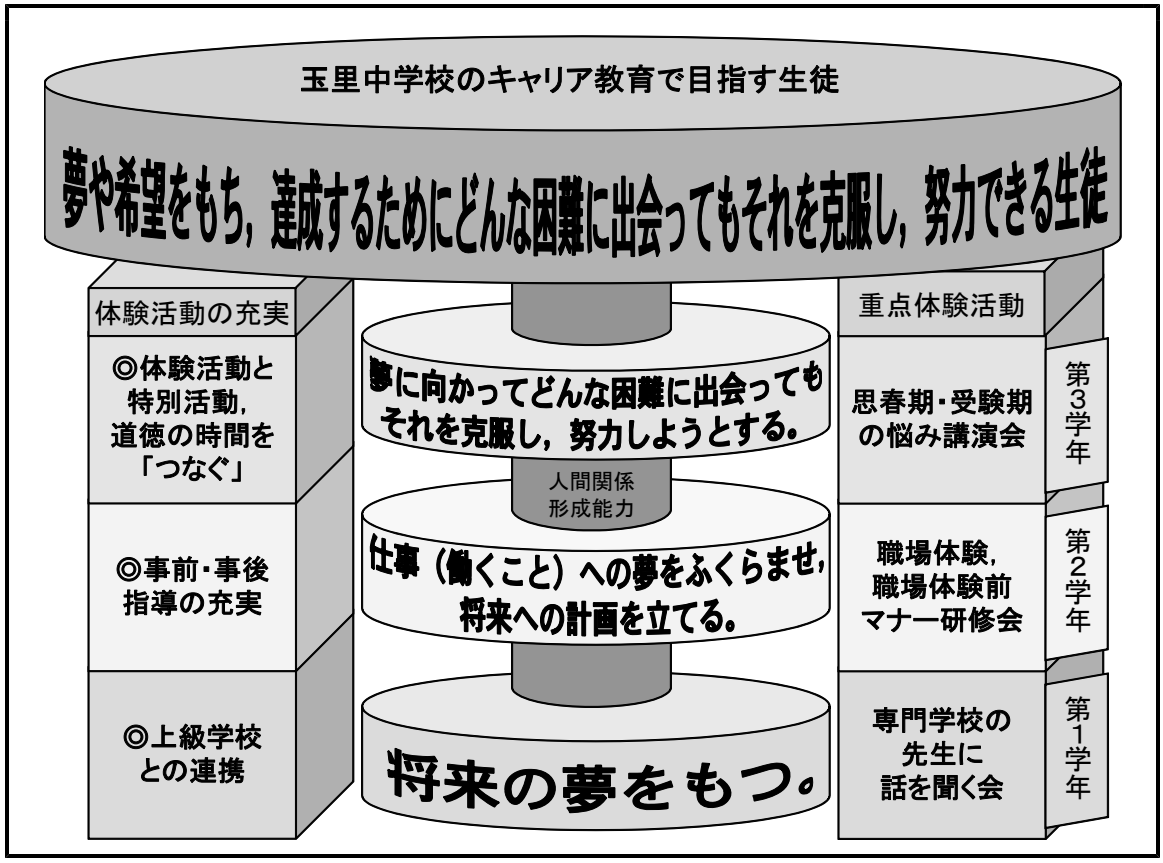


図１　研究構造図

本校の生徒は，自分の将来に夢や希望をもつことはできるが，困難に直面するとそこから目を背けてしまう傾向がある。直面した困難を乗り越えるための力を生徒に身に付けさせることの重要性を感じている。そこで，今回のキャリア教育の実践を通して育てたい生徒像を，「夢や希望をもち，達成するためにどんな困難に出会ってもそれを克服し，努力できる生徒」とした。

キャリア教育においては，「４領域８能力」に示されている「人間関係形成能力」の育成に焦点を当てていきたいと考えた。「人間関係形成能力」は，全ての能力の基盤となるものであり，人と人とのコミュニケーションに関わる内容を含んでいるためである。生徒は，他の人とのコミュニケーションを通じて，不安や悩みを克服できることがある。そこで，自分の将来に夢や希望をもち，困難を乗り越えながらそれを努力し実現させるためには，コミュニケーション能力の育成が必要だと考えた。特に，体験活動を生かしたキャリア教育を通して，コミュニケーション能力を高めるためのエクササイズを取り入れたり，臨床心理士やスクールカウンセラーを講師として招き，人間関係形成能力の育成に関わる体験をさせたりするなどの改善を試みる。さらに，各学年で育てたい生徒の姿を研究構造図（**図１**）に示して，教師間の共通理解を図り，３年間を見据えた指導が行えるようにした。

② 学年別指導計画の改善

各学年における体験活動の充実を図るために，次のように学年別指導計画を改善した。

第１学年　学ぶこと，働くことの理解を図るために，専門学校の講師から職業に関する話を聞く会の実施

第２学年　職場体験活動の事前指導，事後指導の充実

第３学年　高め合う仲間づくりをねらいとした体験活動と特別活動，道徳の時間をつなぐ取組の実施

第３学年指導計画の改善

進路の選択及び決定に不安や悩みのある生徒が多いという実態から，進路を意識し始める２学期に，「思春期・受験期の悩み講演会」や「高め合う仲間づくりエクササイズ」を指導計画の中に取り入れた。講演会は，臨床心理士を招き，思春期の特徴と悩みや不安の解決方法を具体的に学んだ。講演の内容から，不安や悩みを解決するためには，友達とコミュニケーションをとることが効果的であることが分かった。次に，学級活動において，スクールカウンセラーをゲストティーチャーとして，コミュニケーション能力の育成についての学習を計画した。さらに，道徳の時間において，「夢に向かって負けない心」を前の学級活動につなげて学習するようにした。（**図２**）生徒が自分の将来への夢をもち続けられるようにするために，学級活動や道徳の時間などを関連付けた指導計画を立て，ねらいに向けて教師が確実に指導を進めることができるようにした。

【改善前の指導計画】

実施月	教科・領域	題材・主題名	内　容	キャリア教育の視点 人	情	将	意
7月	学級活動	進路希望先を調べよう	・調べ学習を通じて進路計画を見直し，進路選択を生かす姿勢をもつことができるようにする。		○	○	○
7月	学級活動	生活のリズム３－（２）	・資料「早朝ドリブル」を読んで，きまりのある生活をしていくために心がけたらよいことを話し合う。	○			○
7，8月		高校の学校見学会，体験学習	・希望する高校の見学会や体験学習に参加し，進路選択に生かすことができるようにする。		○	○	
9月	学級活動		・夏休みに体験した高校の参加報告レポートをまとめる。		○		

【改善後の指導計画】

実施月	教科・領域	題材・主題名	内　容	キャリア教育の視点 人	情	将	意
7月	学級活動	進路選択に備えて	・進路を選択していく過程で起こる悩みや不安について，解決方法やアドバイスの仕方を考える。	○			
9月	学級活動	学校見学会参加報告書を作ろう	・夏休みに体験した高校説明会の参加報告をレポートにまとめる。		○		
１０月	学級活動	思春期・受験期の悩み講演会	・思春期の不安や悩みについての講演を聞き，解決方法を学ぶ。	○	○		
１０月	学級活動	高め合う仲間づくりエクササイズ	・スクールカウンセラーの指導の下で，コミュニケーションスキルを学ぶ。	○			
１０月	道徳	夢に向かって負けない心	・夢や希望（目標）をもち，障害や困難に直面しても，粘り強くやり抜く強い意志や態度を育てる。			○	○

人：人間関係形成能力　情：情報活用能力　将：将来設計能力　意：意思決定能力

図２　学年別指導計画の改善（第３学年）

(2)　体験活動を生かしたキャリア教育の工夫

①　一年次で明確になった課題から

一年次に，体験活動を生かしたキャリア教育を実践したところ，生徒の振り返りや感想，教師の反省などから，体験活動における課題が明確になった。そこで，課題を改善するための手立てとして，各学年とも重点体験活動を設定し，その体験活動を核とした指導の工夫を行った。

課題

第１学年における体験活動　【職業に関する話を聞く会】

「学ぶことや働くことに関する生徒への意欲付けが十分できていない。」

⇩

実態

地域の職業人を招いて職業に関する話を聞く会を実施したところ，話を聞こうとする生徒の意欲は高かったものの，十分な事前指導を行わなかったために，どのような仕事があるのかを理解できないまま話を聞いていた生徒が多かった。

また，「学ぶことや働くこと」について，生徒に考えさせる機会を十分に提供していなかったために，「何のために学ぶのか」という問いに対する反応も鈍かった。

⇩

手立て

第１学年における重点体験活動　【専門学校の先生から職業に関する話を聞く会】

「学ぶことや働くこと」について考えたり，職業について調べたりする事前学習の充実とともに，生徒の希望に合ったゲストティーチャーの招聘（しょうへい）に配慮する。

課題

第２学年における体験活動　【職場体験活動】

「職場体験活動が一過性の行事になってしまっている傾向がある。」

⇩

実態

本校では，夏休みに５日間の職場体験活動を実施している。実施後に受入事業所からの評価をまとめたところ，「あいさつや返事がしっかりとできた。」の項目が５段階評価で3.3と決して高い数値ではなかった。体験場所が，第一希望の生徒ばかりではなかったことによる働く意欲の低下も考えられるが，事前指導において働くことの意義，厳しさや尊さなどについて理解させる指導が不十分だったことが教師の反省点として挙げられた。

また，事後指導として発表会を行ったが，発表内容が体験の様子や感想だけで完結しているケースが多く，「学ぶこと，働くこと，生きること」について気付かせるための活動の必要性を感じた。

⇩

手立て

第２学年における重点体験活動　【職場体験，職場体験前マナー研修会】

「学ぶこと，働くこと，生きること」や働くことの厳しさや尊さに気付くための手立てを講じることが必要であり，そのための具体的な活動等を生徒に提供することが重要である。

課題 実態 手立て	第３学年における体験活動　【高校説明会】 「生徒が自分の将来に向けた夢や希望をもつことができるようにしたい。」 ⇩ 第３学年では高校の学校説明会を行っている。説明会の感想を見ると，進路決定に関する不安や悩みについての記述が多かった。高校説明会により，進路に関する多くの情報が生徒たちに伝えられる。これらの情報は，進路を決定する上で，大切な内容となることは確かであるが，必要な内容を取捨選択し，情報を活用する能力の育成が重要となる。 また，受験期は生徒が精神的に不安定になりやすい時期でもあり，夢や希望をもちつつも，それらの実現に向けて努力する精神力が弱まってしまい，一人で悩んでしまう生徒が増える傾向がある。 ⇩ 第３学年における重点体験活動　【思春期・受験期の悩み講演会】 受験期，あるいは受験期前に，生徒が抱える不安を和らげ，生徒自ら気持ちが安定できるようにするための手立てを講じることが必要である。

② 課題解決に向けた体験活動の工夫

ア 体験活動と特別活動，道徳の時間をキャリア教育の視点で「つなぐ」（第３学年における工夫）

本校では，今まで，進路指導が教育活動全体を通じて行われているとはいえなかった。そのため，生徒が夢や希望をもち続けることができない傾向にあった。このような実態を改善するためには，様々な教育活動をキャリア教育の視点で「つなぐ」ことが重要になると考えた。

そこで，本校では，体験活動（主に，総合的な学習の時間における体験活動）と特別活動，そして道徳の時間をキャリア教育の視点でつなぎ，本校の抱える課題を解決し，「夢や希望をもち，達成するためにどんな困難に出会ってもそれを克服し，努力できる生徒」の育成を目指すことにした。

第３学年においては，思春期・受験期の悩み講演会と高め合う仲間づくりエクササイズの活動を道徳の時間へとつなげ，夢に向かってどんな困難に出会っても克服し，努力しようとする生徒の育成を目指し，以下のような実践を行った。（**資料１**）

資料１　体験活動と特別活動，道徳の時間をキャリア教育の視点で「つなぐ」実践

学級活動：**進路選択の悩みについてみんなで話し合おう！**

グループで話し合い，解決のための手立てを調べ，発表した。

「みんなも同じような悩みをもっていたんだ。」
「ちょっぴり安心したな。」

【教師のつなぐ一言】　そうでしょ。みんな同じ受験生！みんなで乗り越えていきましょう。

⇩

総合的な学習の時間：思春期・受験期の悩み講演会（**重点体験活動**）

臨床心理士の講演を聞いた。

「私たちは，成長途中なんだ。悩んで当たり前なんだ。いろんな人と話すことで，悩みや不安を和らげることができるんだ。乗り切れるかも！」

【教師のつなぐ一言】　そうです。先生も成長途中です。みんなで話して乗り切っていきましょう！

学級活動：高め合う仲間づくりエクササイズ

スクールカウンセラーを講師に招いて行った。
３学年担当教師が関わり，授業を行った。

「話の聞き方って大切だな。このような関わり方で，人とじっくりと話すことができるんだ。人とじっくり話をすると，すっきりするかもしれない。」

【教師のつなぐ一言】　聞き方ってとっても大切ですね。そして人と話すことで前へ進むことができることもありますね。

道徳の時間：夢に向かって負けない心

ティーム・ティーチングで授業を行い，書く活動を通してじっくりと考えさせた。

「人は，成長し続けているんだ。目標の壁にぶつかった時，それをどう越えていくかが大切かもしれない。苦しさに耐える力が必要かも・・。自分にはあるだろうか？」

【将来へつなぐ教師の一言】　これからもいろんなことがあるはず。人間は夢をもつことが大切です！

体験活動と特別活動，道徳の時間をキャリア教育の視点で「つなぐ」こと，特に，生徒の不安や悩みに対応できるように指導計画を改善し，実践することによって，「自分が今のような態度をとるのは，この年代の特徴なのかもしれないな。」「自分と同じような悩みをもっている友達がいるんだ。」など，不安や悩みを自分なりに受け止めるような言葉を生徒から聞くことができた。しかし，これらは全ての生徒に当てはまることではなく，個々の生徒に対応したきめ細かな手立てを考えていく必要がある。

イ　上級学校との連携（第１学年における工夫）

昨年度までは，地域の職業人を招いて職業に関する話を聞く会を行っていたが，今年度は，生徒の希望を考慮して，中川学園調理技術専門学校と茨城理容美容専門学校からキャリア・アドバイザーを招聘（しょうへい）し，仕事に就くための資格等について話を聞いた。（**資料２**）キャリア・アドバイザーには，仕事のやりがいや喜び等に関する内容を話に盛り込むことを依頼し，学ぶことや働くことの意義について生徒が考えられるよう配慮した。（**資料３**）

資料２　キャリア・アドバイザーの講話

資料３　生徒の感想

○　講師の先生が，「中学生のときもっと勉強したかった。」とおっしゃっていたが，私もがんばって勉強して夢をかなえたい。

○　自分の夢をもつとともに，人の幸せを願うことは仕事に就く上で大切だと分かった。

専門学校の講師は，職業の専門家であると同時に教えることの専門家でもあるので，多くの資料を活用し，分かりやすく説明を進めてくれた。地域の職業人の他に，上級学校から講師を招くことで，職業に関する話を聞く会を，より豊かな学びの機会にすることができた。

ウ　体験活動の事前指導・事後指導の充実（第２学年における工夫）

第２学年職場体験活動では，事前指導と事後指導を充実させることで，体験活動の効果を高められるよう配慮した。

(ｱ) マナー研修会の開催（事前指導の工夫）

事前学習として職場体験前マナー研修会を実施した。受入れ事業所の一つである株式会社カスミから，新人研修の担当者を講師に招き，あいさつの仕方や話し方，仕事をするに当たっての心構えなどについて研修を受けた。（**資料４**）単なるマナー講座で終わらないようにするために，仕事のやりがいや企業として他社にはない独自性などについての話も講師に依頼した。このことにより，生徒は働くことの意義について考えるヒントを得ることができた。（**資料５**）また，地域にある企業との積極的な連携を図ることで，地域資源の教育力を有効に活用することができた。

資料４　マナー研修会の様子

資料５　生徒の感想

○　カスミで働く人たちはあいさつが自慢で，自分の仕事に誇りをもっているのがすごい。

○　マナーは，職場体験だけでなく，日々の生活や社会に出たときに大切になることが分かった。

(ｲ) 職場体験発表会の工夫（事後指導の充実）

事後の学習として，職場体験活動で学んだことや仕事をした感想を中心に発表した。職場体験を行った２年生だけではなく，保護者や体験活動の受入れ事業所も参加した。また，今回は体験した事業所のよさを紹介させる機会も加えた。

生徒は働いたことへの誇りを再認識するとともに，仕事に対する理解をさらに深めることができた。（**資料６**）

資料６　職場体験発表会の様子

(ｳ) 職場体験だよりを使った広報活動（事後指導の工夫）

資料７ 職場体験だより

子供の心にストライク！！

○○○○保育園

住所
電話番号

私たちが職場体験で行った○○○○ 保育園の園児たちは，とても明るく素直で，元気にあいさつをしてくれます。先生方もとても優しく園児たちに接しています。私たちは先生方と一緒に鍵盤ハーモニカを教えるのを体験させていただきました。先生方の教え方はとても丁寧なので，園児たちがすぐに覚えられるんだなと思いました。○ ○ ○ ○保育園になら安心してお子様をあずけることができます。子どもの笑顔溢れる保育園です。

生徒に学びを振り返らせるとともに，受入れ事業所への感謝の気持ちを学校から発信することをねらいとした職場体験だよりを作成した。（**資料７**）体験した事業所のよさを紹介するキャッチコピーを見出しにして，事業所で学んだ内容や感謝の言葉，事業所を応援するメッセージを書き記した。完成した職場体験だよりは受入れ事業所に配布するとともに，学区内の家庭にも回覧した。職場体験活動の様子を地域に発信することは，地域に中学校の取組について理解を深めてもらうとともに，協力事業所を地域に紹介することで，生徒を地域社会全体で育てようという気運を高める契機になった。

５　研究のまとめと本校からの提言

(1)　研究の成果

①　生徒の実態に即した指導計画の改善を行うことは，目指す生徒像の実現に向けたキャリア教育の手立ての講じ方とプロセスを教師が理解し，実践する上で役立った。また，体験活動を生かしたキャリア教育の工夫により，生徒たちは，コミュニケーション能力を高めるとともに，どんな困難に出会ってもそれを克服し，夢に向かって努力していこうという気持ちをもつことができた。

②　体験活動と特別活動，道徳の時間をキャリア教育の視点で「つなぐ」ことにより，生徒の「勤労観」や「職業観」についての意識や考えが途切れることなく，日常生活の中でも持続させ，深めさせることができた。

③　教師のキャリア教育に関する理解が深まり，共通の考えをもって実践に取り組むことができるようになった。

(2)　研究の課題

①　将来の夢や希望をもたせるだけの指導にとどまらず，夢や希望をもち続けることができるような中長期的な展望のもとに実践する取組も考えていかなければならない。

②　キャリア教育に関する評価の方法についての研究を進めていきたい。

(3)　本校からの提言

①　「キャリア教育の視点を取り入れた指導計画等の改善を通して，教師自らの指導を見つめ直し，生徒のキャリア発達のために生かしましょう。」

教師自身が，社会環境の変化を敏感に感じ，目の前にいる生徒の実態を考慮しながら，将来，社会的に自立した若者となるように育てるために「今，生徒に必要なことは何か，教師として何ができるのか」を常に議論し，指導計画と自己の見つめ直しを行うことが重要である。

②　「体験活動を生かしたキャリア教育の工夫を進めましょう。」

個々の生徒の望ましいキャリア発達を支援することは非常に大切であるが，学級や学年で高め合う仲間づくりと人間関係形成能力の育成の大切さを生徒一人一人に実感させることが重要である。また，体験活動を生かしたキャリア教育の工夫は特別な取組ではなく，日頃の授業において実践可能な内容であると考える。

高等学校実践事例１：「総合的な学習の時間を中心としたキャリア教育の取組」

県立取手第二高等学校　URL:http://www.toride2-h.ed.jp/

１　学校の概要

利根川の雄大な流れを臨む小高い丘にある本校は，大正11年北総実修学校の女子部として創立され，普通科と家政科を有している。今年度は，各学年普通科３学級家政科１学級で，生徒数は449名である。「考究せよ 忍耐せよ 実践せよ」の校訓に基づき，自主的・積極的な人間の育成に力を入れている。また，生徒の個性に応じた教育を実践し，生徒一人一人の進路　実現・自己実現を図る教育を推進している。

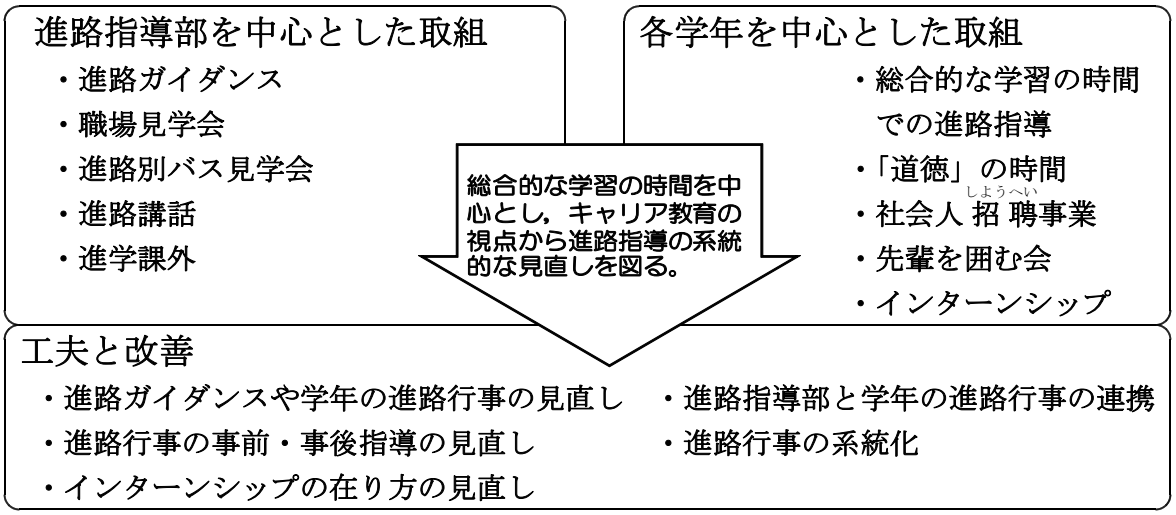
２　キャリア教育の取組における工夫と改善の概要

(1) 工夫と改善の方向性

本校では従来，学年や進路指導部による様々な進路学習，社会人招聘授業や先輩を囲む会などを実施していた。しかし，これらの活動の系統性が弱く，生徒の主体的な進路選択を促すものとして十分に機能していなかった。

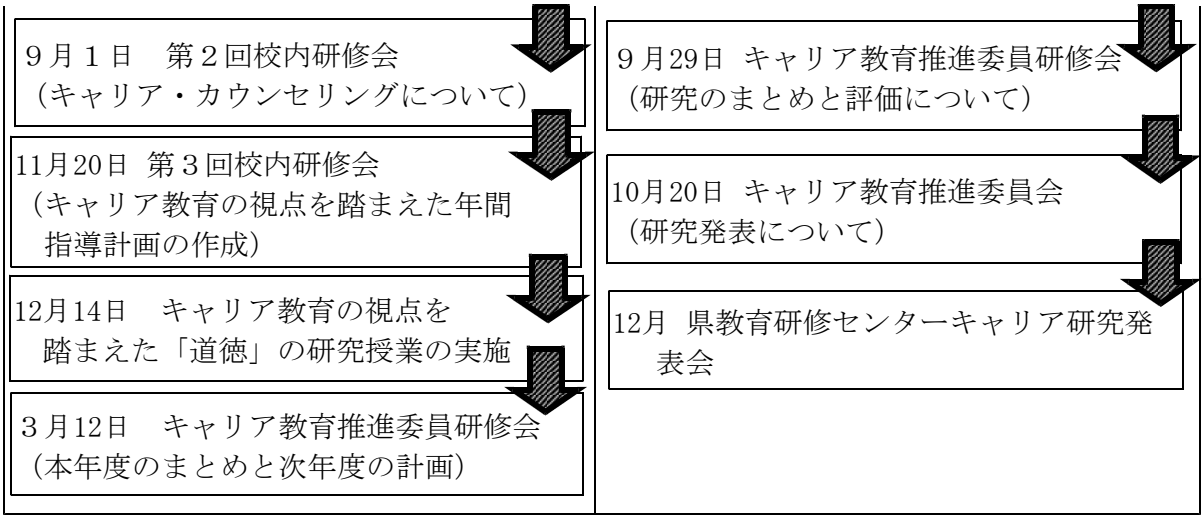
そこで，総合的な学習の時間を中心として，各活動を関連付け，体系化し，組織的に実施する計画を作成した。

(2) 工夫と改善の概要



(3) 平成21・22年度の取組

平成21年度	平成22年度
６月～８月 ・キャリア教育推進委員会準備会 ・キャリア教育推進校内研修会 ・キャリア教育推進委員会の設置 ・キャリア教育全体計画の作成	４月 ・キャリア教育研究方針作成 ・キャリア教育の視点を踏まえた年間指導計画の作成
６月30日　第１回校内研修会 （キャリア教育について・ＫＪ法的手法）	６月29日　第４回校内研修会 （キャリア教育の実施と評価について）



３　特に力を入れてきた取組

(1) キャリア教育推進のための組織づくり
(2) キャリア教育に対する教職員の共通理解の形成
(3) 各学年におけるキャリア教育の計画的・系統的な推進

４　実践内容

(1) キャリア教育推進のための組織づくり

① キャリア教育推進委員会の設定

本校では各学年主任・各教科主任・各部長が所属する校務運営委員会がある。しかし各学年・教科・部からの案件の検討機関であるため，キャリア教育全体の企画・立案を行う別組織が必要であった。

そこで，キャリア教育研究主任を選任し，進路指導主事，キャリア教育研究主任，各学年１名の担当研究員（キャリア教育研究主任が，第２学年を兼務）が中心となってキャリア教育全般に対する企画・立案を行うキャリア教育推進委員会を設けた。

校務運営委員会は，各学年の担当研究員が企画・立案した事項を検討し，職員会議での周知を図る。担当研究員は，各学年の中心としてキャリア教育を進めていくとともに，各会議を通じて得られた意見を，各学年の実践へとつなげる役割ももつ。

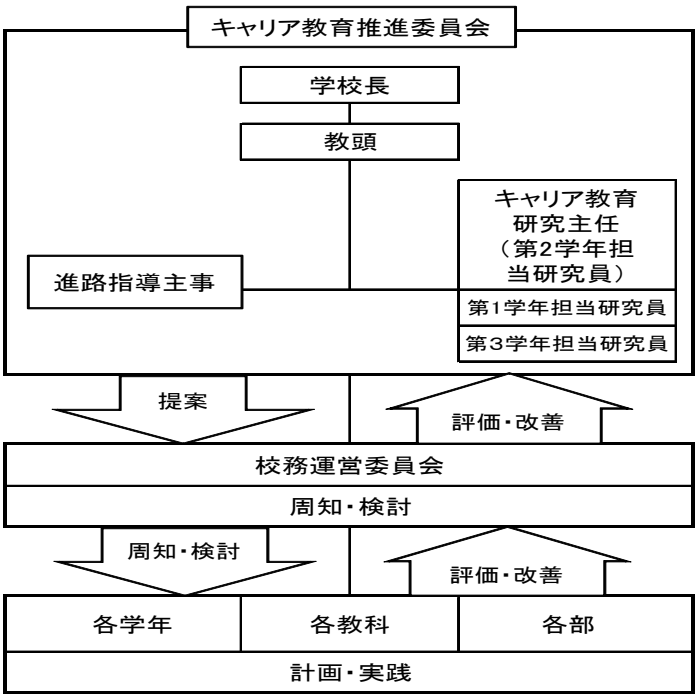


図１　県立取手第二高等学校キャリア教育組織図

② キャリア教育全体計画の作成

本校の全体計画を作成するに当たっては，家政科と普通科のバランスを心掛けた。家政科は，専門学科として伝統的に産業教育を進めており，本校独自のデュアルシステムを構築したり，高大連携事業を進めたりするなどの活動を行っている。

一方普通科では，進路指導部を中心に進路ガイダンスや職場見学会，進路別バス見学会などを実施してきたが，必ずしも生徒の進路選択に生かされているとは言い難い現状があった。

そこで，家政科と普通科の間に生じるキャリア教育に対する生徒の意識の差を考慮し，本校独自のキャリア教育全体計画を作成した。

(2) キャリア教育に対する教職員の共通理解の形成

① キャリア教育に関する校内研修（３回）の実施

・第１回 キャリア教育推進のためのステップと自校の取組の見直し

県教育研修センター指導主事を招き，キャリア教育の講義とＫＪ法的手法を用い，自校の取組をキャリア教育の視点から見直す研修を行った。

・第２回「キャリア・カウンセリング」

県教育研修センター指導主事からキャリア・カウンセリングを学ぶ研修を行った。

・第３回 キャリア教育進捗状況の報告と年間指導計画の作成

キャリア教育推進委員会が企画し，研究の進捗状況の報告とキャリア教育の視点を踏まえた各教科の年間指導計画の検討を行った。

② 「学習プログラムの枠組み(例)」の自校化

当初は家政科と普通科の２種類の枠組みを作成することが考えられたが，学校全体としての汎用的な枠組みとすることにした。

③ キャリア教育の視点を盛り込んだ各教科の年間指導計画の作成

第３回の校内研修で，表１に示す手引きを用い，各教科の年間指導計画を作成した。研修では，学習する単元の内容が，キャリア教育で育成すべき具体的な能力・ 態度のどれに当てはまるかを検討しながら作成した。

研修は，職員が日々の授業で行っていることが，キャリア教育の一環であるとの自覚を深めるためにも有意義であった。

表１　キャリア教育の視点を踏まえた年間指導計画作成の手引き

①下記の記入例をもとに，各年間指導計画の実施状況欄に，それぞれの単元がキャリア教育のどの目標を具体化するものか当てはめて記入してください。
②年間指導計画は，各教科のファイルに入れて研究協力員に渡してください。
③年間指導計画が多岐にわたる教科は，各先生方が個別に記入していただいても結構ですが，教科で話し合って記入することも研修の一環かと思いますので，時間がある限り教科でお願いします。

指導ｸﾗｽ	指導教科	単位数	指導者
2年 1組	世界史 A	2	○○ ○○ 印

予定（月）	大単元名	小単元名	予定時数	実施 状況	実施 時数
4 月	文明の起こり	1. 地球と人類	2		
		2. 古代文明の形成	2	A−1−②	
5 月	諸地域世界の形成と交流	1. 東アジア世界	10		

※教科の特徴に応じて，必ずしも当てはまる単元ばかりではないと思います。
例のように，幾つかの単元にまたがった状態でもかまいません。
単元に当てはまるキャリア目標がない場合は空欄で結構です。
また，1枚の学習指導計画に1つの目標でもかまいません。

(3) 各学年におけるキャリア教育の計画的・系統的な推進

① 各学年のキャリア教育目標の設定

平成21年度には，キャリア教育推進委員会において，生徒に身に付けさせたい能力・行うべき活動などを検討し，各学年のキャリア教育目標を設定した。

平成22年度には，スローガンを作成し，各学年のキャリア教育目標を図式化し，より実効性をもたせた研究方針を決定した。

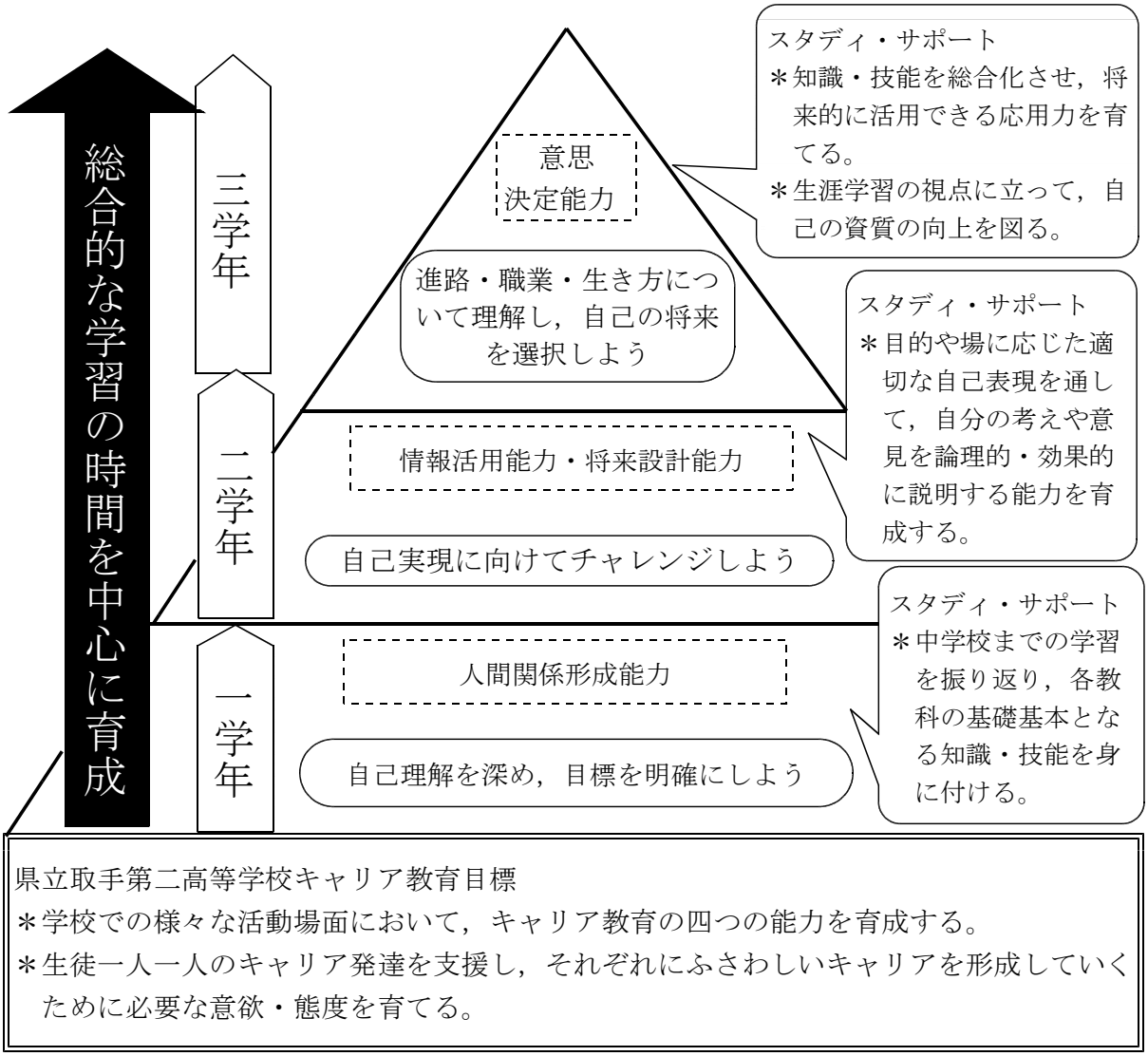


図２　平成22年度　県立取手第二高等学校　キャリア教育の概要

② 第１学年：「道徳」を中心とした人間関係形成能力の育成

ア　取組の方向性

本県では第１学年の総合的な学習の時間に「道徳」を位置付けている。そこで，道徳的価値についての自覚を深めることを通し，人間関係形成能力を育成するものとした。また，入学当初の新しい環境に慣れる必要性や，進路決定に向けてのコース選択等を配慮し，以下の３点の重点項目を設定した。

（ア）規範意識の向上

集団や社会とのかかわりの中で，集団の中での自己の役割や遵法精神の大切さの

自覚を促すことを通して，規則を守ることの重要性に気付かせ，どのように行動することがふさわしいのか，生徒自身が判断する能力を養う。

（イ）進路意識の向上

他の人とのかかわりの中で目標や理想をもたせること，粘り強い意志と態度を育てることを通し，第２学年からのコース選択に向けて自己の探求や進路に対する意識を高める。

（ウ）コミュニケーション能力の向上

他者とのかかわりの中で相手の人格を認め，敬愛する気持ちを具体的に示す礼儀や，相手への思いやりの心と態度を育む。同時に，開かれた心をもって他者の気持ちを理解することで，コミュニケーション能力の向上を目指す。

イ　取組の具体的内容（授業実践）

・他者の様々な意見に触れ，自己の在り方生き方について自覚させ，規範意識の向上につなげた。
・二人一組にして，自己を振り返えらせるとともに他者から見た自己のイメージや適性を知ることで自己探求を深めた。
・職業調べと絡め，自己の適性や将来の目標について意識を高めた。
・グループ学習，話の伝え方や聞く態度，相手の意見を認めることの重要性を学ばせ，良好な人間関係の構築を目指した。

表２　平成22年度　道徳年間指導計画（抜粋）

	資料等	主　題
4月	ありがとうのゴルフ	感謝と思いやり
	16歳のひとりごと	自主自立，誠実・責任感
5月	花の生き方	公徳心，社会連帯
	“人生とは旅であり，旅とは人生である”	個性の伸長
	大切なことは	礼儀
6月	楽しいもの	真理愛，理想の実現
	球技会練習会	友情・信頼，役割と責任，協力
	霞ヶ浦の帆引き船	強い意志と態度
	友と一緒に	役割と責任，協力
	ハーモニー	友情・信頼
7月	アフリカの真珠	国際理解と貢献，人類愛
	命はゼロからつくれない	自然愛護，畏敬の念
9月	だれかのために	基本的生活習慣，態度・節制
	心温まる旅	国際理解と貢献，人類愛
	命との対話	弱さの自覚と克服，生きる希望
	コミュニケーション講話1	国際理解と貢献，人類愛

ウ　生徒の変容（コミュニケーション講座を中心に）

２学期に２回，外部講師によるコミュニケーション講座を行った。

（ア）第１回（９月８日）

元ＮＨＫ放送研修センターコミュニケーション講師の渡辺晋太郎氏から，コミュニケーションの本質や機能，誤解が起こるメカニズムなどについて話を聞いた。

（イ）第２回（10月４日）

メンタルトレーナーの市川浩子氏から，ＴＡ交流分析の手法を用いた実践的なコミュニケーションの方法について話を聞いた。

生徒の感想から，自他理解に対する関心の高まりがうかがえた。更に授業を進める中で，学校や学級における人間関係の改善が見られるようになった。

生徒の感想
・コミュニケーションをとることで就職や日常生活のリズムにかかわってくることを知り，これからもコミュニケーションを大切にしていきたいと思いました。
・今の言葉づかいを見直してみようと思いました。
・相手を認め，受け入れることで新しいことが始まるということが分かり，次から，そうしようと思いました。
・相手の話を聞く時には，ちゃんと全身で聞こうと思いました。

③　第２学年：インターンシップを中心とした情報活用能力・将来設計能力の育成

ア　取組の方向性

第２学年の総合的な学習の時間では，インターンシップを中心に事前・事後の取組の充実を図ることで情報活用能力・将来設計能力の育成を目標とした。

イ　取組の具体的内容

（ア）事前指導

４月に，夏季休業中に実施するインターンシップやオープンキャンパスに備えて，進路に関するアンケートを行った。

また独立行政法人労働政策研究・研修機構発行の職業レディネス・テスト〔第３版〕を実施し，自分の目指す職業についての意識付けを行った。

インターンシップへの事前指導では，参加する生徒に対して，今年度の企業ヒアリングの状況を説明し，インターンシップの目的やマナーなど，参加に当たって気を付けることを自覚させた。

（イ）インターンシップの実施期間

各担当の教員が企業への挨拶，生徒の体験の様子を視察した。

（ウ）事後指導

生徒へのアンケートと事業所への礼状の書き方の指導を通し，自己の振り返りを行わせた。

ウ　生徒の変容

インターンシップに対する生徒のアンケートはおおむね良好で，「将来の進路を考える上で効果的だったか」という問いに対しては，36人中34人が「進路選択の参考になった」と答えていた。全体的な感想にも，「仕事の大変さ，厳しさ，楽しさを実感した」等の記述が見られた。

④　第３学年：進路カルテ及び学習形態の見直しによる意思決定能力の育成

ア　取組の方向性

第３学年では，総合的な学習の時間の活動を通して２年次までの取組を振り返り，自分の意思と責任において進路を主体的に選択する意思決定能力の育成を目指す。

イ　取組の具体的内容

（ア）進路カルテの作成

進路カルテとは，生徒の進路情報の共有化を図るために作成された，生徒一人一人の進路学習の足跡データである。各自の個票とホームルーム全体の表，進路希望別の表の３種類が使用目的に応じて取り出せるよう，生徒の進路学習の経過を記録した。

データは学年の進路指導

資料１　進路カルテ（個票）

組	番	氏名	1年評定	2年評定	3年評定	平均	欠席

1年	進路ガイダンス	
	バス見学会	
2年	進路ガイダンス	
	バス見学会	
3年	総合的な学習の時間	大学･短大　　専門学校　　就職
	進路希望	
特別活動		
検定		
特記事項		

部員が生徒の活動状況がある度に更新し，校内ネットワークを通し，常に最新のデータが指導に生かされるようにした。

（イ）学習形態の見直し

進路指導の効率化と生徒一人一人に対応した指導の充実を図る目的で，これまでホームルームごとに行っていた総合的な学習の時間を,生徒の進路希望別に行うこととした。

指導については，大学・専門学校・就職ごとに中心となる教員を決めて，学年全体で指導に当たる形態とした。生徒の進路情報の共有化の手段としては進路カルテを活用し，各学年の教員が，学年の生徒全員の進路動向を把握できるようにした。

同じ進路希望をもつ生徒同士が集まることによって，共通の悩みや問題点が分かり，学び合いを通し，進路意識の高まりが見られた。教員も一人一人の生徒に進路実現に向けて，面接や小論文の指導等に効果的な指導が行えるようになった。

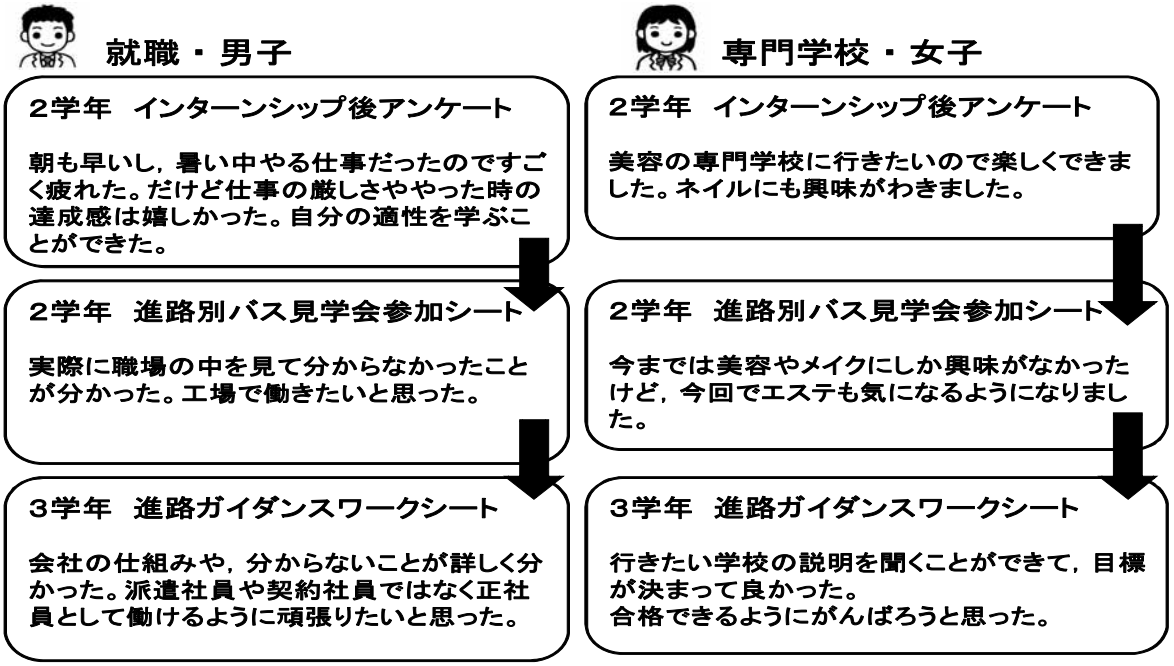
ウ　生徒の変容

生徒が，キャリア教育を通して身に付けた能力や勤労観・職業観の変容を把握できるものとしてワークシートを作成させた。生徒はそれをファイリングし，進路カルテと共に自分の進路の歩みを振り返るためのポートフォリオとした。

また教員は，これらを基にキャリア・カウンセリングを実施し，生徒の主体的な進路決定の支援を行った。

図２は，生徒が記載したポートフォリオの抜粋である。第２学年のインターンシップから進路別バス見学会，第３学年の進路ガイダンスを経て，生徒の職業観・勤労観が変容していく過程が分かる。生徒自身にとって，キャリア教育で得た知識を統合することにより自分の進路を具体化することができた。

図２　ポートフォリオ抜粋



またキャリア教育を進めるに当たり，基礎学力の充実が必要である。そこで，中学校までの既習事項の振り返りや高校で学んだことを表現する，本校独自のスタディ・サポートを実施した。

５　研究のまとめと本校からの提言

(1) 研究のまとめ

① キャリア教育推進のための組織づくり

校務分掌として，キャリア教育研究主任及びキャリア教育推進委員会を設置したことは，キャリア教育の企画・立案を迅速に進める上で有効であった。

② キャリア教育に対する教職員の共通理解の形成

校内研修を通し，キャリア教育に対する教職員の共通理解が形成され，学校全体で指導に当たる協働性が図られた。

③ 各学年におけるキャリア教育の計画的・系統的な推進

各学年でキャリア教育の目標を設定しスローガンを作成したことで，行うべき指導内容が明確になり，指導に一貫性をもつことができた。また，総合的な学習の時間を中心としてキャリア教育を行ったことで,生徒が主体的に将来を考えるようになった。

(2) 本校からの提言

① 「ＰＤＣＡサイクルを活用しよう。」

キャリア教育は，学校の教育活動全体で行うものである。そのため，カリキュラム・マネジメントの視点でＰＤＣＡサイクルを活用し，自校が目指す生徒像に各活動が迫っているか，常に見直していく姿勢が大切である。

② 「ワークルールなどの社会・経済の仕組みについての理解の促進を図ろう。」

キャリア教育を推進していく上で，ワークルールなどの社会・経済の仕組みを理解させることの必要性をより強く感じた。「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（中央教育審議会)」に示されたように，社会・経済の仕組みについての理解の促進を図ること及びそれを実施する時間の確保が，キャリア教育を進める上で重要である。

高等学校実践事例２：「コミュニケーション能力を育成する『書かせる指導』とインターンシップの工夫と改善」

県立結城第一高等学校　URL: http://www.yuki1-h.ed.jp/

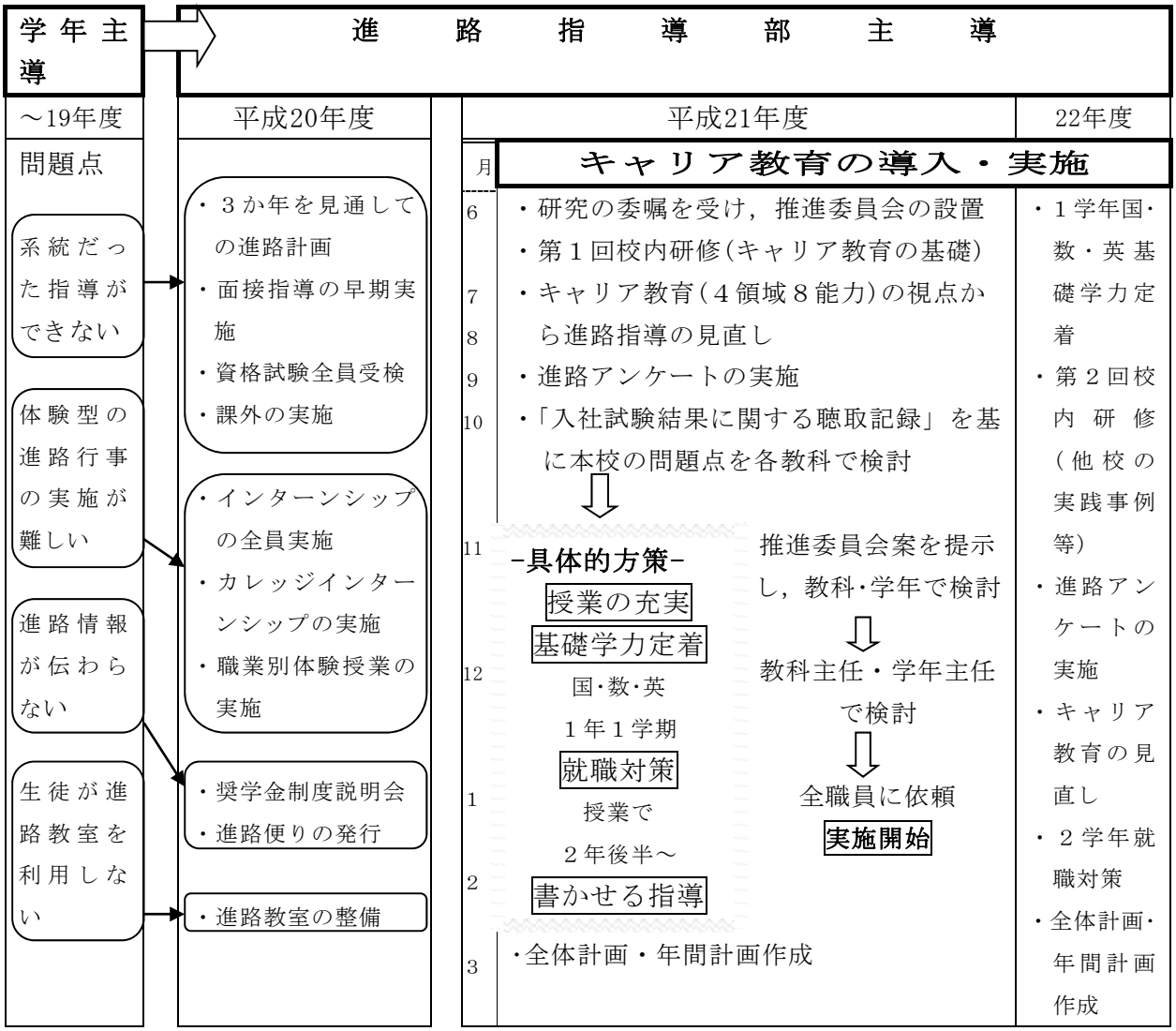
１　学校の概要

各学年４学級，全校生徒414名の男女共学の全日制普通科高校である。緑豊かな広い敷地の中にある創立113年の伝統校で，水戸線沿線の住宅地に立地している。

卒業生の進路は就職と進学が約半々であるが，進学する経済的余裕がなく，就職状況も厳しい中，「就職準備」にならざるを得ない生徒もいる。また，部活動はあまり盛んではなく，アルバイトをしている生徒が少なくない。

２　キャリア教育の取組における工夫と改善の概要

(1) 本校の進路指導とキャリア教育の歩み



(2) 本校のキャリア教育プログラムの概要

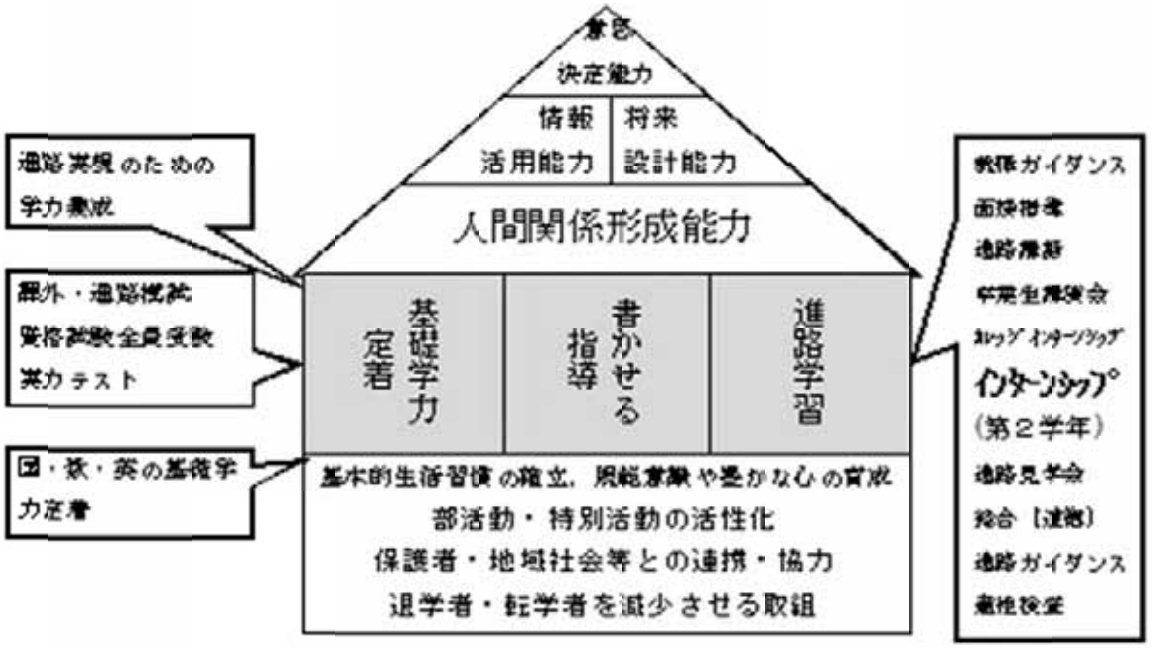


図１　キャリア教育プログラム概要

普通科である本校にとっては基礎学力の定着が課題である。そこで「基礎学力の定着」を本校キャリア教育の一つの柱としている。また，コミュニケーション能力の育成を目的とする「書かせる指導」を核とし，「進路学習」と合わせた三本柱でのキャリア教育を実践している。

３　特に力を入れてきた取組

(1) 書かせる指導の充実

(2) インターンシップの工夫と改善

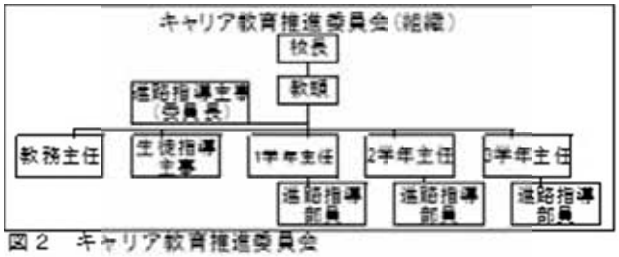


図２　キャリア教育推進委員会

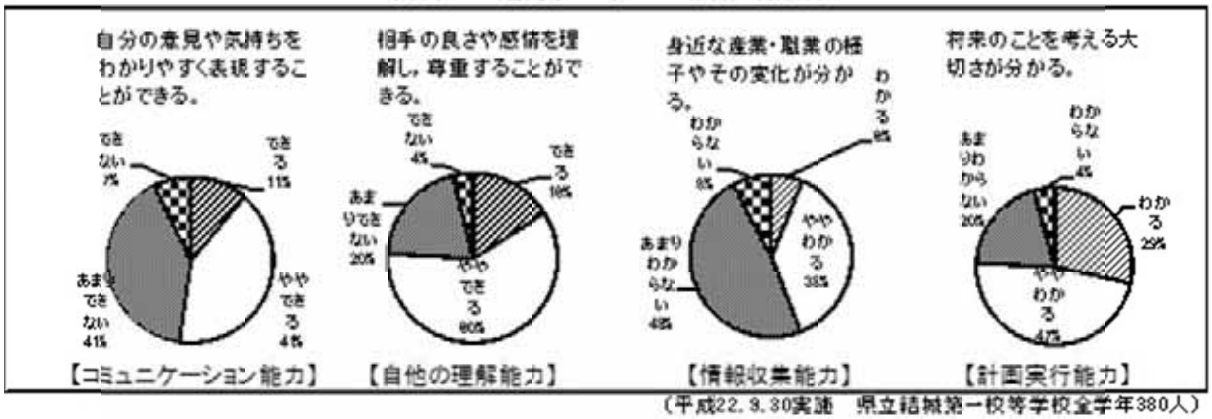
４　実践内容

平成21年度に研究の委嘱を受けたことを機にキャリア教育推進委員会を立ち上げ，職員のキャリア教育に関する意識を高め，共通認識をもつために校内研修を実施した。

まず行ったことは，本校の進路指導をキャリア教育の視点から見直すことである。その結果,「新しい行事・活動は取り入れず，従来の行事・活動を検討しながら継続すること」と「インターンシップは，キャリア教育の諸能力を育成するために非常に有意義であるので，今後も全生徒を対象に実施していくこと」が本校キャリア教育の方針として定まった。

次に，生徒の実態を知るためのアンケート調査を行った。その結果「相手を尊重するが自己表現が苦手」で「将来のことを考えようとするが，仕事に関しての知識が不足している」本校生の意識が浮かび上がった。

資料１　進路アンケート結果（抜粋）



（平成22.9.30実施　県立結城第一校等学校全学年380人）

さらに，平成21年度の就職試験の結果から，「基礎学力」と「コミュニケーション能力」の不足が深刻な問題として表面化した。

具体的方策
・通常の授業の充実
・国・数・英→1年1学期は基礎学力の定着
・2年後半から就職対策を授業に取り入れる
・書かせる指導の充実

以上の問題点を解決するために，キャリア教育推進委員会で「具体的方策」の案をまとめ，各教科・各学年で検討の後，平成22年2月より実施している。

(1) 書かせる指導の充実

他者の意見や考えをしっかり聞くこと，そして自分の考えをまとめる訓練を継続することが本校生徒のコミュニケーション能力を育成するため必要であるとの観点から，「書かせる指導」の充実を本校のキャリア教育の一つの柱とした。

講話等の内容を書き留めながら集中して聞いて他者の意思等を的確に理解し，感想を書くことを通して，自己の思いや意見を適切に伝える訓練を継続した。

① 目的

ア　メモを取りながら集中して聞く力を育成する。

イ　自分の考えや思いを整理し表現する力を培う。

ウ　自分の考えや思いを表現することにより，自己理解を深め，コミュニケーション能力を育む。

② 書かせる行事

進路行事を中心に年度当初に年間計画で設定する。

表１　書かせる行事

平成22年度書かせる行事		回数		
		1年	2年	3年
進路行事	進路講話（1・2学期）	2	2	2
	卒業生講演会	1	1	
	インターンシップ報告会	1	1	
	進路見学会	1		
	カレッジインターンシップ		1	
	ガイダンス（7・2月）	2	2	1
その他の講話（交通・薬物・性教育・携帯電話）		4	4	4

③ 書かせる時間

各部・学年が相談し，書く時間を確保する。例えば，６時限目に進路講話を実施する場合は，帰りの掃除やＳＩＲの時間計25分を書く時間に充てるようにする。

④ ワークシート

ア　進路行事は進路指導部が，その他の講話は担当する部が作成する。

イ　学年と相談しながら，生徒が書きやすいように生徒の実態に合ったワークシートを作成する。また，講師と事前に打ち合わせをして，書かせる項目をいく

つか事前に印刷し，生徒がメモを取りやすいように工夫する。

⑤　指導上の留意点

ア　スタート時は書く分量にこだわらないが，徐々に増やし，ある程度の量を書かせるよう に する。

イ　定められた量を書かなければ帰宅できない等，生徒全員対象にある程度強制的に書かせるように指導する。

⑥　評価の方法

ア　担任または副担任が確認し確認印を押す。書かれた内容に関して段階的な評価は実施せず，コメントを書く程度にする。

イ　教室での掲示や進路便りの掲載等を通して，生徒の書いた内容を発表する機会を設ける。

⑦　ポートフォリオの作成

全学年生徒にファイルを持たせ，３年間を通して書いたワークシートや進路関係の個人的な資料をとじ込ませる。

⑧　実施した結果

資料２　進路講話「社会人になるにあたって」生徒ワークシート

日時：2010/4/16(金)6時限　　担任印

講師名：(株)さんぽう専任講師　高部　静男　先生

1 正社員と非正社員について考えよう

2 "働くこと"と"ライフプラン"の関連について考えよう

3 社会人になるにあって高校生の今から意識しておくこと

4 感想

表２　生徒の変容

	平成21年度	平成22年度
聞く態度	・メモを取りながら真剣に聞く生徒が増えた。 ・目立った私語がなくなった。	・私語をせず静かに聞いている。 ・メモを取らない生徒もいる。
書く内容・量	・稚拙で語彙が乏しく誤字の目立つものが多かった。 ・100字以上書ける生徒は全体の半分程で，書こうとしない生徒も少なくなかった。	・誤字が目立つものもあるが，内容的に充実したものが増える。 ・３年生は，ほぼ全員が限られた時間内で200字以上書けるようになる。

⑨　生徒・教員へのアンケートから

生徒へアンケートを実施したところ，以前に比べて，相手の話を聞いて理解し，場に応じたコミュニケーションを図れるようになったと感じている生徒が半分を超えている との結果がでた。

しかし，自己表現することに関しては十分な成果を生徒たちは感じてはい

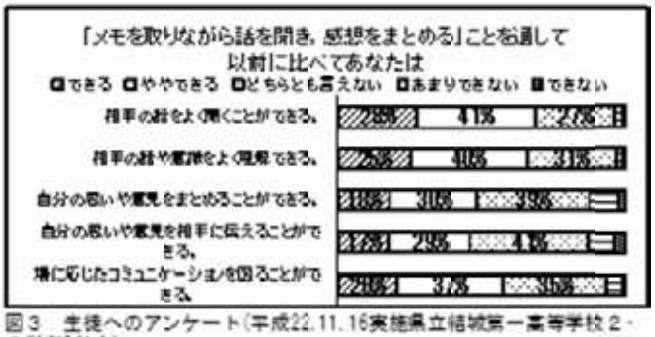


図３　生徒へのアンケート(平成22.11.16実施県立信城第一高等学校２・３学年241人)

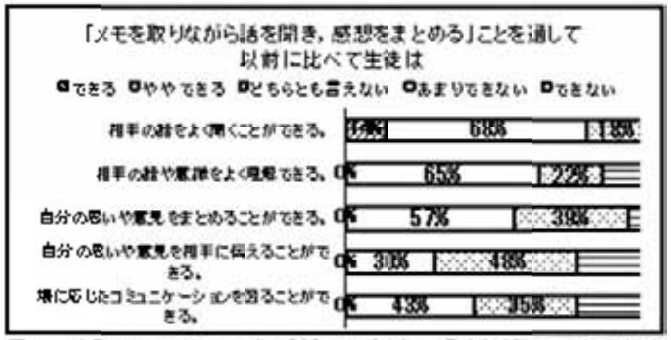


図４　教員へのアンケート（平成22.11.16実施　県立結城第一高等学校教員30人）

ないことが分かる。

教員の評価はより厳しいものである。生徒の「聞く力」の進歩を認めてはいるものの，「コミュニケーション能力」の向上にまでは至っていないと考えていることが，アンケートの結果から読み取れる。しかし，

・文章を書くことへの抵抗が少なくなり，作文指導にも生かせた。
・習慣づけることができればかなりの効果がある。
・ほとんどの生徒が感想をまとめることができるようになった。
・感想をまとめるという作業を何度も積むことで，自己を見つめ何をすべきか自ら発見，行動できるようになる。

など，肯定的な意見も多くあげられた。

(2) インターンシップの工夫と改善

本校では平成20年度に初めて２学年生徒全員のインターンシップを実施した。慣れない中，約50の受け入れ事業所の開拓や準備で忙しく，生徒への十分な事前・事後指導をすることができなかったことが反省点として挙げられた。インターンシップにキャリア教育の４領域８能力全てを育成することに役立つとの意見が多く，全員実施を継続することになった。

平成21・22年度のインターンシップでは，全員実施を実現しつつ，事前学習と全員が発表する報告会等の事後指導を充実させた。

①　組織

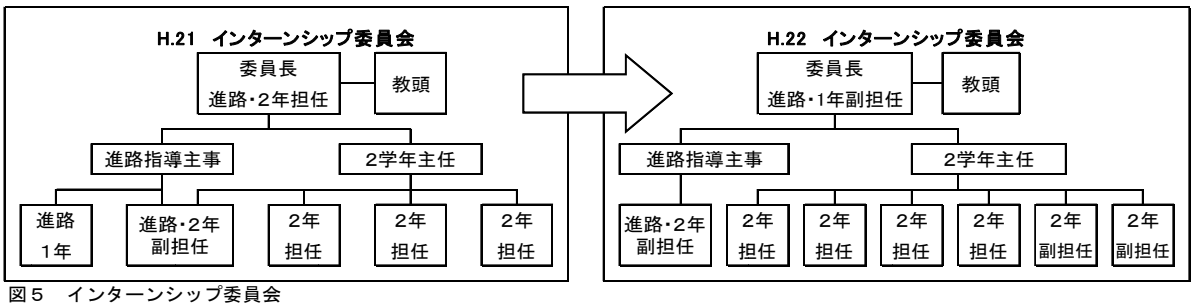


図５　インターンシップ委員会

平成21年度の反省として，「２学年の担任が委員長を兼ねることは負担が大きすぎる」ことと「２学年スタッフ全員がインターンシップに関わった方がいい」という意見が出され，今年度は委員会の構成メンバーを変えた。

役割としては，進路指導部が事業所の新規開拓や事務的な手続きを，第２学年職員が生徒の指導を担当し，事業所訪問等は協力して行う。

②　対象生徒

第２学年生徒全員　平成21年度：126名　　平成22年度：127名

③　経緯

平成21年度は新型インフルエンザの流行，平成22年度は欠席者が多くでるなどの問題が発生したが，教員が「生徒全員にインターンシップを経験させる」という

共通認識をもち，委員会で話し合いながら臨機応変に対応したことにより，全員実施が可能となった。

平成22年度は，実務的なことはなるべく合理的に進めるようにして，教員が生徒に十分かかわる時間を確保するようにした。

表３　インターンシップ実施までの流れ

平成21年度		平成22年度	
１月	希望職種調査	４月	希望職種調査
５月	事業所への協力依頼訪問	５月	事業所への協力依頼訪問
６月	生徒への希望調査実施・調整	６月	生徒への希望調査実施・調整
７月	実施依頼文書ＦＡＸ→事業所	７月	事業所事前打合せ訪問
８月	事業所事前打合せ訪問		
10 月	当日の台風→２日間で実施	10 月	123 名３日間実施
11 月	新型インフルエンザの流行→２回に分けて実施	11 月	７名２日間実施(10 月の欠席者)

④　実施事業所

２年度ともほぼ同様である。生徒の希望職種を基に，通勤を考慮して結城市や筑西市の事業所を中心に選定した。製造業は主に本校の卒業生の就職先で，翌年の就職活動に直結している。

表４　事業所数の比較

平成21年度		平成22年度
第１次	39 事業所（97 名）	48事業所（120名）
第２次	９事業所（28名）	４事業所（７名）

⑤　事前指導

平成21年度には，インターシップの意義や重要性を集会等の際に繰り返し伝え，職業学習を取り入れることにより，インターンシップに対する生徒の意識は醸成していき，成功につながった。平成22年度もほぼ同様に事前指導を実施したが，生徒指導上問題のある生徒が目立つことから，特に挨拶等のマナー指導を各ホームルームで実施した。

表５　事前指導の流れ

平成21年度		平成22年度	
７月	①事業所提出用自己紹介カード記入	７月	①進路講話（外部講師）
９月	②心構え，注意事項等説明		②事業所提出用自己紹介カード記入
	③日誌配付，記入，事業所の確認	９月	③全体・事業所別説明
	④進路講話（外部講師）		④挨拶指導（各教室）
	⑤職業学習（授業を用いて）		⑤日誌配付及び記入，実習場所確認
10月	⑥頭髪・服装検査	10月	⑥頭髪・服装検査
	⑦持参品，当日の流れの確認		持参品，当日の流れの確認
	⑧責任者選出，連絡先等確認		⑦責任者選出，連絡先等確認
	⑨学校長講話，最終確認及び注意		⑧学校長講話，最終確認及び注意

⑥　事後指導

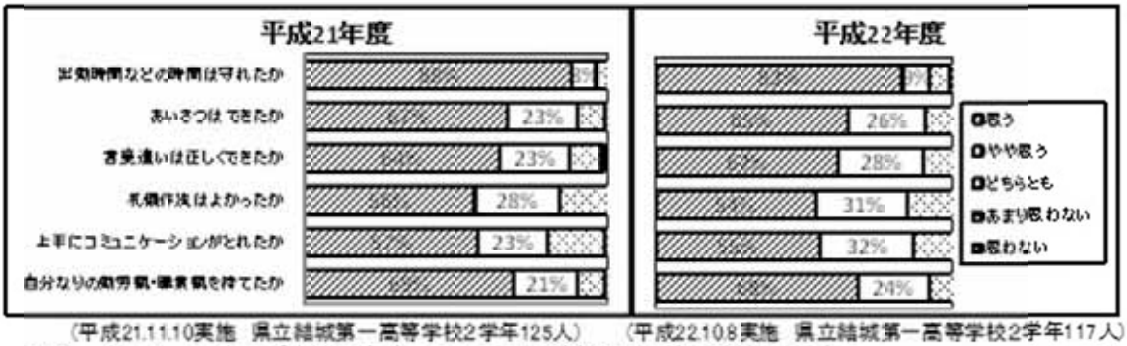
平成21年度にクラス別報告会　，全員に発表する機会を与えたところ，生徒の取組が非常によかった。平成22年度も同様に実施予定である。

表６　事後指導の流れ

平成21年度		平成22年度
10月	①事業所へのお礼状指導・礼状発送　②感想文記入	
1月	③報告会原稿記入　④クラス別報告会	
2月	⑤学年報告会　⑥１学年対象報告会　⑦感想文集作成	

⑦　生徒による自己評価

平成21･22年度ともほぼ同様の自己評価となった。ほとんどの生徒が自分なりの勤労観・職業観がもてたと思っていることから，インターンシップが非常に有意義であったことが分かる。



（平成21.11.10実施　県立結城第一高等学校2学年125人）　（平成22.10.8実施　県立結城第一高等学校2学年117人）

図６　インターンシップ直後の生徒へのキャリア諸能力に関する意識調査結果

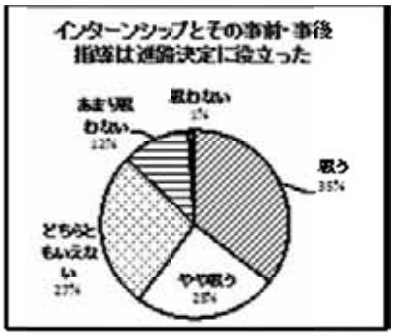


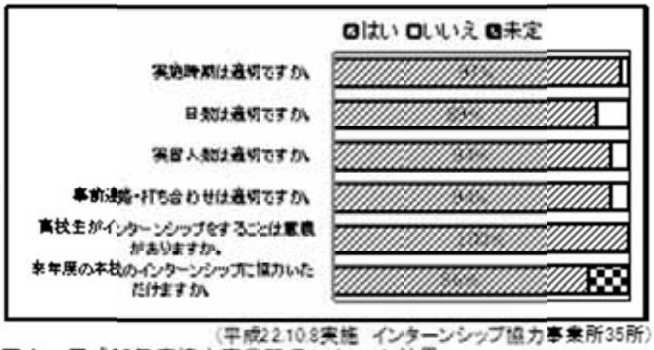
図７　インターンシップ１年後の生徒へのアンケート結果（平成22.11.16実施　県立結城第一高等学校３学年117人）

また，平成21年にインターンシップを経験した３年生に，進路選択・決定に役立ったかどうか，１年後アンケートを実施したところ，半数以上の生徒が役立ったと思っていることが分かった。生徒の意見でも次のような肯定的な意見が多かった。

・実際に働いてみることで，働くことの大変さを知ることができるし，その職業が合っているかを見つけるよい機会だと思います。
・インターンシップは将来の進路決定に大きくつながるのでとてもよいと思います。

⑧　事業所アンケート結果から

ほとんどの事業所で２年間続けてインターンシップに協力いただいたが，平成22年度の実施後のアンケートの結果を見ても，本校のインターンシップに深い理解をもって協力してくださっており，肯定的・建設的な意見が多かった。



（平成22.10.8実施　インターンシップ協力事業所35所）

図８　平成22年度協力事業所アンケート結果

⑨　教員による評価

インターンシップの全員実施をする前に大多数を占めていた否定的な意見は全くなくなり，肯定的・建設的な意見がほとんどである。

表７　教員の評価の変容

平成21年度	⇒	平成22年度
・準備が早くて良かった。 ・事前指導で繰り返し就職につながる大切なことを指導できたことが良かった。 ・インフルエンザ等に臨機応変に対応できた。 ・生徒の職業に対する意識が高まったと思う。 ・各事業所で生徒の取組が褒められることが多かった。		・全体的に大きな支障もなく実施できたので，組織や実施方法が良かったのだろう。 ・実施前は心配な点が多かったが，本番ではほとんどの生徒が真剣に取り組んでいた。 ・風邪などで欠席した生徒もあったので，事前の体調管理の指導を実施すべきであった。 ・余裕をもった頭髪･服装指導が必要だ。

５　研究のまとめと本校からの提言

(1) 研究のまとめ

①　平成22年度就職試験の結果から

３学年のスタッフがキャリア教育に真剣に取り組んだことも一因であると思うが，平成22年度の就職試験の結果は良好で，面接試験で自己表現ができずに不採用に至るケースはほとんどなかった。「書かせる指導」を通して，コミュニケーション能力がある程度育成されたと考えられる。さらに，インターンシップでの経験を進路選択・決定に生かしている生徒が多く見られた。キャリア教育の視点に立っての教育活動の工夫と改善の成果であったと思われる。

②　課題

「基礎学力の定着」を図りつつ，「書かせる指導」と「インターンシップの全員実施」を今後も継続していくことが必要と考える。

また，本校の現状を改善するために，キャリア教育の視点に立っての生徒指導を，今後更に進めていく必要がある。

(2) 本校からの提言

①　「教育活動をキャリア教育の視点で見直そう。」

コミュニケーション能力が最も必要とされている社会に生徒を送り出す高等学校では，生徒の人間関係形成能力を育成することが必要不可欠である。そのためには，各教育活動をキャリア教育の視点に立って見直し，工夫・改善を行うことが重要である。

②　「あきらめないで繰り返そう。」

生徒に，指導の意義・目標をしっかり伝え，あきらめずに指導することが大切である。生徒の意識を変えるには時間がかかる。生徒が取り組んだことや書いたものを細かくチェックし，生徒に気付かせるフィードバックが大切である。繰り返しの指導がなければ生徒の成長は望めない。生徒の変容を促すためには，教育活動を適切に評価して改善に結びつけていく姿勢が大切である。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果

各学校のキャリア教育の推進に資するために，キャリア教育の実践段階以降における取組の工夫と改善について研究を進めてきました。

具体的には，各学校の実態や児童生徒の発達段階に応じた実践と評価の工夫，全教職員がかかわるというキャリア教育の特質に基づいた改善から計画へのマネジメントの進め方，さらに，児童生徒一人一人のキャリア発達を支援するキャリア・カウンセリングの在り方について研究を進めました。

キャリア教育は，新たな取組の展開を意図するものではありません。キャリア教育の視点をできるだけ日々の教育活動に引き付けることによって，キャリア教育を身近で実効性のあるものにできること，そして，それぞれの教育活動の質を高め，より豊かなものにしていくことができることを今回の研究で確認できました。今後，本報告書に提示された内容を参考に，各学校がそれぞれの実情に合わせたキャリア教育を推進していくことを期待します。

２　今後の課題

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会　平成23年１月31日）（以下，「答申」という。）では，特に「学習プログラムの枠組み（例）」に示された「４領域８能力」をもとに，「仕事に就くこと」に焦点をあて整理を行い，「基礎的・汎用的能力」が提示されています。したがって，この「基礎的・汎用的能力」の多くは，「４領域８能力」を組み替えることでカバーできるといえます。ただし，組み替えに当たっては，各学校におけるキャリア教育の取組を十分に振り返り，本報告書で指摘（p.6参照）した問題に陥らないよう点検を進めることが重要です。

また「答申」には，各学校段階に共通するキャリア教育の充実方策が次のように提示されています。

１　教育方針の明確化と教育課程への位置付け
(1) 各学校におけるキャリア教育に関する方針の明確化
(2) 各学校の教育課程への位置付けと，計画性・系統性をもった展開
２　重視すべき教育内容・教育方法と評価・改善
(1) 多様で幅広い他者との人間関係形成等のための場や機会の設定
(2) 経済・社会の仕組みや労働者としての権利・義務等についての理解の促進
(3) 体験的な学習活動の効果的な活用
(4) キャリア教育における学習状況の振り返りと，教育活動の評価・改善の実施
３　教職員の意識・指導力向上と実施体制の整備
(1) 教職員の意識や指導力の向上
(2) 効果的な実施のための体制整備

本研究で示した方策や成果，提言が，これらの課題を解決するための各学校での取組における指針となれば幸いです。

〔主な参考文献等〕

『新訂　キャリア教育入門』　三村隆男　実業之日本社　平成20年８月
『小学校キャリア教育実践講座』　三村隆男　（財）日本進路指導協会　平成20年８月
『図解　はじめる小学校キャリア教育』　三村隆男編　実業之日本社　平成16年11月
『キャリア教育が小学校を変える！』　沼津市立原東小学校・三村隆男共編　実業之日本社　平成17年４月
『小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開案』　児島邦宏・三村隆男編　明治図書　平成18年３月
『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』　三村隆男編著　実業之日本社　平成18年７月
『キャリア教育リーダーのための　図説　キャリア教育』　仙﨑武・池場望・下村英雄・藤田晃之・三村隆男・宮崎冴子編著　社団法人雇用問題研究会　平成22年４月
『キャリア教育の系譜と展開』　仙﨑武・藤田晃之・三村隆男・鹿嶋研之助・池場望・下村英雄編著　社団法人雇用問題研究会　平成20年３月
『キャリア教育概説』　日本キャリア教育学会編　東洋館出版社　平成20年10月
『先生のためのキャリア・カウンセリング事例集』　田中直子・NPO法人　夢のデザイン塾編著　学事出版　平成20年１月
『キャリア教育が高校を変える』　山﨑保寿編著　学事出版　平成18年７月
『改めてキャリア教育とは何かを考える』（月刊高校教育2010年11月号）　藤田晃之　学事出版　平成22年11月
『職場体験学習・インターンシップの現状と学校現場の誤解』（月刊ホームルーム2009年12月号）　藤田晃之　学事出版　平成21年12月
『小中学校のキャリア教育実践プログラム』　亀井浩明・鹿嶋研之助編著　ぎょうせい　平成18年９月
『学校教育とキャリア教育の創造』　渡辺三枝子・鹿嶋研之助・若松養亮著　学文社　平成22年８月
『教育評価事典』　辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修　平成18年６月
『よくわかる教育評価』　田中耕治編　ミネルヴァ書房　平成17年12月
『総合学習とポートフォリオ評価法　入門編』　田中耕治・西岡加名恵著　日本標準　平成12年４月
『鈴木敏恵の未来教育プロジェクト』　http://www.mirai-project.net/
『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』　中央教育審議会　平成23年１月
『自分に気付き，未来を築くキャリア教育―小学校におけるキャリア教育推進のために―』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成21年３月
『自分と社会をつなぎ，未来を拓くキャリア教育―中学校におけるキャリア教育推進のために―』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成21年11月
『自分を社会に生かし，自立を目指すキャリア教育―高等学校におけるキャリア教育推進のために―』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成22年２月

『職場体験・インターンシップに関する調査研究（報告書）』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成19年３月
『キャリア教育体験活動事例集（第１分冊）』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成20年３月
『キャリア教育体験活動事例集（第２分冊）』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成21年３月
『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）』　国立教育政策研究所生徒指導研究センター　平成14年11月
『小学校　キャリア教育の手引き』　文部科学省　平成22年１月
『小学校・中学校・高等学校　キャリア教育推進の手引』　文部科学省　平成18年11月
『高等学校におけるキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）』　文部科学省　平成18年11月
『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）』　文部科学省　平成16年１月
『中学校　職場体験ガイド』　文部科学省　平成17年11月
『高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究委員会報告書』　茨城県教育委員会　平成22年１月

〔研究関係者一覧〕

１　研究助言者

早稲田大学大学院　教授　三村　隆男

２　研究協力校・研究協力員

結城市立結城小学校　教諭　深谷　典子
龍ケ崎市立八原小学校　教諭　飯島　節子
神栖市立神栖第四中学校　教諭　髙倉　紀行
同　教諭　樋口　洋美（平成21年度）
小美玉市立玉里中学校　教諭　佐久間　一郎
県立取手第二高等学校　教諭　中村　博史
県立結城第一高等学校　教諭　勝田　真紀子

３　県教育研修センター

所長　中村　一夫
次長兼教職教育課長　藤田　達人　小林　仁（平成21年度）
教職教育課指導主事　豊田　昌幸　大和田　綾子　小田部　雅子
廣澤　淳子　樫村　睦彦　柴山　修二
小沼　浩幸　谷田部　由実子　吉永　成範
中村　竜雄　永尾　剛
木村　益巳（平成21年度）　菅又　章雄（平成21年度）
加治　行雄（平成21年度）　小泉　一彦（平成21年度）

研究報告書　第72号

キャリア教育に関する研究

キャリア教育の取組における工夫と改善

平成21・22年度

平成23年３月発行

編集　茨城県教育研修センター教職教育課

発行　茨城県教育研修センター

〒309-1722　茨城県笠間市平町1410

TEL 0296(78)3212（教職教育課直通）

FAX 0296(78)2122

URL http://www.center.ibk.ed.jp/